

茶道と恋歌 (二)

— 近代の茶会において

はじめに

私は前論稿「茶道と恋歌 (一)」において、茶道における恋歌の禁止の実状について報告した¹⁾。ここでは、①恋歌を掛物に掛けることを禁ずる条項は江戸時代初期に始まり、現在までその原則が生きている事、②恋歌に関する禁止事項を設けているのは千家流の茶書に限られる事、③茶会記による分析においても茶書に見られた禁止事項が守られている事、などが明らかにされた。しかし、③については江戸時代の茶会記における使用例によって確認したのみであって、明治以降のいわゆる近代以降の茶会については考察を行なっていない。

そこで本論稿では、明治以降の茶会記を用い、恋歌が掛けられた茶会を取り上げてその掛物が選ばれた理由を明らかにすることを目

的とする。

本論に入る前に、先学によって明らかにされた近代茶道の歴史と特徴を簡単にまとめておこう。

明治維新後の茶道史については、既にいくつかまとまった著作物がある。原田伴彦『近代数寄者太平記』²⁾、熊倉功夫『近代茶道史の研究』³⁾、同『近代数寄者の茶の湯』⁴⁾、同編『茶道聚錦』⁵⁾ 6 (近代の茶の湯)、鈴木皓詞『近代茶人たちの茶会—数寄風流を楽しんだ巨人たち』⁶⁾などが挙げられよう。これらを参考にその歴史を以下に概括する。

明治維新による政変により、茶道界は大きな打撃をうけた。これはひとり茶道に限ったことではなく、能楽・香道・歌舞伎など現在では「日本の伝統文化」と称されるものの多くが経営困難な状態に陥ったといわれている。そんな中、茶道界においては、明治五年

岩井茂樹

(二八七二)に裏千家十一代家元玄々斎宗室をはじめとする三千家が「茶道の源意」という一文を草して「遊芸稼ぎ人」というレッテルを貼ろうとした京都府に抗議し、遊芸からの脱出をはかろうとした。熊倉功夫氏は、この遊芸からの脱出こそが、近代茶道の出発点であったとしている⁽²⁾。

明治五年における立礼式の創出、そして明治十年代に盛んになる神社仏閣における献茶式など様々な努力が茶道の家元を中心になされた。

しかし、茶道の復興は茶家とは別の方向から展開した。その担い手は、新興財閥、政府高官などを中心とした道具蒐集家たち、すなわち「近代数寄者」と呼ばれる人々であった。当初、彼等の目的は道具(美術品)の蒐集であった。だが、次第にそれを茶会において披露するといった形が出来上がっていく。これが明治三十年前後のことである。

やがて、近代数寄者たちは様々な会を作って定期的に茶を楽しむようになってくる。明治二十九年(一八九六)発足の大師会、同十三年の和敬会、同三十五年の十八会、同四十一年の篠園会、大正四年(一九一五)の光悦会などがその代表例である。これらの中には現在も続いて開催されているものもある。明治三十年以降昭和十年代までは、これらの人々が中心となって茶道をリードしてきた。

勿論、この間も三千家を中心とした家元における茶道も様々な工

夫をこらしながら、その勢力を盛り返しつつあった。ただし、多くの人々の注目は常に近代数寄者たちの茶道にあり、家元を中心とする伝統的な茶道はどうしても分が悪かった。

ところが、昭和十年代に近代数寄者の中心人物が次々と亡くなる、家元たちに率いられた大衆による茶道がその主流になっていく。

熊倉氏によると、例えば昭和十五年(一九四〇)四月二十一日から三日間にわたって大徳寺において行われた利休三百五十回忌大茶会には、「もはや数寄者の影は薄く、まさに三千家の家元に結ばれる千家流の流儀茶人が主役であり、「三日間の会期中、集まった人びとは五千人を超え、そのハイライトであった大徳寺法堂における献茶の様子が京都中央放送局から実況放送されるという、空前の出来事まで添えられた」という⁽³⁾。

その後は、家元に率いられた大衆による茶道が中心的な役割を担って今日に至っている。

ここで、近代茶道の特徴をもう一度まとめておくと、次の三点になる。

一つは、熊倉氏が指摘した「遊芸からの離脱」である。前時代、すなわち江戸時代には茶道は遊芸と認識されていた。それが、近代になって単なる遊芸から脱出し、伝統文化へと変化した。ただし、これは家元を中心とした茶道においてである。

二点目は、近代数寄者による道具(美術品)の蒐集、披露を兼ね

た新たな茶のスタイルが生れたことである。なるほど、大名による茶道もこういった一面をもちあわせていたことは否定できない。しかし、大名による茶道と近代数寄者の茶道が最も異なる点は、大名のそれが比較的限定的な茶道であったのに対し、近代数寄者たちのそれは横のつながりを重視した社交的な要素の強い茶道であった。勿論、大名たちによる茶道もその初期の段階においては、近代数寄者の如く社交的な要素も強かったであろうが、時代が下るにつれ教養、嗜みといった側面の方が色濃くなってきた。それ故、近代数寄者たちの茶道は、大名たちによる茶道を受継いだものではなく、新しく創出されたものである。また、彼等の茶道はほとんど流儀と云うものに縛られない自由な茶であったことも忘れてはならない特徴の一つであろう。

三点目は、茶道の担い手が男性から女性へと変化したことである。明治期はまだ女性の茶人というのは少なかった。その後、茶道が女子教育に取り入れられ、女子の教養の一つとなり、そして日本の伝統文化と認識されるに及んで、彼女たちが茶道の主役に躍り出た。特に第二次世界大戦後は、大抵の茶会で女性の数が男性を圧倒するといった状況が今日まで続いていることは、周知の通りである。

以上三点が近代茶道の最も大きな特徴であろうと考えられる。尚、前論稿と同様、引用文における漢字については、現在一般に使用されている漢字に直した。以上の他は、清濁なども改めず原書

通りに引用を行なった。そして引用文中に明らかでない間違いがあった場合もそれを改めずに記すことにする。

このような近代茶道の歴史の変遷と特徴を踏まえた上で、以下恋歌を掛物に用いた茶会を年度の早いものから順に取り上げ、その意図を明らかにしようと思う。ただし、恋歌が使用されていることはわかっているにもかかわらず、その字句がわかっていない場合は歌の意味が把握できないため考察の対象から除外した（例えば、『安田松翁茶会記』明治三十五年六月六日の三井高保主催の茶会、表1参照）。

明治以降の茶会

明治以降の茶会にどのような歌の掛物が掛けられたのかを探るため、いくつかの茶会記から歌が用いられた茶会だけを選出した（表1）。その中でも特に恋歌が掛物に用いられた茶会について以下その理由、効果などについて考察を行なう。

尚、最後に茶会における恋歌の使われ方について総括するため、前論稿（5まで使用）からの通し番号を用いる。

明治の茶会を考える前に、前論稿では不明とした茶会（3）について、その趣旨が明らかになったので、ここに記しておく。この茶会は結論に関わる重要な茶会であるので、特に論じておかなければならないからである。ただし、前論稿で説明した部分ではできるだけ、省略する。

3 紀州徳川家における茶会

文化七年（一八一〇）二月十五日に紀州徳川家で行なわれた茶会に恋歌が掛けられている。道具組は次のようなものであった。

〈床〉 小倉色紙 こぬ人をの歌

〈釜〉 富士形芦屋

〈花入〉 利休作一重切

〈花〉 緋桃・こぶし

〈茶入〉 丹波焼・銘橋立

〈茶杓〉 少庵作共筒

〈水指〉 平戸焼了々齋箱書^⑩

「小倉色紙」を使用した茶会である。この茶会の亭主（主催者）は当時紀伊藩主であった徳川治宝（はるとみ一七七一〜一八五二）であると思われることは、前論稿にも述べた。ではなぜ、二月十五日に「こぬ人を……」の「小倉色紙」を用いた茶会が行なわれたのか。その理由は、利休の追善茶会であったためである。そのように判断する理由は二つある。一つは、この年が利休の二百二十回忌の年にあたること。もう一つは利休が自刃したのが、二月（二十八日）であったこと、である。この二つの理由から本茶会が利休二百二十回忌追善茶会であると判断できる。この茶会に『江岑夏書』^⑪で利休がよいとしていた「小倉色紙」を掛けるのは茶会の趣旨からいってもふさわ

しいといえよう。歌意も、今は亡き茶聖利休を追慕する気持ちを表現していると解釈でき、これも茶会の趣旨に適っている。紀伊家は『江岑夏書』の著者である江岑宗左以来、表千家とのつながりが強い。前論稿にも述べたように、この日の亭主と思われる治宝は、表千家九代了々齋宗左（一七七五〜一八二五）について茶を学び、皆伝をうけた人である。その上、天保七年（一八三六）四月二十六日には表千家十代宗匠吸江齋宗左（一七八八〜一八六〇）に台子真点前の伝授を行なった。つまり、表千家流はこの人を通して受け継がれたのである。だから、この人は大名ではあるが、表千家流茶道の流れを汲む人であると考えの方が適当であろうと思われる。道具も千家にゆかりの深いものを用いている。問題は、銘「橋立」という茶入であろう。なぜこの茶入が用いられたのだろうか。この茶入は『大正名器鑑』にも掲載されていて、それによれば元松平備前守正信（一五七六〜一六四八）の所持であったが、明和の頃（一七六四〜一七七二）京都の三井家に伝わり、その後大阪の鴻池新十郎家の所蔵となり、明治三十五年（一九〇二）頃、井上馨（せいのぶ世外：一八三五〜一九一五）の所望により、鴻池家より井上に譲渡されたという。よく知られているように、三井家や鴻池家は表千家とつながりが深い。したがってこの茶入はいずれかの家から借り受けたものと思われる。だが、この茶入を用いたのは、銘の由来やこの茶入の伝来などとは直接関係がない。この茶入を用いた理由は、利休遺愛の茶壺、

銘「橋立」と同じ銘を持つからであろう。「利休大事典」によると、「この壺はかつて足利將軍家の蔵品で、のちに織田信長、利休と伝わり、豊臣秀吉よりの再三の所望にもかかわらず、利休はこの壺を大徳寺に預け」た程大切にしていた「利休秘蔵の茶壺」であったという⁽¹³⁾。この壺は当時、加賀前田家が所持していたから、それを使用することはできなかった。そこで、その壺と同じ銘を持つ茶入を治宝は用いたのである。以上のようなことから、この茶会が利休追善茶会であった事はまず間違いない、利休不在の不如意感を表現するために、この掛物が選ばれたものと考えられる。

以下本論稿の本来の目的である、近代における恋歌茶会について考察を行なう事にする。

6 渡辺清の茶会

明治三十四年(一九〇二)六月十日正午の茶会である。客は松浦詮(心月庵)、伊藤雋吉(宗幽)、岩見鑑造(律叟)、大久保北隠(二覚庵)の四名である。この内、松浦と伊藤、岩見は明治三十三年創立の「和敬会」のメンバーである。「和敬会」は会員が巡回して茶会を催す会であり、松浦は「和敬会」設立の提唱者であり、会を運営する中心的人物であった。この茶会に用いられた主な道具組は次の通り。

〈床〉 定家卿筆 小倉色紙 見せはやなの歌

〈釜〉 鷹峰大虚庵円形浄味作

〈花入〉 山崎宗鑑作 一重切・銘 杜宇

〈花〉 かく

〈茶入〉 唐物丸壺

〈茶碗〉 青井戸

〈茶杓〉 慶首座作 共筒・箱原叟書付

〈水指〉 信楽焼筒形神尾所持⁽¹⁴⁾

さて茶会当日、床には「見せはやな……」の「小倉色紙」が掛けられたが、この歌は『千載和歌集』巻十四(恋四)に載る歌である。歌の作者は殷富門院大輔である。

亭主である渡辺清(幽泉：一八三五〜一九〇四)は元大村藩士であり、明治維新の際に江戸城の無血開城に重要な役割を果たした人物である⁽¹⁵⁾。その功績により、明治二十年(一八八七)五月に爵位(男爵)を授けられている。『高橋帚庵茶会記』には、塩原又策(三共株式会社)の創始者、家に移築された茶室、「転合庵」を明治二十年に京都の寂光寺より麻布霞町の自宅に移築した人として記録されている⁽¹⁶⁾。彼の茶歴についてはほとんどわかっていない。彼は元武士であるから大名茶流の茶道を行なったと考えられるが、師承が明確でないため、どのような茶道の流れを汲むものであったかは不明である。

ところで、この茶会は正客である松浦詮伯爵(一八四〇〜一九〇七)のために行なわれたものである。彼は、元平戸藩主(松浦家十

二代当主)であり、石州流鎮信派の家元でもあった。彼は茶道だけでなく、歌道にもひいで、歌会始奉行もつとめるといった多才な人物であった。亭主である渡辺清とはいわば同郷であり、明治維新の際にも両藩は協力して維新に功績があった。また、彼等は共に嵯峨源氏の末裔であるといった共通点をもつ。松浦は六月六日夕刻に東京から京阪地方へと、この茶会の相客である伊藤雋吉、岩見鑑造、大久保北隠を伴って出発している(二十日に帰京)。「松浦詮伯伝」には、「千家表裏の風炉、その他、京阪数寄者の茶会に臨まんが為なり」とこの旅の目的が記されている¹⁸。この評伝における六月十日の記述はこうである。「十日、朝餐後西行庵を訪ひ、正午渡辺幽泉(清のこと―筆者注)君を音なふ。新に造れる瀝菴の茶室に案内す。今日は大阪なる広岡久右衛門も亦招かれて同席したりき。(後略)」。この茶会についての記述はこれだけである。

ただし、この記述には典拠とした茶会記には書かれていない情報がいくつか含まれている。すなわち、この日の茶会は京都の「瀝菴」という茶室で行なわれたということ。恐らくこの茶会は新席抜ききの茶会であったということ。そして、茶会記には見られなかった大阪の広岡久右衛門なる人物(両替商加嶋屋九代目当主)が同席していたこと、である。「瀝菴」という茶室については不明な点が多いが、これが京都で行なわれた茶会であることから推測して、当時京都にあった渡辺の屋敷に付属していた茶室であると思われる。その

屋敷は、「西洞院榎木町」にあった²⁰。この屋敷は明治二十六年(一八九三)に建てられたもので、現在の滋野中学跡地(現在は廃校)であるが、ここには昔、庸軒流の祖、藤村庸軒(一六一三―一六九九)も住んでいたらしい²¹。この辺りには、「京の七名水」の一つである「滋野井」がある²²。渡辺がこの地を選んだのも名水があったからではないだろうか。先程も述べたように、彼の茶歴については、現在のところ詳しいことはわかっていないが、明治二十八年(一八九五)には平安神宮で献茶式の献茶主になっていることから、それ以前に茶道に親しんでいたのは確実である。

さてここで、渡辺が「小倉色紙」を掛けた目的について考えてみようと思う。渡辺がこの掛物を選んだ最大の理由は、松浦に対する心配り(配慮)である。渡辺は松浦に失礼のないように「小倉色紙」を選んだ。先述したように松浦は元平戸藩主、つまり元大名である。「小倉色紙」は江戸時代の初期から大名道具として尊重されてきたという歴史がある。つまり、「小倉色紙」という名物でもてなすことは、客に対する最高級の心配りであることは言うまでもない。それは、益田孝(鈍翁)が後年、高橋義雄(箒庵)の「小倉色紙」を用いた茶会に招かれた時、もらった感想に端的に表れている。それは次のようなものである。

小倉の色紙でお茶を頂戴すると云ふ事は、昔は大々名でなけれ

ばない事であるのに、今度箒庵氏の新席開きに測らず此光栄を得たのは誠に老後の幸である。(中略) 大々名のお茶であるから何れの茶会でも打寛いで勝手の手を言合ふ仲間も今日ばかりは襟を正して大々名になつた心地がした。²⁴

ちなみに、この茶会に用いられた色紙は「たかさこのおのへのさくらさきにけりとやまのかすみたゝすもあらなむ」であった。このように「小倉色紙」はその稀少性、歴史、格、どれをとっても超一流である。特に茶の世界では、歌掛物の掛け始めが「小倉色紙」であったから、余計に特別視されている。歌掛物の中でも別格といえよう。元平戸藩主である松浦に対する最高のもてなしである。そこで渡辺は松浦の客としての格を尊んでこの掛物を選んだ。これが最大の理由であった。

動機としてはかなり小さいが、その他に考えられる理由を二つ挙げておこう。

一つは、歌の意味から推測されることである。「見せばやな」という詞に、新席である「瀝菴」を見せたかった、という意味をこめ、「いろはかはらし」という詞に、旧知の仲であるという親愛の情を託し、メッセージとして伝えたかったのではないだろうか、というのが一つ目の理由。そしてもう一つの理由は、上述したように、松浦が歌に通じており、『百人一首』を好んでいたために用いたので

はないか、ということ。残念ながら、彼が『百人一首』を好んだという記述や言論はない。しかし、明治三十五年(一九〇二)二月二十三日から十二月二十八日まで行なわれた松浦鎮信公二百年追善茶会(百回行なつた)の終了後、彼は参加者の中から百人に『百人一首』の銘をつけた茶碗を贈っている。どの茶碗が当たるかは籤引きによる抽選であった。ちなみに、渡辺には銘「八重葎」の茶碗が当たった。²⁵これは恐らく百会茶会ということで同じ「百」のつく『百人一首』を選んだものとも考えられるが、彼が趣向として『百人一首』をわざわざ選んでいることからして、『百人一首』を好んでいたのかもしれない。

ところで、この茶会で用いられた「小倉色紙」は江戸時代を通じて鴻池家が所蔵していたものである。それと同一のものであるか否かあるいは、どのようにして渡辺がこの色紙を入手したのか、など不明な点が多い。今後の検討課題としたい。渡辺と広岡久右衛門の関係についてもいざれ明らかにしたいと考えている。蛇足になるが、銘「杜宇^{トウウ}」という花入は季節感を表現するために用いられたと思われる。

7 益田英作の茶会

益田英作(紅艶：一八六五～一九二二)は、益田孝(鈍翁)の末弟である。高橋義雄(箒庵)によると、「益田英作氏は長兄に孝男、

仲兄に克徳と云ふ大家を控て、兄弟三人何れも稀代の教寄者揃ひであるが、中にも英作は駄々つ児で稚氣に富み、若年の頃より奇行多く、其傑作に至りては、人をして抱腹絶倒せしむる者があつた」という⁽²⁶⁾。さらに、彼の外見について高橋は「紅艶は三十歳前後より非常に肥満し、腹は便々として布袋の如く、盆の窪の肉塊は二段を成し、色白く顔面紅を潮して愛嬌タップリの目尻は下り、極度の近視眼で」あつたという⁽²⁷⁾。一方、野崎広太(幻庵：一八五七〜一九四二)は「紅艶は人も知る物の蔭より其声のみを聞けば優にやさしく女優にもして見まほしけれど、其体格や冢の如く、其量や冢四頭にも等しき大兵肥満の男也」と彼の外見を評している。彼をはじめ、益田三兄弟はいずれも、表千家不白流、川上宗順(一八三八〜一九〇八)に茶道の手ほどきを受けている。

彼が恋歌を掛けたのは、明治四十三年(一九一〇)十月十日正午の茶会である。場所は、目黒の「霊水庵」であつた。客は、正客が野崎広太、その他日比翁助、和田豊治、新橋「蜂龍」の女将と、新橋の芸妓ゞ子であつた。ちなみに、野崎広太については後述するが、中外商業新聞社長(現在の日本経済新聞社の前身)、三越百貨店社長などを歴任した実業家、日比翁助は三越の創業者、和田豊治は富士紡の大成者である。また、新橋「蜂龍」の女将は本名を梶田とめといい、「木挽町七の二」(当時は京橋区木挽町、現在の中央区銀座七丁目昭和通沿)に「蜂龍」という店をもつていた⁽²⁸⁾。「蜂龍」は、益田

家と縁のある店で、益田の兄、すなわち克徳(非黙)は明治三十六年(一九〇三)四月、この店で倒れ、亡くなつてゐる。また、益田の甥にあたる益田太郎(益田孝の長男)は、「蜂龍」で一風変わった趣向の宴会を催してゐる⁽²⁹⁾。芸者や帮間を大阪から動員して、万事関西風の趣向で宴会をやつたのである。「新橋駅」を「梅田駅」、「蜂龍」を「松月楼」(大阪の有名な料亭―筆者注)と呼び変えたりして楽しんでゐる。また、新橋の芸妓ゞ子は、名を柴田すず(本名、竹村すず)といい、住所は「日吉十」(当時は京橋区日吉町、現在の中央区銀座八丁目)であつた。「京橋繁昌記」では、芸妓ゞ子は「新橋芸妓」の中で最もランクの高い「一等芸妓」になつてゐる⁽³⁰⁾。当時人氣のあつた芸妓だつたことは間違いない⁽³¹⁾。当日の主な道具組は次の通り。

〈床〉 道風継色紙

「あしひきの山下水の木がくれてたきつ心をせきぞかね
つる」

〈釜〉 経筒与次郎か

〈花入〉 伊賀

〈花〉 綿・桔梗・野菊・はちす・他一種(計五種)

〈茶入〉 遠州作薩摩瓢箪

〈茶碗〉 柿の蒂・銘洪柿

〈茶杓〉 小堀権十郎作

〈水指〉南蛮蘭鉢³³

本席の床に入ると、小野道風筆「継色紙」が掛けてあり、歌は「あしひきの山下水の木がくれてたきつ心をせきぞかねつる」であった。この歌は『古今和歌集』と『後撰和歌集』に収載されている歌である。『古今和歌集』の方では恋歌一（巻十二）に配されており、題や詞書、そして作者も不明である。一方『後撰和歌集』では、詞書に「女のもとにつかはしける」とあって歌の作者は「よしの朝臣」となっている。さらに、この歌を恋歌四（巻十二）に配している。この相違が何故起こったのかは不明である。いずれにしろ恋の気分の強い歌である。下の句「たきつ心をせきぞかねつる」が強い恋心を表している。

ところで、益田がこの掛物を使用した理由は何か。この茶会には二つの大きな特徴がある。それがヒントになるだろう。一つは、料亭の女将と芸妓が参会している事。もう一つは、濃茶終了後、広間に移り、メ子に三味線を持たせ、一曲唄わせている事、である。その歌詞は「あいたみたさは飛立つばかり、籠の鳥かやうらめしや……」というもので、これは清元『権八』（俗に「権上」ともいう）の一節である。亭主である益田は、恐らく最初から『権八』を唄ってもらう魂胆だったと思われる。なぜなら、彼のこの日のいでたちが、黒羽二重五ッ紋の着流しに、白献上の博多帯というものであったからである。野崎は、益田のいでたちを見て、「紅艶とは世を忍

ぶ仮の名にたまことは白井権八、音羽屋の体を仮りて此処に現はれたるかと思はれぬ、但し権八は狂言綺語に浮名を流し艶名を今に至りて唄びず、此権八金と力はあるが聊か平仄に合はぬやう也」と評している。芝居気たっぶりの演出であり、とても通常の茶会とは思えない。益田はこの格好を「初入」のときからしているから、茶を供した後、『権八』でも唄って楽しもうとしていたにちがいない。茶会としてはかなりだけた集まりである。

この茶会は、遊興的な色彩がかなり濃い。益田は色街、花柳界の世界を、この茶会にも持ち込ませたかったに違いない。そのため恋歌を用いたのである。³⁴この茶会は『野崎幻庵茶会記』に収載されているが、その著者である野崎広太の次のような言葉からも、益田の意図が窺えよう。野崎は、「後にて聞けば、道風の色紙を披露するには趣向面白からずとか、恋の色紙に伊賀の花入は配合いかゞあるべき」など「種々の批評もあ」ったが、それには賛同しかねるとし、「斯る趣向が紅艶の長所」であり、「紅艶の本領此処に存すと謂はまくのみ」とこの茶会を評している。³⁵この茶会記事を読めば容易にわかる事であるが、客であると共に記録者である野崎は、この茶会の趣向を非常に楽しんでゐる。ただし、日比と和田は付き合いきれなかったのか、途中で退席している。恋歌は茶会を艶っぽくするために用いられたものであり、それが亭主である益田の趣向であったのである。³⁶とても千家流の茶道を行なっているとは思えない。

彼に限らず「近代数寄者」とよばれる人々は多く千家流の茶道を教わっている。にもかかわらず非常に自由に茶会を行なっている。そのことはこの後採り上げる茶会を見ても明らかである。これが意味するところは、彼等「近代数寄者」と呼ばれる人々は、千家流茶道の点前は習得していたかもしれないが、その精神的な部分までは千家流に染まっておらず、かなり自由度の高い茶会を催していたということである。なお、茶碗に銘「渋柿」を用いているのは、季節感を表現するためであり、この日掛けられた掛物は英作の死後（英作は大正十年没）の大正十二年（一九二三）一月二十二日に行なわれた益田英作家入札において、二万七千九百円で落札されたという。当時の公務員の初任給が七十五円というから、この掛物がいかに高値で売却されたかがわかるであろう。

8 益田孝の茶会①

益田孝（鈍翁：一八四七～一九三八）は、高橋義雄（箒庵）と共に近代茶道史を語る上で不可欠な存在であり、利休以来の「大茶人」ともいわれた近代茶道の大立者である。それとともに、三井財閥を創り上げた実業家の一人でもある。先に述べたように、彼も表千家・白流の川上宗順に師事した一人である。

彼が恋歌を掛けたのは明治四十四年（一九一一）六月二十二日正午の茶会である。この茶会は道具商伊丹元七（元庵）の追悼茶会で

あった。伊丹は益田の初期の道具収集に深く関わった道具商の一人である。その彼がこの月の六日に脳溢血で死亡したので、それを追悼する茶会を益田はひらいた。場所は築地別邸内にある草庵であったが、これは元日本橋南茅場町にあったものを移築したもので、移築に際し伊丹は、その監督者となって指揮したという。この日の相客は、実業家の馬越恭平（化生）、伊丹の女婿小倉惣右衛門、同じく実業家の朝吹英二（柴庵）、岩原謙三（謙庵）、野崎広太（幻庵）と、いずれも伊丹と深い関わりがあった人たちである。正客は馬越、末客は小倉であった。主な道具組は次の通り。

〈床〉今川了俊筆定家未来記証歌四首歌切

「人はいさぎのふの雪の跡もなくけさは消えぬる夢もはかなし」

「夕暮はつらきの風のうつのやまおもひを誰かつたのしたみち」

「あた人を松にあらしの明かねていろに見すへき言の葉もなし」

「うらかれの庭のむら萩秋暮れて人のこゝろのあとのやまかせ」

〈釜〉大西五郎左衛門作・竹鏝付

〈花入〉半月形釣花入

〈花〉白の睡蓮一輪

〈茶入〉五郎作棗

〈茶碗〉粉吹・阿弥陀仏の名号を現したものを

〈茶杓〉庸軒作

〈水指〉伊賀⁹⁸

彼が掛けたのは今川了俊筆定家未来記証歌四首の歌切であった。

四首とも『未来記』恋部にある歌である。一首目「夢もはかなし」、三首目「見すへき言の葉もなし」など、随所に故人を悼む気持ちが汲み取れる歌詞を含んでいる。後入の床には、白い睡蓮一輪を飾っているが、これも追悼の意を表していると考えてよいだろう。また、道具類は益田が「一言申述べ置きたき事あり」として、「当日席中」使用の器物は、概ね元庵より購ひたるものに係る」と説明したように、いずれも伊丹所縁の品々であった⁹⁹。茶碗に「阿弥陀仏」の名号のある粉吹茶碗を用いているのも、追悼の気持ちの表れである。つまり、茶会の趣旨や道具組などから見て、追悼の意を表するために、恋歌の掛物が用いられたことは明白である。

ところで、本旨からは外れるものの興味深い事実がある。実は『未来記』の歌というのは、定家が悪い歌の見本として挙げた歌を収載したものと*いわれている*。『百人一首』や『近代秀歌』などが、良い歌の見本として編纂されたのとは、全く正反対の性質を持っているのである。要するに、益田が用いた恋歌は本来、悪歌の見本であったわけである。ともかく、歌意からして故人を追悼する気持ち

は十分にくみとれるから、元来が悪歌の見本であってもそんなことは問題でなく、この掛物は本茶会に十分な効果を發揮しているといえよう。

9 瓜生震の茶会

瓜生震(百里：一八五三〜一九二〇)は、若い頃長崎で蘭学を学び坂本竜馬(一八三五〜一八六七)率いる「海援隊」に属していた。その後、岩倉使節団に加わり、欧米を視察。後に、高島炭鋌長崎支店長、麒麟麦酒、東京海上保険、三菱の副支配人等をつとめた実業家である。彼も先述した「和敬会」のメンバーの一人であった。彼がどの流派の茶を学んだかは不明である。彼が恋歌を用いた茶会を催したのは、明治四十五年(一九二二)六月十四日正午の和敬会月次茶会である。客は、道具商山澄屋主人山澄力蔵(宗澄)、同じく道具商好古堂主人中村作次郎、料亭八百善主人栗山善四郎、実業家の野崎広太(幻庵)、東京茶道会などを組織した宮北宗春(自久庵)であった。主な道具組は以下の通り。

〈床〉 慈鎮詠草

「橋五月雨：さみたれは草のまくらのものうきになをすみ
よしやまつのしたふし」

「盧橘：さらぬたにむかしくのふの軒ちかきはなたち花に
かほるころもて」

「寄螢火恋：わか恋はもゆるほたるのいろ見へてねをこそ
たてね人や知るらむ」

〈釜〉 芦屋

〈花入〉 南蛮ちまき・覚々斎箱書「花入れてなかめよし野やあめ

ちまき」

〈花〉 薊（栗山の贈り物）

〈茶入〉 亡羊丸棗

〈茶碗〉 青井戸・銘養老

〈茶杓〉 江岑作・銘螢

〈水指〉 木地釣瓶⁴⁴

歌は、二首目の三句目が「軒ちかみ」、三首目五句目が「人や知りけむ」が読みとして正しい⁴⁵。彼がこの掛物を掛けた理由は明白である。時節を重んじたからである。つまり、一首目と二首目は夏の歌であるし、三首目も恋歌といながらも、螢火に寄せて恋の心情を述べた歌である。この歌自体は、かなり強い恋歌である。この一首単独では恋歌としか思えない。しかし、螢火という言葉が題にもあり、他二首が明らかに夏歌であるため、三首を総合して見ると、夏の掛物として解釈できる。したがって、瓜生はこれを夏の掛物として床に掛けた。道具にも夏を思わせる工夫がしてある。特に、銘「螢」という茶杓を使ったのはそれを端的に表している。

たしかに、瓜生がこの掛物を使用した理由は単純である。が、一

首では恋歌としか見なせない掛物でも、他の歌と混じると恋歌の掛物ではなくなってしまうという典型的な例が、この茶会である。こういった例は今後、恋歌の掛物を考える上で一つの重要な参考例となりうるであろう。同じような事例が『小林逸翁茶会記』にも見える。昭和二十八年（一九五三）四月四日の茶会である。この茶会は藤木正一⁴⁶（正庵：一八九一〜一九六六）が催したもので、この茶会には「兼好三首詠草」なる歌切が掛けられた。歌は「遠山花：さくはなのさかりしられてかひがねをねこしやまこしかかるしらくも」、「落花隨風：なをざりにすぎつる風のあとにさへしはしはやまずちるさくらかな」、「寄花恋：花見ても人のつらさのわすらればながきはる日にものはおもはじ」である。三首目が恋歌であるが、瓜生の歌と比較すると、恋歌としてかなり弱い。それはともかくとして、この掛物も前二首が花、つまり桜を詠んだ歌であり、本来恋歌である三首目も「寄花恋」であるから春の掛物の一部とみなされたと考えてよいだろう。瓜生の茶会と同じパターンである。両者共に三首目、つまり最後の歌として恋歌が配されているのも共通している。客は当然、一首目、二首目と順に掛物の歌を読んでいく。読んでいくにしたがって客の頭の中には季節感が強く意識される。その結果、三首目までくると、もう恋の気分より季節感の方がまさってしまう。題が前の二首と季節が重なる場合は、特にその傾向が強くなるだろう。結果的に、これを恋の掛物とは断定できなくなるのである。『野崎

幻庵茶会記』に載る、大正十四年(一九二五)十一月十八日に行なわれた益田孝(鈍翁)主催の茶会、そして『安田松翁茶会記』に載る明治三十五年(一九〇二)六月六日に行なわれた三井高保主催の茶会も、同じような性格を持ったものであった、と考えられる。

10 高橋義雄の茶会

周知のように、高橋義雄(箒庵：一八六一〜一九三七)は、益田孝(鈍翁)と並ぶ「近代数寄者」の代表的人物である。彼が後の茶道研究に果たした功績は挙げればきりが無いが、やはり特筆すべきは、『東都茶会記』をはじめとする多くの茶会記を残したこと。それと『大正名器鑑』という名物記を完成させたこと、などが挙げられよう。彼の茶会記は、ただ道具類や客組だけを記すというものではなく、読物として楽しめるような茶会記であった。そのような茶会記のスタイルを確立したという点は、多に評価すべきである。さらに彼は、幕末から昭和初期にかけての回想録『箒のあと』や、茶道具の変遷を記した『近世道具移動史』など貴重な著作を数多く残している。表千家の茶匠川部宗無(一八四九〜一九二七)、藤谷宗仁(生没年未詳)に茶の手ほどきを受けたという。

彼が恋歌の掛物を掛けたのは、大正四年(一九一五)十二月二十四日から二十六日にかけて行なわれた非黙居士追悼茶会においてである。非黙というのは益田克徳(一八五二〜一九〇三)の号の一つ

である。克徳は益田孝(鈍翁)の弟であり、先述した英作の兄である。『茶道人物辞典』によると克徳は「司法省検事を経て、実業界に進出。東京海上保険、石川島造船所などの重役をつとめ」、「茶法を不白流川上宗順より受け、兄や弟とともに茶に親しんだ」という。兄の益田孝を茶の世界にひきこんだのも彼である。実業界、そして茶道界においても一角の人物であったが、明治三十六年(一九〇三)四月、五十二歳で惜しまれながらこの世を去った。この日の茶会は、益田の十三回忌追善供養として行なわれたものである。場所は、四谷区伝馬町にあった高橋自邸の茶室「白紙庵」である。道具組は次の通り。

〈床〉 深草元政上人色紙

「おもひ草葉末にむすふ白露のたまたまきては手にもたまらす」

〈釜〉 皆口・梅竹地紋

〈花入〉 砧青磁下蕪

〈花〉 侘助椿・蠟梅一枝

〈茶入〉 丹波焼・遠州箱書付・銘老坂

〈茶碗〉 非黙庵居士手造・銘不出来

〈茶杓〉 遠州作・歌銘鬼宿・非黙庵旧蔵・筒に歌あり

「むくら生ひ荒れたる宿のうれたきはかりにも鬼のすたくなりけり」

〈水指〉遠州好・雲林院長兵衛作・正保二年彫銘あり^⑩

彼の追悼茶会に掛けられたのは、深草元政上人筆「おもひ草……」の歌であったが、この歌は源俊頼の歌で『金葉和歌集』巻七（恋上）に収載されている。また、藤原定家の『近代秀歌』にも採られている。この歌について『新日本古典文学大系』の脚注では「歌意は、恋人のまれの訪れと、そっけない別れを詠むが、思い草と白露が、恋のはかなさと美しさを象徴している」と説明している^⑪。高橋はこの掛物について「古歌の心も其筆者も追善にこそと思ひて掛けぬ」といっている^⑫。なるほど「おもひ草」「露」といった言葉からは益田に対する思いと亡くなってしまった悲しみが伝わってくるし、下句からは、はかなく亡くなってしまった人を思う気持ちも表れているように思われる。掛物の染筆者が僧侶であることも供養の気持ちを表したのか。追善茶会であるので当り前の事ではあるが、この茶会には益田に対する追慕の念が強くあらわれている。それは何も掛物だけではなく、道具にもそれがあらわれている。例えば、銘「不出来」という益田手造の茶碗^⑬を使用したり、益田旧蔵の茶杓を使用したりしている。すなわち、高橋は恋歌云々というよりも、追慕の気持ちを強く示すために、この掛物を選んだに過ぎない。人を強く恋うという恋歌の特徴をうまく利用した例と言えよう。

11 野崎広太の茶会

野崎広太（幻庵：一八五七～一九四一）は、先述したように中外商業新聞社長、三越百貨店社長などを歴任した実業家であり、かつ明治三十九年（一九〇六）から昭和元年（一九二六）までの茶会記『茶会漫録』を残した人物としても知られる。彼も益田兄弟と同様、表千家不白流川部宗順に茶の手ほどきを受けたという。彼が恋歌の掛物を掛けたのは、大正九年（一九二〇）四月十八日の庚申大師会においてである。この「大師会」で御殿山碧雲台「幽月亭」に野崎がしつらえた道具類は次の通り。

〈床〉 三十六歌仙歌切 素性法師

「良峰宗貞二男宇多醍醐二代人

今こむといひしはかりに長月の有明の月を待出つるかな」

〈釜〉 古芦屋瓢箪形桐地紋・鍔付袱紗取

〈花入〉 古経筒

〈花〉 白牡丹一枝

〈茶入〉 遠州箱・銘鶉衣

〈茶碗〉 遠州箱・銘夏山

〈茶杓〉 利休作共筒・銘面影

〈水指〉 新塗手桶・八郎兵衛作・古瀬戸・熊川^⑭

この茶会について言及する前に「大師会」について簡単に説明しておこう。「大師会」は益田孝（鈍翁）が狩野探幽旧蔵の弘法大師

筆崔子玉座右銘³⁵を手に入れ、明治二十九年（一八九六）三月二十一日に披露茶会を開いたのが始まりとされ、以後今日まで続いている会である。「朝野の名士を招待し、招待状を持つて来ない人は誰であらうと絶対に断ることにして居つたので、或年の如きは、招待状を持たぬ人が垣を破つて入つて来た」、あるいは「どんな大大名へ出品を頼んでも、一度も断られたことがなかった」など数々のエピソードが「大師会」には残っている。「東の大師会、西の光悦会」というふうに並び称され、その歴史と規模をして近代二大茶会の内の一つとして名高い。

本論に戻ろう。この年の「大師会」は品川御殿山の益田孝邸で行なわれたが、目玉はその前年に行なわれた藤原信実筆三十六歌仙切の出品であった。この歌仙切の由来や、現在までの流転の経緯については『三十六歌仙絵巻の流転』³⁶に詳しい。が、参考のために簡単にその由来だけを述べておこう。この歌仙切、もとは秋田藩主佐竹家が所蔵する絵巻物であった。それが明治維新後の旧士族の没落によって佐竹家もこれを手放すことになる。それを買い取ったのが、船成金の山本唯三郎（生没年未詳）である。ところが、彼もまた事業に行き詰まり大正八年（一九一九）にこれを手放さざるを得なくなった。ところが、これを買うためには当時の金で三十五万円三千元という大金が必要である。当時それを一人で買い取るとは不可能であった。そこで京都の道具商土橋嘉兵衛と服部七兵衛が相談し、

これを分割して売ることにした。そして益田孝邸である品川御殿山碧雲台応挙館においてこれを一枚ずつ分割して、三十七枚の歌仙切としたのである。分配は籤引によって決められ、一枚ごとにそれに応じた値段で取引された。大正八年十二月の出来事であった。この時に野崎が手に入れたのが、ここで問題になる素性法師の歌仙切である。歌は上記の「いまこむと……」の歌であり、『古今和歌集』卷十四（恋歌四）に収載されている他、『百人一首』の中にある歌としても有名である。彼がこの歌を掛けたのは先述したように、歌仙切がこの年の大師会の目玉であったからで、恋歌であるか否かは問題ではなかった。それは歌そのものが季節に対しても相応していないことから明らかである。いわゆる名物茶会の客寄せの材料として使用された感がある。

12 大正九年の「光悦会」

「光悦会」は大正四年（一九一五）の秋から古美術商、土橋嘉兵衛（無声庵：一八六八〜一九四七）の尽力で発会し、それ以来ほぼ毎年秋に、京都鷹峰、光悦寺で行なわれている大茶会である。会の趣旨は、本阿弥光悦（一五五八〜一六三七）の遺徳を偲ぶものであり、東の大茶会「大師会」が春に行なわれるのに対し、西の「光悦会」は秋に行なわれる茶会としてよく知られている。大正九年（一九二〇）十一月十二、十三日に行なわれた「光悦会」では、二人の人物

が恋歌を掛けている。一人は藤田伝三郎（香雪：一八四一〜一九一
二）、もう一人は林新助（楽庵：一八六九〜一九三三）である。

まず、藤田伝三郎から見ている。彼は藤田組を起した実業家で
あり、関西実業界の大立者である。『茶道人物辞典』によると「実
業で活躍するかたわら茶道を武者小路千家磯矢宗庸に学び、中興名
物・千代能法語、同じく在中庵茶入など、多くの茶道具も集めた。
大阪網島の本邸に、四十余の茶室・書院を集めたが、これがのちの
藤田美術館となった」という。茶道具の美術収集にかなり力を入れ
ていた人物である。彼の大正九年（一九二〇）「光悦会」における
しつらえは次の通り。

〈床〉 俊頼卿色紙

「いまこんといひしはかりになかつきのありあけのつきを
まちてつるかな 素性」

〈釜〉 光悦好・山に朝日の地紋・浄味作

〈花入〉 雲鶴細口下蕪

〈花〉 白玉椿（初嵐）・榛

〈茶入〉 名物利休再来町棗

〈茶碗〉 御所丸黒刷毛緋袴

〈茶杓〉 長嘯子共筒・銘神無月

〈水指〉 空中作手桶・本阿法眼空中在銘

彼が光悦寺内「騎牛庵」に使用した掛物は、『野崎幻庵茶会記』、

『高橋箒庵茶会記』にはいづれも源俊頼（一〇五五〜一二二九）の筆
によるものとされている。しかし、この説は現在では否定されてお
り、世尊寺伊房（一〇三〇〜一〇九六）がその筆者であるとされて
いる。『高橋箒庵茶会記』が「田中親美氏の談」として記録すると
ころによると、「此色紙は十五番歌合で、元卅枚あつた者だが、前
田利為候家に九枚あつて、同家では筆者を公任とし、藤田家では俊
頼として居る」というが、「古筆研究家間には、此筆者が俊頼でも
公任でもなく、実は世尊寺伊房である事が定論」となっていると
いう。現在藤田美術館が所蔵するこの掛物の筆者も伊房とされて
いる。ちなみに世尊寺伊房は三蹟の一人藤原行成（九七二〜一〇二
七）の孫にあたる人物で、能書家として有名であった。

藤田がこの掛物を掛けた理由であるが、これは彼がこの歌を秋の
掛物と置いていたからではなからうか。それには「長月」という言
葉が大きな影響を及ぼしているようである。高橋義雄によれば、高
橋は藤田の持っていた「寸松庵色紙」の紅葉の歌を掛けると思っ
ていたが、予想が外れたという。高橋はそれを次のような言葉で表現
している。

余は十日程前東京にて藤田男に面会の時、鷹峰の掛物は何で
ありますかと尋ねしに、当日まで秘密々々と言はれたので、

（中略）寸松庵色紙に紅葉の歌ある者を掛けらるゝならんと思

ひしに、(中略) 狙ひは稍近傍に届きたれども中的中の名譽を博する事を得なかつた。⁽⁶⁵⁾

つまり高橋は、藤田が所持している「寸松庵色紙」の紅葉の歌(伝貫之筆)「ちはやふるかみのいかきはふくすともあきにはあへすもみちしにけり」という紀貫之の歌を掛けると思つていたところ、この素性の歌であつたというのである。ここで注目しなければならぬのは、高橋が「狙ひは稍近傍に届きたれども」と言つてゐることである。この記述からは「同じ秋の歌ではあつたが」と言つてゐるの無念さを感じられる。恐らく藤田も高橋もこの歌を秋の歌として認識しており、時節に相応しい掛物と思つていた可能性が高い。素性の歌もあまり強い恋の歌ではないから秋の歌として解されたと思われる。言うまでもないが、銘「神無月」という茶杓を用いてゐるのは十一月に行なつてゐるからで、ほぼ旧暦の十月にあたるからである。

林新助(菜庵)の場合はどうであろう。林の受持は「本阿弥庵」である。林新助は京都市東山区新門前に店を構えていた骨董商である。土橋嘉兵衛(無声庵)、今村貞次郎(八方)らと共に京都を代表する道具商の一人であつた。林の道具組は次の通り。

〈床〉 小野道風筆本阿弥切・角倉家伝来

「夏なれば宿にふすふる蚊遣火のいつとて我身したもへか

せむ」

「恋せしとみたらし川にせしみそき神はうけすもなりにけらしも」

「哀れてふことたになくは何をかは恋の乱れのつかねをにせむ」

「思ふには忍ふることそまけにける色にはいてしと思ひしものを」

〈釜〉 古芦屋真形・芦に鷺地紋

〈花入〉 古銅細口・水請四方・仙叟箱書

〈花〉 白玉椿・数珠子

〈茶入〉 青貝六角・内赤・遠州箱

〈茶碗〉 一入黒・銘面影・如心斎箱書付

〈水指〉 備前種壺⁽⁶⁶⁾

この時林が使用した掛物は「本阿弥切」の一軸であり、歌は上記の通りであるが、これらは『古今和歌集』卷十一(恋歌一)に収載されている歌で、いずれもよみ人知らずの歌である。いずれの歌もひそかに恋焦がれる思いを詠んだ歌である。

林がこの掛物を掛けた理由は単純明白で、単に「本阿弥切」という本阿弥光悦ゆかりの物であつたからである。「本阿弥切」は寛永の三筆の一人本阿弥光悦が愛蔵してゐたことからこの名がある。野崎広太は、この掛物について「歌の適否は彼是此処に問ふを要せず、

一見古雅甚だ愛すべく」と、歌の内容には全く触れていない⁽⁸⁾。一方、高橋義雄は「本阿弥庵に本阿弥切とは何と云ふ適品であらう。歌は夏季であつたが夫等を問ふの違はない」と評している⁽⁹⁾。野崎も高橋も共に、歌意よりも場所と美術品としての価値を重視している。要するに、ここでは歌の内容など問題ではなく、「本阿弥切」という掛物であつたことが評価されているのである。光悦の遺徳を偲ぶという「光悦会」の趣旨と、「本阿弥庵」という場所に相応した掛物として林はこの掛物を選んだのである。光悦とゆかりの深い角倉家の伝来というのも、一役買っているものと思われる。ところで「本阿弥切」は『譚海』で「本朝古筆の内に、名物切れと称するものは、小野道風の書、本阿弥ぎれと云もの第一也」という高い評価を得ている⁽¹⁰⁾。したがって多くの名物道具が並ぶ「光悦会」の中でも、この掛物は多くの人の目を引くものであつたことは想像に難くない。なお、茶杓に銘「面影」を選んだのは光悦を偲ぶ意味をこめたものか。残念ながら彼等の師承については未詳である。

13 松風嘉定の茶会

松風嘉定(三代目：一八七〇〜一九二八)は、明治三年(一八七〇)愛知県に生まれた。明治二十三年(一八九〇)製陶家松風嘉定(二代目)の養子となり、同三十九年には東山清水坂に松風陶器合資会社を設立した。大正十一年(一九二二)には日本で最初の高級陶磁

の製造を行なったという人物である。彼の事績については藤岡幸二編『松風嘉定』に詳しい。内田豊男によると、彼がお茶を始めたのは大正六、七年の頃ではないかという⁽¹¹⁾。残念ながら師承関係については明らかではない。恋歌が掛けられたのは大正十年(一九二二)四月十九日である。当日用いられた道具組は次の通り(本茶会では「炉縁」や「香炉」も意味を持つので同時に示しておく)。

〈床〉 後醍醐天皇筆・吉野五十首ノ中・恋歌・皆恋歌之内
「あひみてののちさへ人の恋しきにいつをかきりのおもひ有るらむ」

〈釜〉「火炉頭上 不断松風……」の地紋あり

〈炉縁〉花筏

〈香炉〉隅田川染付

〈花〉なし。(花の代わりに田村の能面を掛ける)

〈茶入〉今日庵ニテ用ヒシ素焼手付・酒入ニウルシをかけ用ふ

〈茶碗〉ノンコウ・寸口

〈茶杓〉随流⁽¹²⁾

掛物は後醍醐天皇筆吉野五十首の内の恋歌であつた⁽¹³⁾。この歌の作者や出典などは不明である。この茶会記録には客組が記されていないが、野村徳七(得庵：一八七八〜一九四五)が参会していたことだけははっきりしている。ここで少し野村徳七について簡単に紹介しておく。野村徳七は野村財閥の創業者である。彼の事績については

『野村得庵』に詳しい。「大正二年一月に藪内家の支流藪内節庵の主宰する稽古場に入り、始めて茶道の手解きを受け、次で藪内宗家十代竹露紹智の許に入門し、得庵の茶号を授かり、竹露紹智隠退後は十一代竹窓紹智について「斯道に精進し刻苦研鑽十余年、その大成を見ると共に、昭和五年三月藪内家より、免許皆伝の証を得」という。なるほど、本格的に茶を始めたのはここに記された通りであつたかもしれない。だが、彼は小さい頃から茶に親しんでいた。藪内紹智によると野村は「両親が共に茶好きで、毎日薄茶をいただいたという家庭で育ち、「幼少の頃から茶に親しむ機会が多」く、「親戚には、藪内流の茶人で、後に翁が活躍をする『篠園会』の世話役でもあつた植村平兵衛氏(以文堂)がいた」という。幼少からこのような環境で育つた野村が、後年茶道に没入したことは、それはむしろ自然の成り行きであつたのかもしれない。彼は茶道と同様に能楽にも打ち込んでいた。『野村得庵』によると、「得庵翁の能楽趣味は、ただ単なる趣味、道楽といつた風のものでなく、翁の茶道趣味と同様、翁の生活記録のうちでも、欠くべからざる重要なものであり、「最初は大正二三年即ち翁が三十六七歳の頃健康の為ぐらゐの軽い気持から初められたものらしく、「大正八九年の頃から昭和七八年までの十数年の間に観世左近先生を知り、観世流を知りしめてゐるうちに、次第々と能楽愛好熱が高まつて行つたのだと思ふ」という。

野村の事績と茶歴についての説明はこの位にして、本論に戻ろうと思う。松風はどのような意図で恋歌を掛けたのだろうか。この疑問を解決するためには、寄付からの道具組で見えていくのが適当と思われる。まず、寄付の掛物は大仏(奈良)参詣図であり、床には地板に鹿の牝牡を描いたものが添えられている。そして青貝の机局には備前瓢に八重桜酒が入れられた。さらに香入には「九重」という香を入れて出している。この道具組から、伊勢大輔の歌「いにしへの奈良の都の八重桜けふ九重にほひぬるかな」が自然と思ひ浮かぶ。寄付を出て本席に入ると、床には後醍醐天皇筆「吉野切」の歌が掛けられている。炉縁は花筏、香合には隅田川という染付が使用された。これらは、いずれも桜に関係するものである。すなわち、この茶会の趣向は「花見の茶会」あるいは「桜尽しの茶会」と名付けてもよいと思われる。時期相応の茶会である。おそらくこの時期松風邸の近くには東山の桜が見事に咲いていたことであろう。この桜の趣向を一層明確にするために、松風は後入の床に「田村」の能面を掛けた。本来、後入の床には花が飾られる。しかし、桜は茶会の花には用いないことになっている。そこで亭主である松風は「田村」の能面を飾つたのである。よく知られているように、謡曲「田村」は満開の桜の咲く清水寺が物語の舞台である。客である野村が能楽に精通していること、そしてこの茶会のテーマである桜をより強調するために、松風は後入の床に「田村」の能面を掛けたのであ

る。では、初入の床に掛けられた恋歌はどんな効果を發揮しているのだろうか。歌意からすると、亭主である松風は野村に対していつまでも変わらぬ親愛の情を表したと考えられるが、それと同時に桜を惜しむ気持ちもこめているとも考えられる。しかし、松風の意図はそこにはない。この恋歌には歌としての必然性がないからである。なぜなら、桜を惜しむなら別に春の歌でもよいのだから。いやその方がむしろふさわしいかもしれない。では、松風の本当の意図はどこにあるか。松風は、桜の名所である吉野の名をもつ「吉野切」、そして吉野にゆかりの深い後醍醐天皇ということから、この掛物を選んだのである。

だが、正直な感想を述べると、あまりに桜が強調されすぎていて「付き過ぎ」といった感は否めない。少々くどすぎるのである。この茶会で評価すべき点、つまり手柄があるとすれば、恋歌を掛けたということよりも、後入の床に「田村」の能面を掛けた事であろう。能楽好きの野村に対する心憎い亭主の演出といえよう。

14 益田孝の茶会②

大正十一年（一九二二）二月一日、山縣有朋（一八三八〜一九二二）が死去した。次の日の『読売新聞』は「山縣公、夫人の手を握った仮近親を顧みて静かに往生」という見出しで山縣の死を伝えている。益田は同年九月一日に山縣の追懷茶会を行なった。有朋の忌

日である。この日の相客は、山縣公夫人貞子、野崎広太（幻庵）、実業家の山下亀三郎夫妻の四名であった。山縣公夫人貞子は元「やまと」という名の新橋の芸者（本名：吉田さだ）で、山縣の第二夫人であった。この貞子と益田の側室たき（子）は姉妹である（貞子が妹。『近代美人伝』には貞子の生い立ちについての比較的詳しい記述がある。その中に益田と山縣の関係、そして二人の容姿について述べた部分があるので参考のため引用する。

貞子夫人の姉たき子は紳商益田孝男爵の側室である。益田氏と山県氏とは単に茶事ばかりの朋友ではない。その関係を知っているものは、彼女たち姉妹のことを、もちつもたれつの仲であるといった。相州板橋にある山県公の古稀庵と、となりあう益田氏の別荘とはその密接な間柄をものがたっている。

姉のたき子は痩せて眼の大きい女である。妹の貞子は色白な謹ましやかな人柄である。

この記述からもわかるように、益田と山縣は側室が姉妹であるという関係だけでなく、別荘も隣にあるという程親密な関係であった。野崎との関係については判然としないが、野崎が『らくがき』で山縣に関するエピソードをいくつか記載しているので、野崎とも親密な関係であったことは確かである。山縣夫妻と山下との出会いにつ

いては、かなりはつきりしている。大正五、六年頃元「やまと新聞」の松下軍治という人が作った別荘があり、それを山縣と益田が山下に買い取るようにすすめた。そこで山下は山縣の所に行き(場所⑧は小田原「古稀庵」、そこで初めて山縣夫妻に会った。そこから両者の付き合いが始まり、以後益々親しくなったのである。

この日は、山縣が生前親密に付き合っていた人々ばかりが、参会したといえよう。場所は小田原の掃雲台であった。主な道具組は次の通り。

〈床〉 行成筆色紙

「涙川いつる水上早ければせきそかねつる袖の柵」

(後入) 故含雪公箱根遊覧の時の即興歌

「来る度に目に新しく見ゆる哉山の姿も水の流れも」

「鶯は春に変らぬ声そする山紫陽の花の木陰に」

〈釜〉 芦屋・山水地紋

〈花入〉 瓢釣花入

〈花〉 箱根山中種々の草花

〈茶入〉 太郎庵棗

〈茶碗〉 呉州・阿弥陀仏の文字あり

〈茶杓〉 故含雪公作・銘窓月

〈水指〉 空中手造⑨

まず寄付には貞子夫人の詠草三首が掛けられた。これは、生前益

田邸で詠まれたものであるが、その時その場に居合わせたのが、この日茶会に呼ばれた人々でもあったという思い出深い一品である。

いよいよ席に入ると、床には行成筆の一軸が掛けられていた。「涙川……」というもので、『拾遺抄』巻八(窓下)に収められている紀實之の歌である⑩。歌意は「涙川の水上から流れてくる涙の水の流れが早いので私の袖の柵ではとてもじゃないけれど塞き止めることはできない」といったものである。止めようとしても止められない涙を歌に詠みこんで、深い悲しみを表現している。野崎はこの掛物について「一読三嘆、熟々とその歌意に依りて之れを察すれば、主翁(益田のこと)筆者注が往事を偲びて、今日は故公追懐の茶事を催するにこそと覚え」たという感想を述べている⑪。懐石、中立後、後入の床には、山縣の歌二首が書かれた掛物が用いられた。その掛物は、山縣が生前、益田と共に箱根に遊んだ時に、山縣が即興で詠んだ歌が書かれたものであった⑫。道具も「阿弥陀仏」の文字のある呉州の茶碗を用いたり、山縣が作り「窓月」という銘をつけた茶杓を用いたりして、故人を偲んでいる⑬。当然、先程挙げた初入の床の恋歌は、山縣を失くした悲しみを、益田が表現したものである。歌は恋歌と言われなければ哀傷歌としても通用するものであるから、益田はそのつもりでこの掛物を選んだのであろう。追懐茶会に最もふさわしい掛物の一つと思われ、恋歌をうまく利用した成功例といえよう。ちなみに、この掛物はその後益田の側室たきの息子である

益田信世に渡り、東京美術倶楽部において大正十三年（一九二四）十月二十七日の入札に出品されている。

15 団琢磨の茶会

団琢磨（狸山：一八五八〜一九三二）が恋歌の掛物を茶会の席に用いたのは、大正十三年（一九二四）七月十一日正午の茶会であった。彼は三井鉱山、三井合名会社などの要職を歴任した実業家であり、狸山と号した。当時彼の家は千駄ヶ谷原宿にあり、そこに彼は「松滴庵」という茶室を持っていた。彼は江戸千家大久保北隠（二覚庵）門下である。『男爵団琢磨伝』によると、この茶室は「団家の作事奉行仰木魯堂」が「中根岸松平齋光男邸に在った、旧昨州津山藩松平確堂公好み十二畳半碩寛堂を、千駄谷原宿の団邸に移し来り、君の意に従つて、其左右の向を変へ、之に三畳台目の新席を附築し」たものである。この茶会には高橋義雄（箒庵）も招待され、彼の茶会記にもその記録が残っている。それによると、高橋はこの茶会に招待された事を「余りの以外に午睡の夢かとばかり打ち驚き、「今頃何として此不時の一会を催さるゝにや」といぶかしく感じて、益田孝（鈍翁）に開催理由を聞いた。益田によると、明治四十三年（一九一〇）に「旧大聖寺藩主前田利鬯子所蔵小野道風筆「継色紙」十一枚綴帖を分割の節、松滴庵主（団琢磨―筆者注）は海外旅行中であつた」が、益田は団の為に「専断で一枚申請けて置いた」とい

う。そのことを益田は忘れていた。表具が出来上がったにもかかわらず、益田には何の連絡もなかったからである。ところが、益田のライバル的な存在である、原富太郎（三溪：一八六八〜一九三九）夫婦を団邸に招いた時、団がこの掛物用いて原夫妻をもてなしたという。その噂を聞きつけた益田は、団に世話をしてやった自分を何故招かないのかと抗議し、団は仕方なく色紙披きの茶会を催すことになったのだ、という。

この日の客は、正客益田、末客伊丹信太郎（楊山）、その他岩原謙三（謙庵）、福井菊三郎（親庵）と高橋の計五名であった。伊丹は東京の道具商、岩原は芝浦製作所所長などを務めた実業家、そして福井は、三井系の会社で活躍した実業家である。岩原を除く四名はいずれも三井に関係した人物である。道具商の伊丹も若い頃、三井物産に勤めている。岩原は茶会での滑稽なエピソードの多い人物であり、益田ら数寄者の間でも人気者であった。しかし、この日彼が茶会に呼ばれた理由は恐らく他にある。彼は加賀大聖寺藩士岩原孝興の長男である。先述したようにこの日の掛物は旧大聖寺藩主の所藏品であつた。それ故、ゆかりのある岩原を招待したのである。当日の道具組は次の通り。

〈床〉 小野道風筆継色紙・旧大聖寺藩主前田利鬯子所蔵

「このよひのありあけの月のありつらん君をおきてはまつ人もなし」

〈釜〉 茄子鑲付・団扇中布袋地紋

〈花入〉 砂張船形釣花入

〈花〉 睡蓮一輪

〈茶入〉 信楽焼・銘布引

〈茶碗〉 三島

〈茶杓〉 江月和尚共筒

〈水指〉 木地釣瓶²⁹

さて、問題の掛物の歌は『万葉集』巻十一に収載されているよみ人知らずの歌である。この掛物について、高橋は「原宿団郎松滴庵の床に掛けられた小野道風継色紙の歌は固より恋歌であるが、君をおきては待つ人もなしの下の句が、其俣茶客に対する主人の会釈とも思ひ做されて一段茶席に嵌り、（中略）苦心の跡が歴々と窺はれた」と評している³⁰。また、『男爵団琢磨伝』には「扱て当日の主品継色紙に就いては、歌は恋歌であるが、『君をおきてはまつひともなし』と云へる文句が茶客に対する庵主の温情を表明したかの如く、恋歌も此に至れば最も能く茶事に適応するものなりとて、一同感服の外なかつた」と記述されている³¹。両者とも下の句に亭主の意を汲み取っている。ここで注意しておかなくてはならないことは、彼等が「恋歌であるが」というエクスキューズをつけていることである。つまり、これは「茶の掛物に恋歌は適さない」、あるいは「掛けるべきではない」といった知識を彼等が持っていたことの証左になる。

彼等はその常識破りをした団に、「苦心の跡」を見、「感服」したのである。この茶会が不時の茶会であった事³²、そして色紙が「継色紙」という名物色紙であった事、さらに歌の文句がこの茶会の趣旨に適っていた事、などの理由により、恋歌が容認されたものと考えられる。

16 粕谷徹三郎の茶会

粕谷徹三郎（半醒：生没年未詳）は、「敬和会³³」のメンバーで名古屋市西区塩町（現在の西区幅下一丁目堀川沿）に住んでいた人物である。高橋義雄は「耕雲庵粕谷徹三郎君は嘗て干鰯問屋を営み、中京実業成功者の一人だが、数年前より敬和会員と為りて漸く閑生涯に入り、昨年など例の鱒、鯉判会に於て鯉方の代表者となりし事あり。為人温順洒脱にして銜はず、飾らず、率直の間に雅致多きを以て茶趣も自ら其性行を現はし、最も同人に敬愛せらるゝさうである」と彼を紹介している³⁴。また、野崎広太は「この庵主（粕谷のこと）筆者注）は極めて無邪気にして爽邁風流」と彼を評している³⁵。彼の事績についてはほとんどわからないが、『名古屋商工会議所五十年史』によると、大正七年（一九一八）一月八日に商工会議所役員に就任し、同九年十一月二十五日に退任している。この間に運輸副部長を務めている³⁶。『名古屋肥料雑穀問屋組合沿革史』³⁷によれば、同組合の三代頭取にもなっている。彼の茶歴については全くわからない。

名古屋には尾張藩数奇屋方粕谷家に伝わる茶道の流派があるが、その流派と関係があるのかもしれない。彼が恋歌の掛物を掛けたのは、大正十五年（一九二六）五月十四日正午の茶会である。正客を高橋義雄（箒庵）とし、それに道具商の横井庄太郎（二三）、それに同じ「敬和会」のメンバーである森川勘一郎（如春）が加わった。場所は粕谷の自邸にあった「耕雲庵」（二畳台目）である。道具組は次の通り。

〈床〉 藤原定頼卿筆古今集歌切

「夏ひきのてひきの糸をくりかへし事しけくともたえんと
思ふな」

「里人のことは夏野のしけくともかれゆく君にあはさらめ
やは」

〈釜〉 天明四方尾垂

〈花入〉 片桐石州作一重切

〈花〉 大山蓮華

〈茶入〉 瀬戸焼・銘八橋

〈茶碗〉 無地刷毛目酢次・純白の刷毛目釉

〈茶杓〉 小堀遠州共筒・銘盧橋

〈水指〉 木地曲

掛物の歌はいずれも『古今和歌集』卷十四（恋歌四）に収載されていて作者は不明である。さて、彼は何故この歌切を掛けたのだら

うか。答えは簡単である。彼はこれを季節の掛物として取り扱っているのである。すなわち夏の到来を告げる掛物として掛けたのだ。

それは道具組を見ても明らかである。まず、茶入に瀬戸焼銘「八橋」を用いているのは、有名な『伊勢物語』業平東下りの段（第九段）の杜若を思い起させる（物語の場所も三河国へ現在の愛知県知立市と近い）。また「盧橋」という銘をもつ茶杓を用いて夏の花である橘をそこにつけ加え、夏という季節を強調する。無地、純白の刷毛目茶碗、砂張の建水、木地曲の水指は、茶会に清涼感を与える役目を担っている。つまり、この茶会で用いられた恋歌は恋歌としてではなく、偶然二首共に恋歌でありながら、季節感を強く印象付けるための掛物として用いられたのである。

17 益田孝の茶会③

昭和三年（一九二八）六月十三日正午の茶会に恋歌を掛けた。場所は小田原掃雲台邸「無仏庵」である。またこの茶会は益田が年中行事として行なっていた初風炉の茶会であった。高橋義雄（箒庵）を正客とし、三重四日市の実業家熊沢一衛（月台）、歌人の佐佐木信綱、「和敬会」会員の近藤滋弥（其日庵）、茶道具商大善主人の伊丹善蔵がこの日の客であった。当日の道具組は次の通り。

〈床〉 桂万葉切

「みそらゆく月のひかりにたゝひとりあひ見し人の夢にし

みゆる」他一首

〈釜〉 佐久間将監所持・鬼面鍔付九輪釜

〈花入〉 遠州名物・銘深山木

〈花〉 白根葵 (日光山の奥にある白根山の雪中に咲き出た物)

〈茶入〉 中興名物・藤四郎作・銘春山蛙声

〈茶碗〉 御所丸黒刷毛

〈茶杓〉 古田織部共筒

〈水指〉 木地釣瓶

掛物の歌の作者は、安都扉娘子である。この掛物は伝源順筆桂本

万葉集¹⁶⁾で、別名「柁尾切」とも呼ばれる。また、大正十三年十二月

八日に行なわれた吉田丹左衛門(楓軒)の入礼会にも出品されている。

この掛物は計十行からなるもので、先の歌と共にもう一首歌があり、

それは舍人吉年の歌「ころもてにとりとこほりなくこにもまされ

るわれをおきていかせむ」である。共に『万葉集』巻四(相聞)

に収載される歌である。歌意は一首目が「空を行く月光の下で一目

見た人が夢にあらわれます」といったようなものである。二首目は

「袖にすがって泣く子にもまさって別れを悲しむ私を後に残してあ

なたはどうするのでしょうか」といった意味になる。何ら茶会には

関係ないと言ってよいだろう。

では何故この歌物を掛けたかという、理由はいたって単純で、

熊沢と佐佐木という「万葉研究家」が相客であったからである。そ

れは高橋の記述によっても知る事ができる。「今日佐々木、熊沢両

君の如き万葉研究家に対して、古筆中最も貴重な此歌切は蓋し此

上なき御馳走であらうと思ふ」といったものである。佐佐木につい

ては「万葉研究者」といっても差し支えないが、熊沢については適

切な表現ではないと思われる。むしろ彼は熱心な「古筆愛好家」と

いうべきであり、その証拠に古筆帖「月臺」(田中親美編)を大正十

四年十月に上梓している。ところで、この「御馳走」は効を奏した

と見えて、熊沢、佐佐木両人が茶会中に歌を詠んでおり、この茶会

は「万葉茶会」とでも称すべきものとなった。要するに、この茶会

では恋歌であろうとなかろうとそんなことは問題ではなく、『万葉

集』の歌切で、かつ貴重な掛物であれば、同様の効果が得られたに

違いない。

18 山中松治郎の茶会

山中松治郎(松篁：生没年未詳)は、京都市東山区粟田口三条坊

門に自邸を構え、山中商会(株)取締役として新古美術骨董商を営

んでいた人である。主に外国人相手に、日本の美術品を扱っていた

という。昭和五年(一九三〇)十一月二十九日正午の茶会に、彼は

恋歌の掛物を掛けている。客は正客を淡々齋千宗室とし、以下元永

堂店主福田浅次郎(元永)、林新助営業所店主の林新助(業庵)、永

昌堂主人の土橋嘉兵衛(無声庵)、末客は八方堂主人の今井貞次郎

(八方)であった。淡々斎を除いて皆が道具商である。さらに、彼等は皆大正十年に行なわれた「洛陶会」主催の東山大茶会で釜を掛けた人々である。この日の茶会は「十一月の暁会」と題された会であった。「暁会」とは何か。「茶道月報」に次のような説明がある。

「暁会は今日庵の淡々斎宗匠が中心で、今井貞次郎、松風嘉定、林新助、土橋嘉兵衛、福田浅次郎、山中松次郎の諸子の結合で、淡々斎宗匠が嘗て林氏の会の十時を間違へて正午に出席された時に、一同がその御報ひにといはれて、円能斎宗匠と淡々斎宗匠とが二月の寒空に暁茶事を催ふされた。その午前四時に一同が悉く揃ふて爾来暁会と命じ交代で年四回開いて居る」というものである。この茶会はその集まりであった。主な道具類は次の通り。

〈床〉 後醍醐天皇宸翰・歌仙切画賛・横物・伊勢

「三輪の山いかに満ちみんとしふともたづぬる人もあらじ
と思へば」

〈釜〉 瓢形・初代寒雉作

〈花入〉 織部・竹・一重・風羅裏と黒漆直書

〈花〉 白玉椿・榛

〈茶入〉 朝鮮唐津・胴張・如心斎箱

〈茶碗〉 宗入作・赤・如心斎箱・銘シユクシ

〈茶杓〉 吸江斎作・二本入のうち

〈水指〉 高取・一重口

掛物は「後醍醐天皇宸翰 歌仙切画賛 横物 伊勢」とあり、

「大和守従五位上藤原継」とあった後、歌が書かれている。歌は『古今和歌集』巻十五(恋歌五)に収載されている伊勢の歌である。

この歌が書かれた歌仙切で現存するものは、四つある。佐竹本、為家本、藤房本、木筆本がそれに当たる。この内で位の記述すなわち「大和守五位上藤原継」の文字があるのは、わずかに佐竹本と藤房本のみである。この内佐竹本は大正八年(一九一九)に有賀長文

(三井合名理事：一八六五〜一九三八)に所有された後、昭和十年(一九三五)十月二十八日に行なわれた有賀家入札において松永安左衛門(耳庵：一八七五〜一九七二)に八万三千九百円で渡ったことがわ

かっている。つまり、佐竹本はこの間動いていない。また、佐竹本は後京極摂政藤原良経の筆によることは、昔からよく知られていることであるから、この茶会に用いられたものでないことは確かだ。

一方の藤房本はどうか。森暢氏によると、藤房本は「濃彩の歌仙絵であり、古筆家の極では、万理小路藤房筆としているが、後醍醐天皇宸翰としているものもある」という。藤房本は一名を「後醍醐帝本」とも言い、「夙くから一部の人達に愛好されてい」る。以上のことから、この日の茶会に用いられた掛物は、藤房本三十六歌仙絵の中の一枚であると断言してよい。

さて、この歌切が掛けられた理由について考えたいと思うが、現在のところ明確な理由を見出せないでいる。道具組からは大したヒ

ントは得られないように思う。歌は空しく待つ人の気持ちを歌ったものであるから、今日の茶会を長年空しく待っておりまして、というような意味にとれなくもない。しかし、それだけでは理由として弱いのではないか。これは推測の域を出ないのを承知した上でであえて理由づけをするのだが、ヒントは客組と時代背景にあるのではないか。先述したように淡々斎を除いた人達は皆道具商であった。淡々斎が正客であったので彼に合わせた道具組になっているが、彼を含め恋歌が千家流のわび茶にも使えるという一例を、彼はこの茶会で示したかったのではなからうか。長年京都の土橋永昌堂(客である土橋の店)で働いていた赤坂政次に次のような述懐談がある。

「私が奉公に入った頃、昭和の四、五年という時代は何にも売れない時代でした。(後略)」。時まさに「昭和恐慌」、「世界大恐慌」の時代である。山中はこの掛物を掛けることであわよくば誰かが買ってくれることを期待していたか、あるいは「昭和恐慌」、「世界大恐慌」と言われ、物が売れなかった今の時世を嘆いたものではなからうか(もししかすると、この時期には既に、淡々斎は昭和十五年に行なう予定の利休三百五十回忌追善茶会に用いる掛物を探していた可能性もある)。そう思ってもう一度歌を解釈しなおすと、何だか空しさが伝わってくるような気がする。残念ながら彼の師承は不明であるが、淡々斎と深い関係があったことを考慮すれば、裏千家流の茶道を行なっていた可能性はある。

19 松尾喜七の茶会

京都市下京区五条高倉で、「松喜」という「京鹿の子商」を営んでいた松尾喜七(翠庵：生没年未詳)の茶会である。京鹿の子は、絞り染めの一種であるが、その中でも絹を使用し、かつ一切の道具を使わずに作られるのが特徴である。松尾のことを「温厚篤実な人」と評したのは、茶道ジャーナリストの佐々木三味(一八九三〜一九六九)であった。松尾は先述した今井貞次郎らと共に「長生会」、「蜂庵会」などの会員で彼等と定期的に茶会を開いていたものと思われる。彼の名は昭和九年(一九三四)一月発行の『講談倶楽部』第二十四巻第一号付録「全国多額納税者一覧」にも見え、当時五千九百六十四円の納税を行なっていることがわかる。彼が恋歌を用いた茶会を催したのは、その年の五月十七日であった。新席「翠庵」の席開きである。当日の主な道具組は以下の通り。

〈床〉 肖柏筆・住吉社壇詠三百首の和歌・藤田家伝来

「郭公：いなかてのたをみや人のあかつきわしつやもいかにやすくほととぎす」

「稀逢恋：ほのかなるゆめをくるしきしら露のかゝれとくやみとたへおきけむ」

「神祇：あふきてもいやたかかりきこのみこし神のしるしをみつかきの松」

〈釜〉 義政公好・六角筒形・探幽下絵鶴地紋・弥五郎作

〈花入〉 遠州作・竹二重・藤田家伝来

〈花〉 葵葛・豌豆・紅薊

〈茶入〉 一入作・黒・如心齋箱・銘宮柱・啐啄齋箱

〈茶碗〉 錐兵器・権十郎箱

〈茶杓〉 随流作共筒・銘寸戸・如心齋箱

〈水指〉 伊賀・重餅・耳付・共蓋^⑧

掛物は「肖柏筆 住吉社壇詠三百首の和歌 藤田家伝来」である。

歌の読みは、一首目が「いねかてのおほみや人もあかつきはしつや
もいかにやまほとつきす」、二首目が「ほのかなる夢そくるしきし
ら露のかゝれとてやはとたえをきけむ」、三首目が「あふきてもい
やたかゝりしたのみこし神のしるしを美津かきの松」が正しい。染
筆者である牡丹花肖柏（一四四三〜一五二七）は、連歌師として著
名で、師の飯尾宗祇（一四二一〜一五〇二）、同門の柴屋軒宗長（一
四四八〜一五三二）と三人で巻いた「水無瀬三吟」や「湯山三吟」
は連歌の模範的作品として有名である。生涯旅を好んだともいう。
この掛物は「藤田家伝来」とあるように元は藤田伝三郎の所蔵品で
あった。『香雪齋蔵品展観図録』にこの掛物がモノクロ写真で掲載
されている^⑨。この図録に掲載された美術品は、昭和九年（一九三
四）四月五日に大阪美術倶楽部において入札が行なわれ、その際に
この掛物を買ったのが松尾であったと思われる。『淡々齋茶会記』

によると、客は淡々齋の他は「他五名」とあって全くわからない。

新席開きの茶会に松尾はつい先日手に入れた掛物を掛けた。あるいはこの日が掛け初めであったかもしれない。この掛物には恋歌は入っているものの、純然たる恋の掛物ではない。彼がこの掛物を掛けた理由もそこにある。結論から述べると、彼は一首目と三首目を重視したのである。すなわち、季節相応の「郭公」と、新席開きにふさわしい神祇（普通は賀の歌が多く掛けられるが）の歌を選んだのである。もちろん新席に新しく手に入れた掛物を披露することが歌の意味などより優先されたことは想像にかたくないが、いずれにせよ、彼はこの掛物を恋歌の掛物とみなしていなかったことは、道具組を見ても明らかである^⑩。彼が千家流の茶道を学んだかどうかはわからないが、淡々齋の葬儀に献香しているから、淡々齋とはある程度の付き合いはあったと思われる。

20 利休居士三百五十回忌追善茶会（淡々齋の茶会）

淡々齋千宗室（一八九三〜一九六四）は、裏千家十四世当主である。彼に関する資料は彼自身の著作、あるいは『茶道月報』、『淡交』などの雑誌類も含めれば膨大な数にのぼる。が、『無限の譜 淡々齋宗室宗匠追悼録』、『比翼集 無限齋・清香院のふまれし道』、あるいは『無限齋・清香院の遺芳』が彼の事績と人柄を知るのには適していると思われる。その他、好みの道具類や茶会の様子を知る

のには『裏千家 淡々斎遺芳集』二巻が参考になる。彼が恋歌を掛けたのは、昭和十五（一九四〇）年四月二十二日から二十四日まで三日間のことである。場所は大徳寺真珠庵。利休の三百五十回忌であった。当日の道具組は次の通り。

〈床〉 定家卿 小倉色紙 集合十種所載

「王数礼志のいくすへまてはかたけれときふをかき李乃伊のちともか那」

利休居士から津田宗及に伝来 萌黄地に金砂子霞引の色紙

〈釜〉 利休四方・古浄味作・蓋芦屋 宗旦から宗偏に伝来

〈花入〉 砂張・経筒

〈花〉 菩提樹・都忘れ

〈茶入〉 大名物・利休・尻張

〈茶碗〉 長次郎・利休七種の内・銘早船・利休居士箱

〈茶杓〉 利休作・銘ゆがみ

〈水指〉 大名物・古備前・破桶

掛物は「小倉色紙」である。歌は『新古今和歌集』巻十三（恋三）にのる儀同三司母の歌である。この掛物の評判はどうだったであろうか。まず、表千家の機関雑誌『和比』を見てみよう。この年の六月号に二つの異なった意見が見える。まずは御影左大臣という人の「茶会髓録 利休居士に訊く」から見てみよう。この文章は

「利休居士に訊く」という副題がついているように、筆者と利休が対談している形式をとっている。掛物についての記述は次の通り。

利休……真珠庵の掛物は定家の小倉色紙だったが、昭和時代の茶にはあんなのが流行ると見えますね。

左大臣……あなたの御在世中には見られぬ傾向でせう。

利休……それにあれは「わすれしなゆく末まではかたけれど」、たしかに恋歌ぢやつたね。わしの追善茶に、事もあらうに恋歌を掛物にするなんて怪しからん。

左大臣……「けふかきりの命ともかな」で、追善歌のつもりですよ。

利休……阿呆らしい。あなたも左大臣と名のる長袖のはしくれともあらう者があれを追善歌なんていひくるめるなんて余り人を馬鹿にしなざるな。

左大臣……いや、これはまことに相すまぬことで。

といった調子である。非常に評判が悪い。理由は恋歌であるからであり、とても追善歌とはとれないという。一方、「いちゐのや」と称する人の「大徳寺めぐり」と題された記事には次のような記述が見える。

字掛物にては小倉色紙と利休白餅文(玉林院の掛物―筆者注)

記憶に浮び候。小倉色紙は「わすれしの」の歌にて、料紙も見事、字も判らか、ことに紫印金の表装申様もなく物寂びて重々しく見受け候。

という具合で評価が高い⁽⁴⁾。先程の批評と比べて何が違うかという
と、前者が歌の内容を重視していたのに対し、こちらはあくまでも
「お道具」として「小倉色紙」の掛物を見ているということである。
先に述べたように、「小倉色紙」は江戸時代から色紙の中でも特別
な位置を占めてきた。であるから、道具としてみれば最高のもので
あり、それを掛ける事はいわば最高のもてなしなのである。つまり、
美術品として見るならば、淡々斎が用いた掛物は最高の物であると
いえよう。ところが、恋歌の掛物という観点から見ると、千家流の
茶道に反することになる。名物であるが恋歌という特徴をあわせ持
つが故に、上記のような二つの異なる評価がなされたといえよう。
かなり後のことになるが、茶道ジャーナリストの佐々木三味は、こ
の時の掛物について「いささか感服せぬ歌だが集古十種所載に免じ
てであろう」と評している⁽⁵⁾。これも歌の内容で掛物を評価した結果
である。

ところで、何故淡々斎はこのようなリスクをおかしてまでこの掛
物を選んだのであろうか。それには二つの可能性が考えられよう。

一つは、利休自身が「小倉色紙」を掛けた記録はないものの、利休
の時代から次第に掛けられるようになり、やがて名物色紙となった
「小倉色紙」を掛けることで、利休を偲ぶ心を表現したかったので
はないか、ということ。これは茶の歴史に対する畏敬の念の表現で
もある⁽⁶⁾。二つ目は、歌の意味から。歌を意識してみると、「忘れま
いとおっしゃる遠い将来までは頼みがないものです。ですからいっ
そこのようにお逢いしている今日を限りに死ねれば幸せだと思いま
す」というような意味になる。この歌を茶道の世界に置き換えてみ
ると、「一期一会」の精神を表現したものと解釈できる。淡々斎は、
茶の基本である「一期一会」精神を墨蹟などではなく、「小倉色紙」
で表現しようとしたのではあるまいか。五十年に一度の利休忌に自
分が茶をたてることの喜び、その喜びの中で仮に死んだとしても悔
いは残るまい、いやいっそのまま死んでもよい、といった気持ち
で彼はこの茶会に臨んだ。この茶会に対する彼の意気込みと覚悟を
示すために、リスクを承知でこの掛物を選んだのではないだろうか。
淡々斎のただならぬ気迫が感じられる茶会である。

以上、いくつかの例を出して恋歌が使われた茶会について考察を
行なった。

まとめ

前論稿と本論稿の考察の結果、次のようなことが明らかになった

(前論稿と重複するところがあるが、これは前論稿を合わせた全体的なまとめであるので、再録した)。

①初期の茶会では名物意識が強く、歌の内容は考慮されていないこと。つまり、季節感を表現するものとして掛物が撰ばれることはなかったし、掛物に恋歌が用いられていても、それは意図的に行なわれたものではない。この時期の茶会で歌の掛物といえは、すなわち「小倉色紙」を指すものとして限定されているのも、初期茶道の特徴の一つである。

②小堀遠州の時代になって初めて、歌の内容まで吟味して掛物を選ぶようになったと思われる。それは四季に応じた掛物を使用していることから明らかである。当然恋歌かどうかといった問題も出てくることになる。

③千家流茶道では一部の例外(利休追善茶会など)を除いて、恋歌は基本的には禁止とされ、それがほぼ守られているように思われる。一方、大名系茶道の茶会には恋歌が掛けられることがあった。小堀遠州の茶会がその例である。しかし、特に江戸時代の茶会記に顕著であるが、歌掛物が用いられていても、その歌まで記載してあるケースはむしろ稀であり、ここに見出すことが出来なかった茶会にも恋歌が使用された可能性はないとはいえない。今後、記載されていない歌を特定すると共に、他の茶会記資料を用いて事例を増やす必要がある。

④恋歌を掛ける目的は、いくつかのパターンに分類できる。第一節で取り上げた1〜20までの茶会を分類してみよう。

- I : 人を恋う気持ちを表現 …… 2、15
- II : 追悼の念を表現 …… 3、4、8、10、14、20
- III : 客に対する配慮 …… 6、17
- IV : 遊びとして …… 7
- V : 季節の歌として …… 9、12、16、19
- VI : 名物であるから …… 1、3、6、11、12、13、15、20
- VII : その他、不明 …… 5、18

ここで二つ以上の項目にわたり分類されているものがあるが、それにはそれぞれ理由がある。該当するのは、3、6、12、15、20である。

3は、利休二百二十回忌追善茶会に掛けられたものである。この日掛けられた定家の「こぬ人を……」の掛物は、「小倉色紙」という名物であり、かつ紀州徳川家の家宝であった。

またこの色紙は、『江岑夏書』において、利休がよしと認めたという伝承を有する。また歌意も利休がないわびしさを表現したものととして、追善に相応しいものと思われる。このような理由からIIとVIに分類した。

6は元大名に対する配慮と、名物である「小倉色紙」を用いてのもてなしであると思われるので、IIIとVIに分類した。

12は、大正九年（一九二〇）の「光悦会」における茶会である。

先述したように、この会には二人の人物が恋の掛物を用いた。藤田伝三郎（香雪）と林新助（楽庵）である。藤田の理由は、これを秋の掛物と見ていたと思われるので、Vに分類した。一方の林は「光悦会」にちなみ名物である「本阿弥切」を使ったのでVIに分類した。

15は、団琢磨（狸山）の茶会であるが、これは名物である「継色紙」を用いた茶会であるとともに、その歌意があなたをおいて他に待つ人はいません、といった内容であったので、それが客を恋う気持ちを表していた。それ故、一応分類上はIに加えておく。

20は、利休の三百五十回忌に掛けられたものである。「小倉色紙」かつ「集古十種」所載、そして「利休居士から津田宗及に伝来」といった名物であることが、一つの理由。そしてもう一つの理由は、歌意が「一期一会」の精神に通じるということから掛けられたと思われる。同時にそれは利休を思慕する気持ちをも表現するものであった。IIとVIに分類したのは、このような理由による。

こうして見てみると、「名物であるから」という理由（VIに相当）が最も多い。これは、歌、特に古歌には恋歌が多く、結果として名物とされる掛物に恋歌が入る確率が多いからである。名物とはその由来、稀少性などから決められることも多く、恋歌であるかないかは二次的な問題となる場合もある。茶の掛物には「恋歌である」という理由よりも「名物である」という理由の方が優先される場合があることがわかる。

あることがわかる。

次に多いのは、追悼の念を表すもの（II）である。特に3、4、20はいずれも利休追善茶会であった。千家流茶道では、利休追善茶会に限って恋歌を用いることが許されるのかもしれない。千家にあって利休追善茶会はそれだけ特別なものである。季節の歌として掛けられた（V）ものである。いずれにせよ、IIに分類されたものは、故人を偲ぶ歌として解釈し、時宜に合った掛物にしている。恋歌の人を恋う気持ちがうまく利用されているものと言ってよいだろう。

それに次いで多いのは、季節の歌と解釈された例である。このケースは恋歌の他に季節の歌がある場合が多く、季節の歌につられて恋歌も季節の歌とみなされていた。恋歌が一首だけある掛物では歌の中に季節を表す言葉が入っており、無意識的に季節の歌と解釈されたと思われる。

客に対する配慮（III）というのは、客の格を尊重したという理由が一つ。もう一つは、客の嗜好に相応する掛物であるという理由。つまり、客にかなりの重点をおいた選択といえよう。ここには、恋歌云々という考え方は見られない。

遊びとして用いた例も一例あった。7がそれに当たるが、これは、恋歌としてあえて使っているのであって、歌意も本来の恋歌の解釈が茶会では必要である。しかし、先ほどから見ているように、ほと

んどの場合が恋歌を、季節あるいは教訓歌として読みかえていることが多かった。そういった意味で、この茶会は、恋歌を恋歌として用いた例として貴重な実例であった。

その他の項目(Ⅶ)に分類した茶会、18では「歌仙切」を用いていた。一応「歌仙切」という名物を用いてはいるが、名物とするのには少し物足りない。歌意から亭主の嘆きを託したと思われる節もあるのでここに配した。この茶会と5の茶会は、目的が明確に読み取れないので、詳細不明という意味も含めてここに分類した。

総合的に見ると、茶会で恋歌の掛物が掛けられることは間々あるが、ほとんどが歌意を読みかえていること、が注目される。人を待ちわびたり、追慕したりする意味に変えて解釈しているのである。むしろ、恋歌を(原意のまま)恋歌として意図的に用いた例はほとんどない、といってよい。けれども、和歌の一つの特徴として友情を詠んだ歌がほとんどないことなどを考え合わせると、恋歌が時に友情、親愛の念を表すのに使われた可能性は多いにあるだろう。その好例が2や6の茶会である。また、恋歌が人を強く求める歌である点を利用して、亡き人を偲ぶ心を表現するものとして利用されたケースも少なくない。

茶書における記述では、千家流茶道ではどんな理由があろうとも、恋歌は基本的に掛けてはいけなかった。しかしこれまでに明らかになったように、利休追善茶会に限って彼らは恋歌を用いていた。こ

れは、千家流茶道、特に家元にとって利休追善茶会が重要かつ特別視されていることを意味する^⑧。前論稿で利休二百五十回忌に用いられた掛物は恋歌という意識がなかったのではないかと述べた。しかし、本稿で見たとように利休二百二十回忌、三百五十回忌の時にも恋歌が掛けられていることを考え合わせると、先の茶会も恋歌と知って用いた可能性もあながち否定できない。いや、むしろその可能性の方が高い。なぜなら両茶会には、少なくとも二つの共通点が見出される。一つは利休ゆかりの掛物とされていること、歌意が利休追慕の気持ちをよく表していること、である。つまり、これまで確認できた例から言うと、千家において恋歌の掛物を用いてよいのは、利休に因んだ掛物で、かつ利休を偲ぶ歌意を持つ掛物である時のみであるのかもしれない。これについては、現在のところ事例が少ないので今後も引き続き調査を行いたいと考えている。つまり、千家流茶道では普段の茶会では恋歌を掛けてはいけないが、利休の追善茶会だけは例外であるということが言えるであろう。

「近代数寄者」と呼ばれる人々にも千家流の茶道を習得した人が多い。それにもかかわらず、彼等は恋歌を掛けていた。この使用方法には様々あったが、益田孝(鈍翁)などは、確認できた三回の茶会の内、二回は追善茶会に恋歌を用いている。利休追善、という要素を抜きにすれば、千家流茶道の使用法と同じ使用方法である。それ以外の「近代数寄者」と呼ばれる人の恋歌使用法は様々で一貫性がない。

表1 歌掛物を用いた茶会（近代編）

茶会記	元号	年	西暦	月	日	刻限	主催者（場所）	掛物	初句	部立	恋歌
古今茶湯集	明治	1	1868	3	30	晡時	前田竹涇・雲翠室にて	竹字歌・三月尽	きのもとに	春	
	明治	1	1868	6	9	正午	藪内紹智・燕庵	鷹司前府輔熙卿詠歌	たにがはの	夏	
	明治	2	1869	2	19	正午	前田竹涇・賞春軒にて	懐紙	ちよまでも	春	
	明治	3	1870	2	26	正午	前田竹涇・雲翠室にて	懐紙	おいせぬ・		
	明治	3	1870	9	16	不明	碌々斎千宗左・七畳敷	大心和尚筆禪一字掛物	くさむらを		
	明治	3	1870	11	18	正午	横井半三郎・二畳台目板入	松平不昧手造茶碗添文歌入	やみごろも		
	明治	5	1872	2	29	正午	古筆了仲・三畳台目	慈鎮和尚筆花の歌五首	不明		
	明治	6	1873	2	8	正午	碌々斎千宗左・七畳敷	雪舟の絵の賛	はるのひに	春	
	明治	6	1873	10	12	正午	前田竹涇・雲翠室	沢山和尚文と歌	なにをかな		
	明治	10	1877	6	23	正午	松平親良	東山義尚將軍短冊	あしねはふ	夏	
	明治	16	1883	6	1	不明	横井宗音・名古屋前津にて	後京極良徑卿筆色紙	われみても	雑	
	明治	19	1886	5	18	午後四時	安田松翁・又隠四畳半	沢庵和尚筆二首和歌	不明		
	明治	25	1892	2	11	正午	益田克徳	利休居士歌入文	不明		
	明治	27	1894	2	6	正午	松浦心月	細川幽齋試筆	はるたちて	春	
	明治	27	1894	5	24	正午	渡辺驥	俊成定家両筆・古歌三首御家切	不明		
	明治	30	1897	11	8	正午	益田非黙・根岸邸・長三畳左勝手	寂蓮法師筆・朗詠切晩秋詩歌	不明	秋	
	明治	31	1898	2	2	正午	木全宗儀	近衛閑白信尹懐紙	いつしかと	春	
	明治	32	1899	1	11	不明	懐玄斎伊藤宗幽	定家卿初春の歌	不明	春	
	明治	32	1899	1	12	不明	懐玄斎伊藤宗幽	定家卿初春の歌	不明	春	
	明治	32	1899	2	9	正午	大久保北隠	近衛龍山公懐紙四首	かぜさえて	春	
	明治	32	1899	5	8	不明	三田葆光	不二居士戯墨	うたもしも	狂歌	
	明治	32	1899	5	26	不明	三田葆光	不二居士戯墨	うたもしも	狂歌	
	明治	32	1899	11	19	正午	伊藤玄遠	俊頼朝臣筆・歌切（歌不明）	不明		
	明治	33	1900	6	20	不明	岩見瓊園	飯尾常房自詠短冊・五月雨	不明	夏	
	明治	33	1900	6	21	不明	岩見瓊園	飯尾常房自詠短冊・五月雨	不明	夏	
	明治	33	1900	6	22	不明	岩見瓊園	飯尾常房自詠短冊・五月雨	不明	夏	
	明治	33	1900	8	16	午前	東久世古帆・六畳敷	近衛基熙卿七夕懐紙	不明		
	明治	33	1900	8	17	七時	東久世古帆・六畳敷	近衛基熙卿七夕懐紙	不明		
	明治	33	1900	11	25	不明	松浦明榮・雲錦亭巢鴨別荘	兼好法師・初冬の歌切	不明	冬	
	明治	33	1900	12	26	正午	大久保北隠・二畳台目中板入	歳暮の文半切	せはしさに	冬	
	明治	34	1901	4	10	正午	青地湛海	二条為世卿・花月雪六首詠草	不明		
	明治	34	1901	4	11	正午	青地湛海	二条為世卿・花月雪六首詠草	不明		
	明治	34	1901	4	12	正午	青地湛海	二条為世卿・花月雪六首詠草	不明		

明治	34	1901	4	27	正午	東久世古帆・古帆軒三畳	近衛家熙卿歌短冊・藤掛松	不明	夏	
明治	34	1901	4	28	正午	東久世古帆・古帆軒三畳	近衛家熙卿歌短冊・藤掛松	不明	夏	
明治	34	1901	4	29	正午	東久世古帆・古帆軒三畳	近衛家熙卿歌短冊・藤掛松	不明	夏	
明治	34	1901	6	3	正午	東素雲	為相卿和歌・為村卿筆	不明		
明治	34	1901	6	4	正午	東素雲	為相卿和歌・為村卿筆	不明		
明治	34	1901	6	5	正午	東素雲	為相卿和歌・為村卿筆	不明		
明治	34	1901	6	9	正午	千宗室	浄弁溪五月雨の歌	たにがはの	夏	
明治	34	1901	6	10	正午	渡辺清	定家卿筆小倉色紙	みせばやな	恋	◎
明治	34	1901	7	7	朝七時	松浦明楽・無洞物	後座・慈鎮和尚色紙	ささのほに	秋	
明治	34	1901	7	8	朝	松浦明楽・無洞物	後座・慈鎮和尚色紙	ささのほに	秋	
明治	34	1901	7	8	夕	松浦明楽・無洞物	後座・慈鎮和尚色紙	ささのほに	秋	
明治	34	1901	9	11	正午	金澤蒼夫・三畳台目	細川幽斎自詠短冊	むしのねを	秋	
明治	34	1901	9	13	正午	金澤蒼夫・三畳台目	細川幽斎自詠短冊	むしのねを	秋	
明治	34	1901	10	7	正午	岡崎淵沖・三畳小座敷	慈鎮和尚歌切	不明		
明治	34	1901	10	8	正午	岡崎淵沖・三畳小座敷	慈鎮和尚歌切	不明		
明治	34	1901	10	9	正午	岡崎淵沖・三畳小座敷	慈鎮和尚歌切	不明		
明治	34	1901	10	10	正午	岡崎淵沖・三畳小座敷	慈鎮和尚歌切	不明		
明治	35	1902	2	23	不明	松浦詮・心月庵三畳台目	徳祐書四季歌横物	としのうちに	四季	
明治	35	1902	7	4	正午	三井松籟・七畳半敷	定家卿色紙古歌	あきもきぬ	秋	
明治	35	1902	7	9	五時	三井松籟・七畳半敷	定家卿色紙古歌	あきもきぬ	秋	
明治	36	1903	3	不明	不明	松田宗貞・星が丘茶寮にて	懐紙・詠庭上松	わかみどり	雑	
明治	36	1903	12	7	正午	松浦詮・三畳台目・心月庵	定家卿歌詠草	不明		
明治	38	1905	12	5	午後五時	馬越恭平・四畳半・根岸別荘	定家卿筆和歌二首	不明		
明治	39	1906	4	19	正午	石塚宗通	深草元政上人短冊	よものうみ	賀	
明治	41	1908	2	25	午後五時	三井元之助・伊皿子邸	利休歌入文	うきよぞと		
明治	41	1908	10	13	名残	瓜生震	西行法師歌切	不明		
明治	42	1909	4	3	正午	安田善次郎・又隠	一休和尚筆大色紙・春日野の歌	不明		
明治	42	1909	10	12	午後五時	竹内寒翠・四畳半入床寒翠庵	兼好法師自詠短冊	あきくさの	雑	
明治	43	1910	2	14	不明	高橋箒庵・後の寸松庵にて	寂蓮法師春の歌色紙	はるかぜに	春	
明治	43	1910	4	7	不明	井上世外・八窓庵	定家卿三題詠	不明		
明治	43	1910	11	1	正午	今井重幸・自楽庵二畳台目	頓阿法師歌懐紙	よのうくは		
明治	43	1910	12	20	午後五時	三井華精	小野道風筆継色紙	わたつみの	雑	
明治	44	1911	11	23	不明	益田孝・太郎庵	歌仙切猿丸大夫像	不明		
明治	45	1912	1	30	正午	馬越恭平	遠州小色紙	よのひとの	春	
明治	45	1912	2	5	正午	益田鈍翁・幽月亭にて	東久世伯古帆歌懐紙	にひむろに	雑	

茶会記	元号	年	西曆	月	日	刻限	主催者(場所)	掛物	初句	部立	恋歌
古今茶湯集	明治	45	1912	3	9	正午	益田鈍翁・太郎庵三畳台目	道風筆継色紙	うめがかの	冬	
	明治	45	1912	3	13	不明	青地幾次郎・静和庵三畳台目	定家卿詠草	さくらばな	春	
	明治	45	1912	4	13	正午	青地幾次郎・橋端静和庵	定家卿詠春懐紙	さくらばな	春	
	明治	45	1912	5	15	正午	吉田松翁・又隠四畳半	遠州消息文歌入	ひのひかり	賀	
	明治	45	1912	7	7	正午	水谷万甫・四畳半	烏丸光広卿小色紙	不明	秋	
	明治	45	1912	11	8	午前十時	高谷宗範・八畳敷	詹仲和筆・盧同茶歌	不明		
	大正	1	1912	11	21	午後五時	吉田楓軒・日暮里の草庵	俊成卿筆古今集切	ちらねども	秋	
	大正	1	1912	12	29	正午	益田鈍翁・為楽庵四畳中板入	宗甫新宅歳暮の消息文	すぐならむ	冬	
	大正	2	1913	11	21	正午	嘉納治郎右衛門・?亭茶事二畳半台目	寸松庵色紙	みやまより	秋	
	大正	2	1913	12	22	正午	三井松籟	懐紙俊成卿詠	不明		
	大正	3	1914	6	1	正午	吉田楓軒・長四畳台目	烏丸光広から沢庵への手簡	わがみには		
	大正	3	1914	8	4	正午	野崎幻庵・函嶺別荘	烏丸光広卿短冊	ぬれぬれし	夏	
	大正	3	1914	11	23	正午	三原重業・品川長者町新築三轉庵	小野於通筆	はなすすき		
	大正	3	1914	12	25	正午	山澄宗澄・根岸隣鐘庵・二畳台目中板	一休和尚筆歌三首	こころとや		
平井家茶会記	明治	3	1870	3	13	午前9時	平井次郎右衛門・当庵	不味公歌入り文	不明		
	明治	12	1879	5	8	正午	平井次郎右衛門・当庵	二条為家卿・姫路切歌物	不明		
	明治	12	1879	5	27	正午	平井次郎右衛門・当庵	武蔵・宗丸詠草二首	ほととぎす	夏	
	明治	12	1879	11	30	正午	平井次郎右衛門・当庵	深草元政上人短冊	かみなづき	冬	
	明治	13	1880	4	22	午後二時	平井次郎右衛門・当庵か	達磨画・碌々齋賛	いやいやと	狂歌	
	明治	13	1880	11	18	正午	平井次郎右衛門・当庵か	烏丸光広卿紅葉歌入り文	不明	秋	
	明治	13	1880	12	2	正午	平井次郎右衛門・当庵か	元伯詠草	不明		
	明治	13	1880	12	22	正午	平井次郎右衛門・当庵か	元伯宗且堅文・雪の歌三首	不明	冬	
	明治	14	1881	5	18	正午	平井次郎右衛門・当庵か	季吟短冊	不明	夏	
	明治	14	1881	6	13	正午	平井次郎右衛門・当庵か	如心齋竹の賛	不明	夏	
	明治	16	1883	1	1	不明	平井次郎右衛門	宗甫公・春発句三首	不明	春	
	明治	16	1883	2	4	不明	平井次郎右衛門	甫公横物歌	不明		
	明治	16	1883	8	10	不明	平井次郎右衛門	長闇堂歌入り文	不明		
	明治	16	1883	10	3	午後三時	平井次郎右衛門	長闇堂歌入り文	不明		
	明治	17	1884	3	15	午後二時	平井次郎右衛門	烏丸光広春三首懐紙	不明	春	
	明治	17	1884	9	10	不明	平井次郎右衛門	長闇堂虫の歌入文	不明	秋	
	明治	18	1885	2	23	午後三時	平井次郎右衛門	烏丸光広春三首懐紙	不明	春	
	明治	18	1885	3	16	午後三時	平井次郎右衛門	烏丸光広春三首懐紙	不明	春	
	明治	18	1885	5	11	正午	平井次郎右衛門	中院通義卿短冊	不明	夏	
	明治	18	1885	5	15	午後二時	平井次郎右衛門	中院通義卿短冊	不明	夏	

	明治	18	1885	7	29	午前十時	平井次郎右衛門	冷泉為理卿短冊	ひのものと		
	明治	18	1885	9	28	午後五時	平井次郎右衛門	紹鷗利休茶の悟道の歌	不明		
	明治	18	1885	10	10	不明	平井次郎右衛門	長閑堂・秋歌入り文	不明	秋	
	明治	18	1885	10	13	正午	平井次郎右衛門	宗友候・中の字・歌入り	不明		
安田松翁茶会記	明治	13	1880	2	20	不明	星野清左衛門	貫之筆色紙	はなみれば	春	
	明治	13	1880	3	7	午前八時	小野善右衛門・大代地・二畳	寛文十三年富士の狂歌	くもとなり	春	
	明治	13	1880	11	3	不明	安田善次郎・三畳	沢庵色紙松島の歌	不明		
	明治	13	1880	11	8	午後三時	條野傳平・淡路町	色紙	きみしのぶ	秋	
	明治	14	1881	3	10	午後四時	武井守正・三組町	墨画歌讃岐少将・横物	不明		
	明治	14	1881	4	10	午後四時	渡辺驥・今戸	定家卿色紙和歌	不明	夏	
	明治	14	1881	5	25	正午	千葉勝五郎	深草元政上人の色紙	むらさめの	夏	
	明治	14	1881	6	26	正午	仙波・白金台町	光広卿沢庵和尚歌横物色紙	わがみには		
	明治	14	1881	7	20	午後四時	脇坂安斐	持資短冊夏浦月の歌(歌不明)	不明	夏	
	明治	14	1881	11	6	午前十一時	益田鈍翁・品川	軸横物	ふるあめも		
	明治	14	1881	11	23	正午	寺島秋介・小日向台町	慈鎮歌切色紙形	まばらなる	冬	
	明治	14	1881	12	18	正午	菅沼董雄・田島町	沢庵短冊	こころなく	冬	
	明治	15	1882	4	16	午後三時	長田良三・龍閑町	細川三斎短冊	やまかぜの	春	
	明治	16	1883	10	28	午前十一時半	星野清左衛門	後土御門院歌切横幅	不明		
	明治	16	1883	11	23	正午	米林俵作・本郷二丁目	宗旦懐紙横物	うきよをば		
	明治	17	1884	12	5	午後五時	馬越恭平・四畳半内床	团扇墨画竹・松花堂筆賛宗甫	すぐならむ		
	明治	18	1885	1	10	正午	星野清左衛門	宗甫小色紙	なむやくし		
	明治	18	1885	3	27	正午	星野清左衛門	利休辞世の語横物	つつみくる		
	明治	18	1885	12	16	午後三時	大代地小野善右衛門	松永貞徳和歌懐紙	不明		
	明治	19	1886	1	30	正午	馬越恭平	沢庵小立幅	きくやいかに		
	明治	19	1886	3	20	正午	米林俵作・本郷二丁目	信尹公の懐紙横物	たつなみも	春	
	明治	19	1886	5	17	正午	安田善次郎・又隠	沢庵色紙松島の歌	不明		
	明治	19	1886	5	30	正午	東久世公	定家卿五百切	不明	夏	
	明治	19	1886	6	3	正午	柏木彦兵衛・三畳向切	木下長嘯子	おともなく	夏	
	明治	23	1890	11	27	正午	久松忍叟翁・飯倉片町久松家四畳半	為村卿歌切	不明	冬	
	明治	24	1891	4	15	午後三時	馬越恭平・築地入身町馬越控邸四畳半	松花堂短冊	とめいれば	春	
	明治	24	1891	5	14	午後四時	益田克徳・根岸金杉村三畳台目	平等院切	あしひきの	夏	
	明治	27	1894	1	21	午前十一時	松浦心月庵・四畳半内床	後陽成天皇宸筆懐紙	不明	賀	
	明治	27	1894	4	20	午後四時	馬越恭平・桜川町二畳台目	松花堂墨画の竹团扇形宗甫賛	すぐならむ		
	明治	29	1896	5	4	正午	久松忍叟翁・飯倉片町久松家四畳半	素性法師桜の歌小色紙	不明	春	
	明治	29	1896	12	24	午後四時	松浦心月庵・三畳中板	宗甫筆歳暮の文	不明	冬	

茶会記	元号	年	西暦	月	日	刻限	主催者(場所)	掛物	初句	部立	恋歌
安田松翁茶会記	明治	32	1899	3	17	正午	松浦心月庵・心月庵・六畳内床	定家卿歌切	あさひさす	冬	
	明治	33	1900	3	22	正午	三田葆光	沢庵・路の記・曙切	不明		
	明治	33	1900	6	20	正午	岩見鑑造・芝新銭屋町別荘観泉庵	飯尾常房短冊	いまはただ	夏	
	明治	33	1900	9	9	午前十一時	伊東子爵・高輪庭園四方屋	短冊	むしのねも	秋	
	明治	33	1900	11	25	正午	松浦心月庵・巢鴨宮下町別荘	兼好法師歌切	不明	秋	
	明治	33	1900	11	29	正午	南郷茂光・麻布今井町広間八畳	歌不明	不明		
	明治	33	1900	12	22	正午	金沢三右衛門・西大久保三畳台目	季吟短冊和歌	不明	冬	
	明治	34	1901	3	12	午後四時	浅田正文・三畳台目向切	短冊	ゆききへぬ	春	
	明治	34	1901	4	11	正午	青地幾次郎・今戸	二条為世卿筆雪月花和歌	不明		
	明治	34	1901	7	8	午前七時	松浦伯・二畳中板	小色紙七夕の歌・慈鎮和尚	不明	秋	
	明治	34	1901	9	28	午後五時	松浦伯・横上八畳	家隆歌切大横物	不明	秋	
	明治	34	1901	10	9	正午	岡崎谷神・三畳	慈鎮和尚歌切横物	不明		
	明治	35	1902	1	10	正午	三井家・三畳台目	信尹公懐紙若葉の歌	不明	春	
	明治	35	1902	3	1	午後四時	馬越恭平	家隆公懐紙	さととほく	春	
	明治	35	1902	3	6	正午	金沢三右衛門	定家卿詠草三首和歌	不明		
	明治	35	1902	3	25	午後五時	松浦伯・心月庵三畳台目	鎮信公詠草四季の四首横物	不明	四季	
	明治	35	1902	6	6	正午	三井高保・小柴庵二畳台目長板	浄弁詠草三首和歌	不明	夏・恋	◎
	明治	35	1902	6	21	正午	岩見鑑造	兼好法師詠草越前切	不明		
	明治	35	1902	9	21	不明	安田善次郎・観松庵四畳半	後水尾院御短冊	不明	秋	
	明治	35	1902	10	3	正午	益田克徳・無為庵二畳台目	沢庵画賛・薦の細道和歌	不明		
	明治	35	1902	10	23	正午	久松忍叟・長四畳玄室	西行歌切	不明		
	明治	35	1902	11	14	午後四時	益田克徳	道風本阿弥切横物	不明		
	明治	35	1902	11	29	正午	加藤正義・三畳台目	定家卿色紙	やへむぐら	秋	
	明治	35	1902	12	22	正午	岩見鑑造・観泉庵二畳台目	宗甫懐紙和歌	不明	冬	
	明治	36	1903	1	16	正午	浅田正文・三畳台目	兼好短冊	不明	春	
	明治	36	1903	3	4	正午	石黒況翁・四畳半	慶恩歌切雁金切	不明		
	明治	36	1903	3	8	正午	東久世伯・古帆庵三畳	後京極良経公歌切	不明		
	明治	36	1903	4	4	正午	東子爵	幽齋の短冊	きのもとの	春	
	明治	36	1903	9	27	正午	岩見鑑造	宗祇色紙萩の歌	不明	秋	
	明治	36	1903	9	29	午後五時	松浦伯	西行法師歌切	不明		
	明治	36	1903	10	15	午後五時	馬越恭平・二畳台目	光広卿・玄旨法師の懐紙附合	つまきこる	秋	
	明治	36	1903	10	20	正午	金沢三右衛門	一休色紙	しもふかく	秋	
	明治	36	1903	12	1	午後四時	加藤正義・三畳	西行詠草	ふみわけし	秋	
	明治	37	1904	1	14	正午	吉田丹左衛門・長四畳	慈鎮和尚懐紙	不明		

明治	37	1904	1	19	正午	伊藤・庶莫庵	定家卿和歌	不明		
明治	37	1904	4	8	午後五時	近藤廉平・其日庵	俊成卿千載集切	不明		
明治	37	1904	6	11	正午	石黒況翁	後西院卿歌懐紙	不明		
明治	37	1904	10	21	正午	三井高保・小柴庵中板三畳台目	家隆卿詠草	不明		
明治	37	1904	10	29	正午	吉田丹左衛門	三条実任卿短冊	不明	秋	
明治	37	1904	11	20	正午	三井家	松花堂自画賛兼好像	すめばよに		
明治	38	1905	1	11	正午	青地幾次郎	大倉色紙	われみても	雑	
明治	38	1905	2	5	正午	松浦伯	石州色紙	せきのとも	春	
明治	38	1905	2	16	正午	高橋義雄・寸松庵	秀吉連歌入文	不明		
明治	38	1905	5	28	不明	益田鈍翁・品川益田邸幽月亭	道風歌切	不明		
明治	38	1905	6	21	午後四時	吉田丹左衛門・根吉	元政色紙	むらさめの	夏	
明治	38	1905	9	15	午後五時	松浦伯・楼上広間	家隆卿詠草	不明		
明治	38	1905	11	24	正午	三井高保	西行白川切	不明		
明治	38	1905	12	7	午後四時	馬越恭平	定家卿歌切	不明	冬	
明治	38	1905	12	21	正午	三井	紹鷗歳暮歌入消息	不明	冬	
明治	39	1906	4	11	正午	久松	良経公歌切三首	不明		
明治	39	1906	5	23	正午	益田鈍翁・品川幽月亭	道風継色紙	あまつかぜ	雑	
明治	39	1906	11	25	正午	大住・二畳台目	貫之歌切かりがね二首	不明	秋	
明治	39	1906	12	6	正午	東久世伯	定家卿古今切	不明		
明治	41	1908	5	7	正午	青地幾次郎	兼良卿懐紙詠花和歌	不明	春	
明治	41	1908	5	18	正午	吉田丹左衛門・根岸	道風継色紙	なつのよは	夏	
明治	41	1908	7	7	正午	石黒	歌初夏の三首	不明	夏	
明治	41	1908	7	15	正午	益田鈍翁・品川幽月亭	俊成卿詠草	不明	夏	
明治	41	1908	11	11	正午	吉田	定家卿詠草	あきよとて	秋	
明治	41	1908	12	5	正午	益田鈍翁・品川太郎庵	定家色紙	たかさごの	春	
明治	42	1909	4	24	正午	瓜生震・宝樹庵	俊成卿歌切山桜の歌	不明	春	
明治	42	1909	11	8	正午	久松	定家卿懐紙二首	こゑたたぬ	秋・冬	
明治	43	1910	4	11	正午	井上・八窓庵	定家卿三首懐紙	不明		
明治	43	1910	6	3	正午	松浦伯	道風継色紙	不明	夏	
明治	43	1910	10	21	正午	東久世伯	長嘯子懐紙	あきといはば	秋	
明治	43	1910	11	14	正午	三井高保	道風継色紙	わたつみの	雑	
明治	44	1911	4	3	午後五時	桜舎・八畳広間	紹巴詠草	不明		
明治	44	1911	5	17	正午	吉田	妙子小色紙	むらさめの	夏	
明治	44	1911	11	14	正午	松浦伯・心月庵	定家三首切	不明		
明治	44	1911	12	12	正午	瓜生	定家五首切	不明		

茶会記	元号	年	西暦	月	日	刻限	主催者(場所)	掛物	初句	部立	恋歌
安田松翁茶会記	明治	45	1912	6	12	正午	瓜生・宝樹庵三畳台目	慈鎮詠草三百横物	不明	夏	
	明治	45	1912	10	26	正午	益田鈍翁・品川幽月亭	松花堂二首詠草	不明		
	明治	45	1912	11	18	正午	吉田	俊頼古今集切	不明	秋	
	大正	2	1913	11	14	正午	松浦伯・心月庵	定家三首切	不明		
	大正	2	1913	12	2	正午	三井守之助・三畳台目	定家卿大井川色紙	不明	賀	
	大正	3	1914	4	3	正午	瓜生	行成卿歌切・賀の部巻頭	不明	賀	
	大正	3	1914	11	11	正午	石黒	慶雲祝賀の歌切	不明	賀	
	大正	4	1915	10	27	正午	益田鈍翁・御殿山益田邸太郎庵	家康公色紙入日の画	いりひさす		
	大正	5	1916	4	17	正午	益田鈍翁・幽月亭三畳台目	西行小色紙	不明	春	
大正	5	1916	5	26	正午	三井高保	定家卿五首切	不明			
大正	10	1921	5	9	正午	石黒	遠州小色紙	まるかれと			
野村得庵茶会記	大正	9	1920	1	不明	不明	湯浅七左衛門・三木邸	景樹懷紙	としたりて	賀	
	大正	9	1920	2	9	午後四時	野村得庵	元政上人懷紙	いつかたに	春	
	大正	9	1920	2	10	午前十時	市川齋五郎	保全・宝船・大綱の贊	つのえても		
	大正	9	1920	2	16	不明	松尾・北野名月舎	烏丸光広卿懷紙	かみよより	春	
	大正	9	1920	2	19	午後三時	太田芦庵・四畳半	基佐短冊	わけゆけば	春	
	大正	9	1920	2	17	不明	梅亭・白雲居・乾梅亭	尊朝親王詠草	不明		
	大正	9	1920	3	4	午前十時半	住友男爵・茶白山本邸	三条実隆短冊	たちかへり	春	
	大正	9	1920	4	15	不明	松尾氏大津家	烏丸光広短冊	不明		
	大正	9	1920	5	29	不明	坂本作治郎	烏丸光広卿	不明	夏	
	大正	9	1920	9	29	夜	塚本氏・白露席	元政上人短冊	うらやまし	秋	
	大正	9	1920	10	28	正午	林氏・古門前新席	烏丸光広卿短冊	不明	賀	
	大正	9	1920	11	13	不明	湯浅七左衛門・松尾喜七・伏見稻荷	秋日竹詠懷紙(歌不明)	不明		
	大正	9	1920	11	16	不明	谷子新席	頓阿法師・和歌四天王・三首懷紙	不明	秋・賀	
	大正	9	1920	12	26	不明	塚本氏・清流亭	不昧公梅歌一首	いろうつむ	冬	
	大正	10	1921	1	22	午前十時半	白鶴本宅	慈鎮和尚詠草	けふそのゑに	冬	
	大正	10	1921	2	6	不明	太田芦庵	景樹御題に因める懷紙	不明		
	大正	10	1921	3	7・8	不明	野村得庵・八方	景樹懷紙	かへるには	春	
	大正	10	1921	3	9	不明	奥谷秋石氏	烏丸光広卿文	ふらばふれ		
	大正	10	1921	4	9	不明	松風嘉貞	後醍醐天皇書・吉野五十首中恋歌	あひみての	恋	◎
	大正	10	1921	4	22	不明	沢野定七	和泉守政恒	ちりもせし	賀	
	大正	10	1921	5	8	不明	靈鷲山荘	沢庵贊・松花堂布袋	みもはてぬ		
	大正	10	1921	5	6	不明	尚庵選翠庵	春挙時計自画贊	めどけいの	狂歌	
	大正	10	1921	5	21	不明	永阪町三井氏・四畳半	西行法師・白河切	ありとのみ	夏	

	大正	10	1921	6	9	不明	石川氏妙法寺催	郭公待心を	ほととぎす	夏	
	大正	10	1921	6	23	不明	北岡白雲居	烏丸光広・夏月短冊	をしひらく	夏	
	大正	12	1923	12	2	不明	野村得庵・南禅寺碧雲荘又織庵	丹波少将成経朝臣遠島三首懐紙	不明		
	大正	13	1924	11	12・13	不明	野村得庵・光悦寺騎牛庵	小野道風筆三首・飛雲切	いにしへの		
	大正	13	1924	11	12・13	不明	福田元永・光悦寺本阿弥庵	熊野懐紙	かねのおとも		
	昭和	3	1928	11	21	不明	綱島鮎卯楼	西園寺公郷二条行幸懐紙	けふよりも	賀	
	昭和	4	1929	春~夏		不明	野村得庵・南禅寺碧雲荘又織庵	源家長・和漢朗詠切	わがきみは	賀	
	昭和	7	1932	10	11	不明	大阪津村別院・第五席	参議佐理卿筋切	よのなかは	雑	
	昭和	9	1934	1	6	不明	野村得庵・藪内稽古場	後水尾帝宸翰	ためしなや	賀	
	昭和	13	1938	11	11~	不明	野村得庵・南禅寺碧雲荘	貫之寸松庵色紙	あきかぜの	秋	
	昭和	14	1939	11	14~	不明	野村得庵・南禅寺碧雲荘	法華経断簡及和歌散書	やまざとは	秋	
	昭和	15	1940	10	1~7	不明	長生会・恩賜京都博物館	行成枿色紙・定家所持	おもひけん	俳諧	
	昭和	16	1941	4	1	不明	野村得庵・熱海伊豆塵外荘	名物柳営名物・定家住吉文	すみよしの	賀	
	昭和	24	1949	4	16	不明	篠園会など主催・南禅寺碧雲荘又織庵	道風筆継色紙	やまざくら	恋	◎
高橋箒庵茶会記	明治	45	1912	1	30	正午	馬越化生・桜川茶寮	遠州蔵帳物小色紙	よのひとの	春	
	明治	45	1912	2	5	正午	益田鈍翁・御殿山自邸・幽月亭	故東久世伯一首懐紙	にひむろに		
	明治	45	1912	3	9	正午	益田鈍翁・御殿山太郎庵	小野道風継色紙・前田子爵家伝来	うめがかの	春	
	明治	45	1912	5	13	正午	青地幾次郎(湛海)・橋端静和庵	定家三首詠・春・春日山・老悦	さくらばな	春	
	明治	45	1912	5	27	夕	益田鈍翁・別邸明石庵	俊成卿住吉切	はるはすぎ	夏	
	明治	45	1912	11	24	夕	三井守之助・三井邸内親席・三畳台目	定家卿色紙	かめやまの	賀	
	大正	2	1913	12	12	正午	三井松籟翁・三井家自邸	釈阿懐紙	みなかみに	賀	
	大正	2	1913	12	29	正午	益田鈍翁・品川御殿山自邸・為楽庵	遠州消息文歳暮歌入	すぐならむ	冬	
	大正	2	1913	12	30	午後六時	三井松籟翁・三井家自邸	歌切・資隆五首・行頼五首	はるのこむ	冬	
	大正	3	1914	2	7	正午	益田鈍翁・品川御殿山自邸・為楽庵	懐紙	まつはなほ	春・賀	
	大正	3	1914	2	13	正午	三井松籟翁・三井家自邸	一休筆色紙	あしはらは	神祇	
	大正	3	1914	4	3	正午	瓜生百里・宝樹庵	俊頼卿・拾遺集歌切	よろづよと	賀	
	大正	3	1914	4	5	正午	森下岩楠・坂中庵・三畳台目	遠州筆	もろこしの	俳諧	
	大正	3	1914	4	21	午後五時頃	益田鈍翁・為楽庵	松花堂筆墨竹	すめばまた	雑	
	大正	3	1914	6	1	正午	吉田楓軒・長三畳台目	光広卿と沢庵の詠草	わがみには	夏	
	大正	3	1914	6	7	不明	森茂生・日本橋俱樂部二階広間・抹茶席	白河楽翁公	おもひいる	雑	
	大正	3	1914	8	4	正午	野崎幻庵・函嶺	光広卿筆短冊	ぬれぬれし	夏	
	大正	3	1914	8	30	夜	益田鈍翁・掃雲台	大綱和尚筆豎幅の賛	すずしきは	夏	
	大正	3	1914	12	2	不明	山澄宗澄・根岸隣鐘庵・六畳	一休和尚真蹟	こころとや		
	大正	3	1914	12	6	正午	益田紅艶・目黒靈水庵	山県有朋	きどめやま	春	
	大正	3	1914	12	24	午後四時	瀬川昌耆(金癖道人)・駿河台西紅梅町	里村紹巴・三井寺山下七十三歳	ながらへて	冬	

茶会記	元号	年	西暦	月	日	刻限	主催者(場所)	掛物	初句	部立	恋歌
高橋箒庵茶会記	大正	4	1915	2	16	不明	高橋義雄・白紙庵	後水尾院宸翰	ことしより	春	
	大正	4	1915	3	7	正午	七代目八百善主人・山谷・六窓庵の写	兼好の歌切	ゆふしほの	賀	
	大正	4	1915	5	15	正午	益田鈍翁・太郎庵	俊頼卿朗詠切	わがやどの	夏	
	大正	4	1915	5	30	正午	小柴庵主三井高保・上二番町邸小柴庵	大黒庵武野紹鷗狂歌入文	なにしおふ	狂歌	
	大正	4	1915	10	5	正午	三井守之助・鳥居坂三井邸	慈鎮和尚筆新古今切	むさしのや	秋	
	大正	4	1915	10	17	正午	益田鈍翁・品川太郎庵	家康公筆入日画賛	いりひさす	秋	
	大正	4	1915	12	24~26	不明	高橋義雄・四谷区伝馬町白紙庵	深草元政上人色紙	おもひぐさ	恋	◎
	大正	5	1916	1	10	正午	益田鈍翁・小田原別業内閑雲亭	遠州新年御夢想の文	ゆたかなる	春	
	大正	5	1916	4	3	不明	有賀翁・箱根岫雲荘・長四畳	石川丈山筆	わたらじな		
	大正	5	1916	4	5	正午	藤田平太郎・綱島藤田邸・芦庵・二畳台目	後京極良経筆	われみても		
	大正	5	1916	4	16	正午	益田鈍翁・品川本邸幽月亭	西行筆小色紙	あふさかの	春	
	大正	5	1916	4	28	午後五時	瀬川博士・駿河台西紅梅町茶室・三畳台目	定家卿歌切	つるかめも	賀	
	大正	5	1916	5	10	正午	吉田楓軒・根岸茶寮・三畳台目	紀貫之高野切	あはれてふ	夏	
	大正	5	1916	5	27	夕	小柴庵主三井高保・上二番町邸小柴庵	定家卿歌切	いのりおく	賀	
	大正	5	1916	8	18	正午	益田鈍翁・箱根強羅山庵	遠州筆安閑の二字の傍らに	わくらばに	雑	
	大正	5	1916	11	22	不明	服部集翠(七兵衛)・光悦寺大虚庵	西行法師白河切	あきよに	秋	
	大正	6	1917	2	21	不明	堺南宗寺・実相庵	松花堂筆富士山	ひさかたの	春	
	大正	6	1917	5	2・4	不明	三井松籟男・日本美術協会園内竹隣庵	寸松庵色紙・紀貫之	つきかげも	秋	
	大正	6	1917	5	23	正午	益田鈍翁・御殿山太郎庵	狩野探泉筆宝船	たることを	賀	
	大正	6	1917	6	7	夕	伊丹元七(二世)・内幸町自邸	光広卿筆十牛自賛横物	をぼつかな		
	大正	7	1918	10	8	夜	高橋義雄・赤坂一木伽藍洞	一休和尚自賛自画	かねたたき	狂歌	
	大正	7	1918	11	13	正午	森川勘一郎・菊安賀森川邸如春庵・二畳	寸松庵色紙	しらつゆの	秋	
	大正	7	1918	11	22・23	不明	三井松籟男・鷹峰光悦寺大虚庵	紀貫之寸松庵色紙	やまざとは	秋	
	大正	7	1918	11	27	不明	根津嘉一郎・青山荘無事庵・横長三畳台目	西本願寺伝来西行法師落葉切	せきでらや	秋	
	大正	8	1919	1	18	正午	越沢大助(竹窓庵宗見)・嬉森庵	後京極良経筆歌切	あかだまの		
	大正	8	1919	2	16	正午	栗山善四郎	光悦筆懐紙	ゆきふれば	冬	
	大正	8	1919	4	30	正午	越沢宗見・越沢邸新席二畳台目	宗祇法師大倉色紙	あまびとの	春	
	大正	8	1919	10	31	正午	益田鈍翁・御殿山幽月亭	大石良雄歌入消息	もののふの	秋	
	大正	8	1919	11	8	正午	野崎幻庵・葉雨庵・三畳台目中板	後京極良経筆草切	このはふく		
	大正	9	1920	2	27	不明	高橋義雄・一木庵	三十六歌仙切・凡河内躬恒	いづくとも	春	
	大正	9	1920	3	24	午後五時	益田鈍翁・品川御殿山太郎庵	三十六歌仙歌切・斎宮女御	ことのねに	雑	
	大正	9	1920	3	27	午前十一時	森川勘一郎・菊安賀森川邸如春庵・二畳	細川三斎歌入文	としごとに	春	
大正	9	1920	4	18	不明	益田紅艶・応挙館奥八畳の間	三十六歌仙歌切・坂上是則	みよしのの	冬		
大正	9	1920	4	18	不明	伊丹信太郎・為楽席	信実筆上疊歌仙切・紀友則	ゆふされば	冬		

大正	9	1920	4	18	不明	野崎幻庵・幽月亭	信実三十六歌仙切・素性法師	いまこむと	恋	◎
大正	9	1920	5	25	正午	栗山善四郎・大井町新席・二畳向切	松花堂筆俊成卿像	こまとめて	春	
大正	9	1920	6	1	正午	梅沢鶴叟・大森三界新席	行成卿筆拾遺抄賀部歌切	よろづよの	賀	
大正	9	1920	6	13	正午	益田鈍翁・御殿山幽月亭	金扇面・小堀遠州筆	おそろしや		
大正	9	1920	7	1	午後五時半	福井菊三郎・赤坂青山新邸観庵・三畳台目	俊頼卿筆大色紙	いにしへの		
大正	9	1920	9	13	不明	益田鈍翁・箱根唯識庵	細川三斎沢庵宛文	るすをつかひ		
大正	9	1920	11	10	正午	林新助・京都古門前築庵	烏丸光広卿短冊	あをぐなり	神祇	
大正	9	1920	11	11	不明	藤田伝三郎・光悦寺騎牛庵	俊頼筆色紙	いまこむと	恋	◎
大正	9	1920	11	11	不明	林新助・光悦寺本阿弥庵	小野道風筆本阿弥切	なつなれば	恋	◎
大正	10	1921	2	28	正午	野崎幻庵・自怡荘内空心庵・長四畳	松花堂筆僧正遍昭歌入画	すゑのつゆ		
大正	10	1921	3	26	夕	藤原銀次郎・麻布新網邸眺雲庵	西行歌切	よのなかに	春	
大正	10	1921	4	12	不明	高橋義雄・新一木庵・三畳半	定家卿小倉色紙	たかさごの	春	
大正	10	1921	5	4	正午	八田円斎・向島嬉森庵・三畳台目	宗旦歌入文	ふるあめの		
大正	10	1921	5	30	正午	三井泰山・麻布永坂自邸	西行白河切	ありとのみ	夏	
大正	10	1921	10	25	正午	藤田江雪男・綱島藤田邸芦庵	北向道陳への利休の歌入文	すべらぎの		
大正	10	1921	11	9	正午	梅沢鶴叟・大森茶寮	沢庵から烏丸亜相宛の紅葉消息	あさごとに	秋	
大正	10	1921	11	23	不明	関戸守彦・光悦寺騎牛庵	熊野懐紙・右馬権助仲家	うすくこく	秋	
大正	10	1921	11	24	午前十時	住友春翠男・京都鹿ヶ谷別荘漱芳庵	定家卿二首懐紙	こぬひとを		
大正	11	1922	2	16	正午	川部太郎・根津邸青山荘無事庵	紀貫之高野切	かすみたつ	春	
大正	11	1922	3	19	正午	三井泰山・麻布永坂自邸	松花堂筆俊成卿像	いまはわれ	春	
大正	11	1922	3	20	正午	吉田五郎三郎・麻布仲之町梅露庵	後京極良経筆波紋色紙	つるのゐる	賀	
大正	11	1922	4	16	不明	戸田露朝(弥七)・幽月亭	師賢卿	むべしこそ		
大正	11	1922	4	22	正午	馬越恭平・芝桜川茶寮・二畳台目	宗祇・東野州常縁連歌	はなざかり	春	
大正	11	1922	5	7	不明	高橋義雄・赤坂伽藍洞一木庵	宗祇法師大倉色紙	あまびとの	春	
大正	11	1922	5	21	不明	越沢宗見・金沢常翠庵	松花堂筆西行画賛	としたけて	羈旅	
大正	11	1922	6	6	正午	梅沢鶴叟・大森茶寮・三畳台目	烏丸光広懐紙	いくとせを	夏	
大正	11	1922	6	8	正午	野崎幻庵・小田原別業空心庵	松花堂自像自画賛	ねざめして		
大正	11	1922	10	10	正午	三井泰山・永坂自邸	高橋箒庵詠筆扇面	むらさめの	夏	
大正	11	1922	10	28	午後五時	栗山善四郎・八百善自邸・二畳中板	西行法師白河切三首	あきよめに	秋	
大正	11	1922	11	11	午後四時	林新助(楽庵)・小倉山麓別荘静庵	徳川家康詠草・角倉家伝来	よのなかを	秋	
大正	11	1922	11	12	午後四時	土橋無声老・玄塚山荘	行成卿継色紙・和漢朗詠集	しらつゆも	秋	
大正	11	1922	11	13	不明	村山玄庵・大虚庵	為業(寂念)小色紙	もろともに	秋	
大正	11	1922	12	26	不明	根津嘉一郎・母屋付属茶室・三畳半	沢庵消息	いにしとし	冬	
大正	12	1923	4	7	午後五時	益田鈍翁・御殿山碧雲台太郎庵	沢庵誕生釈迦仏自画賛	ななそくに		
大正	12	1923	4	21・22	不明	戸田露朝(弥七)・三溪園楽只庵	豊太閤筆	おほへやま	雑	

茶会記	元号	年	西暦	月	日	刻限	主催者(場所)	掛物	初句	部立	恋歌
高橋箒庵茶会記	大正	12	1923	4	23	不明	高橋義雄・赤坂伽藍洞一木庵	伝紀貫之筆高野切	ひとめみし	春	
	大正	12	1923	5	18	午前十時頃	官休庵宗匠(九世)・泰勝寺閑雲軒	八幡名物一休和尚色紙	あしはらの		
	大正	12	1923	5	19	正午	野村徳七・南禅寺畔碧雲荘	一休和尚草庵飛燕の図	こころなき		
	大正	12	1923	5	21	正午	藤田徳次郎・大阪綱島東邸玄路庵	大色紙	やどりせし	夏	
	大正	12	1923	5	27	正午	馬越化生・目黒の茶席・又隠写四畳半	西行法師筆白地色紙	ほととぎす	夏	
	大正	12	1923	11	29	夕	根津青山・根津邸撫松庵	後京極良経一首懐紙	ふかからぬ	秋	
	大正	12	1923	12	28	正午	仰木魯堂・寸暇楽庵・二畳台目	沢庵和尚外三人同詠歌切	ふけにけり	冬	
	大正	13	1924	1	21	正午	藤原銀次郎・麻布新網町自邸暁雲庵	遠州より松花堂への若菜歌応酬消息	てをおりて	春	
	大正	13	1924	2	1	午後五時	根津青山・根津邸撫松庵	俊頼筆子の日歌切	おいらくの	春	
	大正	13	1924	2	11	夜	野崎久兵衛・菟道庵	西行小色紙	いはひつつ	賀	
	大正	13	1924	2	12	正午	森川勘一郎・苅賀賀森川邸大黒庵	俊成卿筆詞花集賀部五首	きみがよに	賀	
	大正	13	1924	2	18	正午	山内茂樹・祖父江町山内邸・四畳半	公任卿歌切	おほぞらに	賀	
	大正	13	1924	2	15	正午	富田重助・葵町富田邸猿庵	寸松庵色紙	しらゆきの	冬	
	大正	13	1924	4	12	正午	野村得庵・撰津住吉松欣庵	極彩色柿本人麿図	みぬかたの	春・旅	
	大正	13	1924	4	13	正午	平瀬三七雄(露秀)・平瀬邸木樨居	兼好法師詠	ちよまでも	賀	
	大正	13	1924	7	11	正午	団琢磨・千駄ヶ谷原宿松滴庵	小野道風継色紙	このよひの	恋	◎
	大正	13	1924	10	29	正午	高橋義雄・赤坂一ツ木伽藍洞一木庵	西行法師歌切三首	こがらしに	秋	
	大正	13	1924	11	12	午後五時	松風嘉貞・清水五条坂上自邸茶室	沢庵普化禅師自画賛	てをとりて		
	大正	13	1924	11	13	不明	馬越化生・騎牛庵	土方縫之助旧蔵定家卿初雪二首	こひわびて	冬	
	大正	13	1924	11	14	午前十時	村山玄庵・住吉村山邸茶寮	寸松庵色紙	こころあてに	秋	
	大正	13	1924	11	16	正午	高橋彦次郎・名古屋西区和泉町高橋邸	佐竹家伝来三十六歌仙切	ちとせまで		
	大正	13	1924	11	28	正午	藤原銀次郎・麻布新網町暁雲庵	西行法師筆白河切	あきのよに	秋	
	大正	13	1924	12	4	正午	益田鈍翁・御殿山太郎庵	熊野懐紙	いはたがは		
	大正	13	1924	12	23	夜	根津青山・青山自邸撫松庵	小堀遠州歳暮歌入文	おもひおく	冬	
	大正	14	1925	1	25	正午	三井守之助・永坂三井邸暁々庵	寂蓮法師筆熊野懐紙	いはたがは		
	大正	14	1925	3	15	正午	近藤滋弥・牛込佐内坂邸内其日庵	寸松庵色紙	さととほみ		
	大正	14	1925	5	19	正午	大谷尊由・西本願寺飛雲閣憶昔庵	豊公筆初桜懐紙	はなはただ	春	
	大正	14	1925	6	18	正午	団琢磨・千駄ヶ谷原宿松滴庵	源三位頼政平等院切	あしびきの	夏	
	大正	14	1925	7	16	午後六時	藤原銀次郎・麻布新網藤原邸暁雲庵	松花堂一休和尚睡臥の図・遠州賛	かこよりも		
	大正	14	1925	8	14	正午	益田鈍翁・苔寺(西芳寺)	御子左忠家仁和寺切・万葉仮名	はるざれば	秋	
大正	14	1925	8	15	正午	伊丹信太郎・軽井沢福井別業	尾形乾山筆兼好法師絵賛	すめばまた	雑		
大正	14	1925	11	12	不明	野村徳七・光悦寺騎牛庵	小野道風飛雲切	いにしへの	哀傷		
大正	14	1925	11	12	午後四時	林楽庵・嵯峨茶寮静庵・三畳中板	三冊物の一・沢庵の書判あり	はたとあたる			
大正	14	1925	12	26	正午	高橋義雄・赤坂一ツ木伽藍洞一木庵	行成卿伊予切	あらたまの	冬		

大正	15	1926	1	21	午後五時	馬越幸太郎・麻布市兵衛町自邸	小堀遠州筆鶏旦小色紙	よのひとの	春	
大正	15	1926	2	1	正午	益田鈍翁・太郎庵	寸松庵色紙	うめのかの	冬	
大正	15	1926	2	11	正午	岩原謙三・葺手町岩原邸三疊台目新席	小野道風継色紙	かはかみに	冬	
大正	15	1926	2	14	正午	宮北宗春・麻布広尾祥雲寺境内自久庵	世尊寺行尹卿朗詠切	われみても	春	
大正	15	1926	5	14	正午	粕谷徹三郎・西区塩町自邸耕雲庵	藤原定頼卿古今集歌切	なつひきの	恋	◎
大正	15	1926	5	18	不明	戸田露朝・洛南男山八幡閑雲亭	知家三首懐紙定家加筆	おそざくら	夏	
大正	15	1926	5	18	午後五時半	藤田耕雪・綱島東邸芦庵	俊頼卿赤地大色紙	やどりせし	夏	
大正	15	1926	5	24	正午	前山久吉・下二番町前山邸観空庵	藤原公任卿唐紙地朗詠切	わがやどの	夏	
大正	15	1926	6	7	午後五時半	根津青山・青山荘	寸松庵色紙	おもひづる	夏	
大正	15	1926	6	12	正午	近藤滋弥・其日庵	沢庵和尚筆田植歌色紙	きたみなみ		
大正	15	1926	6	22	午後五時半	仰木魯堂・千駄ヶ谷原宿町暇楽庵	定家卿十八番歌合判詞	そでのかを	夏	
大正	15	1926	6	25	正午	富田宗慶重助・名古屋自宅猿庵	行成卿和泉式部集切	わがそでは	夏	
大正	15	1926	6	26	正午	松久正博・岐阜県美濃町洗翠庵	道安宛宗旦狂歌入文	はすにくの	狂歌	
大正	15	1926	6	27	正午	藤原銀次郎・麻布新網町自邸眺雲庵	行成卿伊予切	さつきまつ	夏	
大正	15	1926	7	6	正午	西脇濟三郎・小石川関口台町自邸	小野道風筆継色紙	なつのよは	夏	
大正	15	1926	7	8	午後五時半	団琢磨・千駄ヶ谷原宿自邸松滴庵	源三位頼政平等院切	あしびきの	夏	
大正	15	1926	8	16	正午	益田多喜・軽井沢別荘内無塵庵	本阿弥光悦筆	ももしきや	雑	
大正	15	1926	9	21	夕	吉田五郎三郎・井の頭弁天祠畔別荘	烏丸光広懐紙	むさしあぶみ	秋	
大正	15	1926	10	10	正午	三井泰山・麻布永坂邸巍々庵	慈鎮和尚筆歌切	むさしのや	秋	
大正	15	1926	10	29	夕	益田鈍翁・塩原	定家筆三首和歌	なくしかよ		
大正	15	1926	11	7	午後五時	岩原椿庵・芝区葺手町岩原邸	伊予切・十六行の大切	不明		
大正	15	1926	11	17	午後五時	馬越幸次郎・麻布市兵衛町自邸	冷泉為家筆色紙	しものがれは	冬	
大正	15	1926	11	19	午後五時	大橋新太郎・上六番町邸	寂蓮法師歌切横物	うちよする	賀	
昭和	2	1927	4	3	正午	三井泰山・麻布永坂邸巍々庵	定家卿小色紙	かめやまの		
昭和	2	1927	5	18	不明	樋口三郎兵衛 (不文)・石清水八幡閑雲亭	松花堂読文図	やはたまで	狂歌	
昭和	2	1927	5	21	午後五時	益田鈍翁・御殿山幽月亭	寂蓮法師筆祝歌	ももとせに	賀	
昭和	2	1927	5	22	正午	加藤犀水・大磯別業松風庵	小野道風筆継色紙	われみても	雑	
昭和	2	1927	9	11	正午	団琢磨・箱根千石原麻志良庵	烏丸光広三首詠草	またれつる	夏	
昭和	2	1927	10	28	正午	益田鈍翁・福渡鈍翁別荘	江月和尚筆不定の二大字に和歌	だれとなく		
昭和	2	1927	12	25	午後五時半	根津青山・青山自邸撫松庵	宗旦除夜の歌入文	よのなかは	冬	
昭和	3	1928	4	29	正午	田中平八・葺手町邸	貫之高野切	ふるさとと	春	
昭和	3	1928	6	13	正午	益田鈍翁・小田原掃雲台無仏庵	桂万葉切二首の内	みそれゆく	恋	◎
昭和	3	1928	9	13	午後六時	仰木魯堂・千駄ヶ谷原宿町暇楽庵	西行法師筆八首歌切	ほととぎす	秋	
昭和	3	1928	10	6	正午	近藤滋弥・牛込市谷近藤邸其日庵	行成卿伊予切	あききぬと	秋	
昭和	3	1928	10	22	正午	藤原銀次郎・熱海藤原別邸	俊成卿筆古今集賀歌切・昭和切	わがきみは	賀	

茶会記	元号	年	西暦	月	日	刻限	主催者(場所)	掛物	初句	部立	恋歌
高橋箒庵茶会記	昭和	3	1928	11	2	正午	梅沢安蔵・青山穂田洪柿庵	小野道風筆本阿弥切	かみなづき	冬	
	昭和	3	1928	11	8	正午	前山久吉・下二番町前山邸観空庵	俊頼卿筆羅紋切・九行の歌切	かくばかり	雑	
	昭和	3	1928	11	15	午後五時半	益田多喜子・芝区下高輪東禅寺内暗室	信実筆大中臣能宣	ちとせまで	賀	
	昭和	3	1928	11	20	正午	熊沢一衛・伊勢四日市沖ノ島無想庵	仙台伊達家伝来寸松庵色紙	あきかぜの	秋	
	昭和	3	1928	11	23	正午	磯野良吉・西宮東山荘	中興名物定家卿慶賀文	たちのぼる	賀	
	昭和	3	1928	11	27	正午	山田保次郎・熱海桃山山田隱宅松荷庵	遠州蔵帳連歌師宗長	かぜすさむ		
	昭和	3	1928	12	25	午後五時半	根津青山・青山南町自邸大柱庵	遠州江月松花堂三筆宗祇画賛	うつしおく		
	昭和	4	1929	1	23	午後五時	大橋新太郎・上六番町邸	紀貫之亀山切	うめのかを	春	
	昭和	4	1929	3	21	不明	加藤犀水・大磯別業松風庵	紀貫之筆高野切	あまびこの	雑	
	昭和	4	1929	4	17	不明	熊沢一衛・音羽護国寺月光殿円成庵	定家卿三首懐紙	さらでだに		
	昭和	4	1929	4	17	不明	山田保次郎・音羽護国寺月光殿箒庵	家光公筆	さくときは		
	昭和	4	1929	5	6	正午	野村徳七・南禅寺畔碧雲荘又織庵	源家長筆朗詠切	よろづよと	賀	
	昭和	4	1929	5	13	正午	小堀宗明・青山南町新宅新席山洞	遠州筆益山記	あけぬれば		
	昭和	4	1929	5	20	午後六時	馬越幸次郎・麻布市兵衛町新宅新席	宗祇法師筆大倉色紙	ほととぎす	夏	
	昭和	4	1929	8	14	正午	益田鈍翁・軽井沢別荘緑樹軒	石山切貫之集下の歌四首	あきかぜの	秋	
	昭和	4	1929	8	15	正午	富田重助・軽井沢蝸牛庵	俊頼筆	あききぬと	秋	
	昭和	4	1929	11	4	不明	高橋義雄・音羽護国寺月光殿不味軒	狩野養川院筆紅葉に小禽不味賛	まだちらぬ	秋	
	昭和	4	1929	11	17	正午	益田鈍翁・小田原別業田舎家	石山切・伊勢集	きみがよは	離別	
	昭和	4	1929	12	25	午後五時	畠山一清・白金今里町自邸白里庵	沢庵和尚筆普化禅師自画賛	にてとりて		
	昭和	5	1930	2	17	正午	藤原銀次郎・熱海野中藤原別業一睡庵	松花堂筆遠州賛小幅	かこよりも		
	昭和	5	1930	3	23	不明	団琢磨・原宿自邸田舎家	石山切和歌三首	もしきの		
	昭和	5	1930	4	19	不明	藤原銀次郎・田中城山邸不捨荘龍巢庵	松花堂筆一休和尚臥の図	かこよりも		
	昭和	5	1930	4	19	不明	益田鈍翁・田中城山邸不捨荘幽月庵	遠州筆安閑の傍に一首あり	わくらばに	雑	
	昭和	5	1930	5	5	正午	仰木魯堂・小田原益田邸別業掃雲台	行成卿筆針切十行一軸	わがことや		
	昭和	5	1930	5	28	正午	梅沢鶴叟・千駄ヶ谷穂田洪柿庵	石山切	きみがやど		
	昭和	5	1930	6	5	正午	益田鈍翁・小田原益田邸別業掃雲台	定家卿小倉色紙	だれをかも	雑	
	昭和	5	1930	8	20	正午	益田鈍翁・軽井沢無塵庵	藤原信実画猿丸大夫・平業兼筆	おくやまに	秋	
	昭和	5	1930	8	21	午前七時	平松常蔵・軽井沢無塵庵	鈍翁自筆三十六人集色紙	きみがよは	離別	
	昭和	5	1930	8	21	午前七時	横山雲泉・軽井沢無塵庵	俊成卿筆昭和切	不明	秋	
	昭和	5	1930	10	23	午前十時	益田鈍翁・品川御殿山碧雲台	戸田露朝(弥七)絶筆狂歌狂句	そろばんの	狂歌	
昭和	5	1930	10	23	午前十時	林・服部・土橋・碧雲台太郎庵	寂蓮法師衛門切	なにとなく	旅・折		
昭和	5	1930	10	23	午前十時	六東会・碧雲台三疊晝室	露朝ボンチ画	になひつる	狂歌		
昭和	5	1930	10	23	午前十時	野崎久兵衛・碧雲台幽月亭	伊勢集から	うけたむる	雑		
昭和	5	1930	11	12・13	不明	大宮百瓢・光悦寺大虚庵	俊成卿筆久安切	やへむぐら	秋		

昭和	5	1930	11	18	午後五時	仰木魯堂・千駄ヶ谷原宿	弾正大弼仲国筆消息	さまざまに		
昭和	6	1931	3	23	正午	堀越宗円女史・鎌倉寒雲亭新席四畳半	小大君の歌切	よしのやま	春	
昭和	6	1931	4	6	不明	土橋無声老・嵯峨川崎氏別邸	烏丸光広・春日同詠禁庭歌懐紙	いとはやも	春	
昭和	6	1931	4	8	不明	嘉納治兵衛・白鶴荘事足庵小間	角倉伝来・公任卿筆関寺切	かみのます		
昭和	6	1931	4	21	正午	山澄静斎(力蔵)・日本橋区浜町不問庵	小野道風筆継色紙	はなのいろは	冬	
昭和	6	1931	4	22	正午	馬越恭平・麻布北日ヶ窪月窓庵	西本願寺三十六人集石山切貫之集下	おおはらや	賀	
昭和	6	1931	4	25	不明	横山守雄・伊丹新太郎・幽月庵	遠州筆小色紙	みやまぎの	春	
昭和	6	1931	4	26	不明	馬越恭平・品川御殿山碧雲台宗澄庵	紀貫之筆高野切	はなちらす	春	
昭和	6	1931	4	26	不明	小田栄作・品川御殿山碧雲台仲麿庵	金森宗和伝来西行法師歌入消息	おもひやれ		
昭和	6	1931	5	4	正午	栗山善四郎・築地添光庵	佐理卿紙捻切	ひとめのみ		
昭和	6	1931	5	8	正午	八田円斎・護国寺円成庵	松花堂筆歌仙切	わかのうちら	雑	
昭和	6	1931	5	11	午後五時半	仰木魯堂・千駄ヶ谷原宿仰木邸	行成卿針切	わがこうや	夏	
昭和	6	1931	5	12	午後五時半	藤原銀次郎・麻布新網邸晝庵	行成卿筆朗詠橘花の伊予切	さつきまつ	夏	
昭和	6	1931	5	27	午後五時半	七海兵吉・小石川区宮下町自邸新席	石山切三十六人集伊勢集の内	こきかきり		
昭和	6	1931	6	11	午後五時	団琢磨・千駄ヶ谷原宿松滴庵	藤原為家卿歌仙切	かぞふれば	冬	
昭和	6	1931	10	20	正午	篠原治女・鎌倉大仏裏大谷草庵	俊成卿古今集秋の部昭和切	あきはぎの	秋	
昭和	6	1931	11	11	不明	高橋義雄・梶尾高山寺遺香庵	明恵上人自画賛	さくはなも		
昭和	6	1931	11	12・13	不明	山澄静斎(力蔵)・光悦寺騎牛庵	行成卿伊予切	さをしかの	秋	
昭和	6	1931	11	12・13	不明	林・服部・土橋・福田・光悦寺本阿弥庵	著色光悦歌仙切	そでにさへ	秋	
昭和	6	1931	11	19	午後五時	藤原銀次郎・麻布新網邸晝庵	石山切伊勢集	からころも		
昭和	6	1931	11	25	午後五時半	塩原又策・渋谷羽沢邸禾日庵	光悦筆色紙	もみぢばの	秋	
昭和	6	1931	12	6	正午	七海兵吉・小石川宮下町七海邸三畳台目	民部切俊頼卿歌切	かぞふれば	雑	
昭和	6	1931	12	25	午後五時半	根津青山・青山根津邸撫松庵	沢庵筆慈恵大師七猿歌	つくづくと		
昭和	7	1932	4	27	正午	篠原治女・銀座西七丁目自宅内新席	寂蓮筆右衛門切	よのなかに	雑	
昭和	7	1932	5	13	午後五時半	川部緑水(太郎)・芝公園第五号万象庵	西行筆ほととぎす歌切	おほぞらや	夏	
昭和	7	1932	6	3	午後五時	山澄掬水(亨一)・不問庵	歌切	さつきまつ	夏	
昭和	10	1935	8	24	正午	塩原千代子・塩原家別業	本阿弥光悦筆古歌色紙	つきかげの	秋	
昭和	10	1935	11	初旬	正午	白井くに子・京橋区木挽町是色庵	西行筆小色紙	あきのつき	秋	
昭和	10	1935	12	15	正午	堀越梅子・鎌倉堀越家別業八角庵	貫之集歌切	ふゆのひは	冬	
昭和	10	1935	12	23	午後六時	根津青山・青山根津邸撫松庵	遠州歳暮の文	あすとだに	冬	
昭和	11	1936	1	22	正午	山田敬亮・渋谷南平台橘庵	信実絵良経詞三十六歌仙幅	だれをかも	雑	
昭和	12	1937	4	22	不明	堀越梅子(宗円)・護国寺艸雷庵	道風継色紙	あまつかぜ	雑	
昭和	12	1937	4	25	午後六時	井上三郎・東京八窓庵	石山切貫之集	われはきて	春	
昭和	12	1937	5	6	正午	根津青山・軽井沢麗沢山荘薪庵	信実歌仙兼輔の図・良経賛	みじかよの	夏	
昭和	12	1937	5	14	午後五時半	近藤滋弥・麻布広尾其日庵	沢庵和尚色紙	きたみなみ		

茶会記	元号	年	西暦	月	日	刻限	主催者(場所)	掛物	初句	部立	恋歌
高橋箒庵茶会記	昭和	12	1937	5	19	不明	山本勤女・麴町紀尾井町別宅静庵	西行筆神祇五十首の内	むかしより	神祇	
	昭和	12	1937	5	25	午後六時	山澄力蔵・浜町一丁目不問庵	石山切伊勢集九行	さつきこぼ	夏	
	昭和	12	1937	7	19	午後六時	塩原千代子・渋谷羽沢塩原邸	乾山筆朝妻船図	うしやこの		
	昭和	12	1937	7	30	不明	三尾邦三・築地蜻蛉第三席	石山切	いつはらず		
野崎幻庵茶会記	明治	39	1906	3	21	不明	朝吹英二・大師会・第三席幽月亭	西行筆小色紙	あふさかの	春	
	明治	39	1906	3	21	不明	益田鈍翁・大師会・品川停留所	山縣元帥・国風	むかふかたき		
	明治	39	1906	3	21	不明	益田英作・呉大五郎・塹壕	大山元帥・国風一首	うゑおきし		
	明治	40	1907	11	10	午後四時	野崎広太・汲古庵・代点川部宗無老	井上即詠	みせばやな		
	明治	40	1907	11	17	午後四時半	高橋義雄・箒庵	木下長嘯子文・歌一首あり	さびしさに	雑	
	明治	40	1907	12	28	午後五時	益田鈍翁・別邸	小堀遠州筆	うたたねの	冬	
	明治	41	1908	2	25	午後五時	三井元之助・伊皿子邸	利休文・歌あり	うきよぞと		
	明治	41	1908	12	1~12	不明	益田鈍翁・碧雲台・太郎庵	小倉色紙・本多佐渡守伝来	たれをかも	雑	
	明治	42	1909	1	17・18	不明	新橋田中家女将お竹・一枝庵・代点高橋	家隆筆	よのなかに	春	
	明治	42	1909	4	1	不明	上野理一・大阪	貫之亭子院歌合切	けふのみと	春	
	明治	42	1909	4	2	午後五時	三井守之助・鳥居坂	小堀遠州色紙・定家卿続古今集	さくらばな	雑	
	明治	42	1909	4	3	正午	安田善次郎・別邸又隠	一休筆大色紙	かすがのに	賀	
	明治	42	1909	4	14	正午	益田英作・目黒別邸	松花堂昭乗筆小堀遠州宛歌入文	いえざくら	春	
	明治	42	1909	6	9	不明	三井高保・小柴庵	寂蓮法師・大阪切	さつきまつ	夏	
	明治	42	1909	12	15	正午	瓜生震翁・六勿庵	元伯宗旦歌入文・古市宗庵宛	ほりだしの		
	明治	43	1910	2	2	不明	馬越恭平・本邸芝桜川町の庵	飛鳥井雅縁卿懐紙	ちよろづの	春	
	明治	43	1910	2	14	不明	高橋義雄・一番町本邸内寸松庵	寂然の春と題する色紙	はるかぜに	春	
	明治	43	1910	4	7	不明	井上世外・八窓庵	定家卿和歌	さらでだに		
	明治	43	1910	9	21	午後五時	益田鈍翁・御殿山碧雲台幽月亭	西行筆	よをいとふ		
	明治	43	1910	10	10	正午	益田紅艶・目黒靈水庵	道風継色紙	あしひきの	恋	◎
	明治	43	1910	12	16	正午	瓜生百里・宝樹庵	利休仙阿弥への歌入文	あづまがた		
	明治	43	1910	12	20	午後五時	三井華精・上二番町小柴庵	道風継色紙	わだつみの	雑	
	明治	44	1911	3	22	正午	岩原謙三・内田山邸	道風継色紙	かはかみに		
	明治	44	1911	6	22	正午	益田鈍翁・築地別邸内草庵	定家卿未来記証歌	ひとはいさ	恋	◎
	明治	44	1911	6	23	午後五時	三井高保・上二番町小柴庵	一休筆小色紙	たちかへり	羈旅	
	明治	44	1911	10	23	不明	益田鈍翁・碧雲台幽月亭	信実絵公成筆歌仙切猿丸太夫の図	おくやまに	秋	
	明治	45	1912	1	31	不明	馬越恭平・桜川町邸	小堀遠州筆小色紙	よのひとの	春	
明治	45	1912	2	5	正午	益田鈍翁・幽月亭にて	東久世伯古帆歌懐紙	にひむろに	雑		
明治	45	1912	3	10	夜	馬越恭平・桜川茶寮	飛鳥井雅縁卿懐紙	ちよろづの	春		
明治	45	1912	6	13	午後五時半	益田鈍翁・築地明石町別業	住吉切	はるはすぎ	夏		

明治	45	1912	6	14	正午	瓜生百里・麴町上六番町	慈鎮詠草	さみだれは	夏・恋	◎
明治	45	1912	11	14	午後五時	福井菊三郎・福井邸	一休筆	こころとや	秋	
明治	45	1912	11	18	午後五時	吉田丹左衛門(風軒)・日暮里	俊頼筆古今集切	ちらねども	秋	
大正	2	1913	4	23	午後五時	北村七郎・碧雲台無為庵	紅艶漫筆鈍翁と平田久の像	ただみれば		
大正	2	1913	5	14	午後五時半	野崎広太・渋谷羽沢新宅・三疊向切	豊太閣自筆歌	おくやまの	賀	
大正	2	1913	5	24	正午	馬越恭平・目黒又隠	宗祇法師大倉色紙	ほととぎす		
大正	2	1913	7	26	正午	井上馨・鎌倉・初入	坊門局(俊成女)の歌切	なつのは	夏	
大正	2	1913	7	26	正午	井上馨・鎌倉・後入	後京極良経筆色紙	あきはなを	秋	
大正	2	1913	8	1	正午	益田鈍翁・碧雲台幽月亭	光悦筆蓮の下絵	ももしきの	雑	
大正	2	1913	11	21	正午	嘉納治兵衛・方円亭二疊半台目	寸松庵色紙貫之筆	みやまより	秋	
大正	2	1913	11	24	午後五時	三井守之助・麻布鳥居坂本邸新席	定家大井川行幸の歌	かめやまの	賀	
大正	2	1913	12	22	正午	三井松籟	俊成詠草	みなかみに	賀	
大正	2	1913	12	30	夜	三井松籟	西行筆	はるのこむ	冬	
大正	3	1914	2	12	夕	三井松籟	一休筆色紙	あしはらは	神祇	
大正	3	1914	4	2	午後四時半	森下岩楠・三光坂邸	遠州筆か	もろこしの	俳諧	
大正	3	1914	4	9	正午	瓜生百里・上六番町邸宝樹庵	拾遺抄集切俊頼筆	よろづよと	賀	
大正	3	1914	8	1	正午	野崎広太・箱根湯本幻庵	烏丸光広卿筆	ぬれぬれし	夏	
大正	3	1914	8	28	正午	益田鈍翁・小田原掃雲台	米翁大綱和尚筆	すずしきは	夏	
大正	3	1914	9	20	夜	三井守之助・無名庵	浄弁僧正筆色紙	わがすぐる	秋	
大正	3	1914	10	1	夜	益田鈍翁・碧雲台幽月亭	定家筆懷紙	つゆけきは	秋	
大正	3	1914	10	11	正午	川部宗無・麴町区一番町	遠州名物遠山時雨小色紙写し	すみがまの	秋	
大正	3	1914	11	29	正午	山澄宗澄・根岸二疊台中板	一休歌物	こころとや	秋	
大正	3	1914	12	6	正午	益田紅艶・目黒霊水庵	山縣有朋筆自詠	きどめやま	春	
大正	3	1914	12	29	夜	益田鈍翁・太郎庵	江月和尚歳暮の消息	なべてよに	冬	
大正	4	1915	2	21	正午	栗山善四郎	兼好法師筆短冊	ゆふしほの		
大正	4	1915	3	21	正午	安田善次郎・本所横網	沢庵和尚色紙	ひかずへて		
大正	4	1915	4	25	不明	馬越恭平・御殿山妙喜庵	松花堂竹の絵・遠州賛	すぐならむ		
大正	4	1915	4	25	不明	戸田露朝・御殿山	原叟自画賛	のやまをば	狂歌	
大正	4	1915	4	25	不明	河崎寛翁・御殿山小屋掛け席	非黙所持沢庵筆	やまざくら	春	
大正	4	1915	5	18	朝	益田紅艶・目黒新邸	玄旨法印伝記消息	つついづつ		
大正	4	1915	11	12	不明	高橋義雄・向島徳川候邸内嬉森庵	俊成住吉切	わかのうちら	述懐・賀	
大正	5	1916	10	31	正午	益田鈍翁・御殿山幽月亭	沢庵文	もがみがは		
大正	6	1917	6	2	午後五時半	伊丹信太郎・内幸町新宅	烏丸光広十牛自画賛横物	おぼつかな		
大正	6	1917	10	1~3	不明	戸田露朝・大阪三越茶席二疊台目	三斎添削消息文	すみよしの	賀	
大正	7	1918	10	6	不明	高橋義雄・赤坂伽藍洞	一休自賛自画鐘叩きの絵	かねたたき	狂歌	

茶会記	元号	年	西暦	月	日	刻限	主催者(場所)	掛物	初句	部立	恋歌
野崎幻庵茶会記	大正	7	1918	11	23	不明	三井松嶺・洛北鷹峰光悦寺太虚庵	寸松庵色紙・紀貫之筆	やまざとは	秋	
	大正	7	1918	11	27	正午	根津青山・青山本邸	西本願寺伝来西行筆落葉切	せきでらや	秋	
	大正	8	1919	1	19	正午	高橋義雄・向島徳川侯邸内嬉森庵	後京極良経筆	あらたまの		
	大正	8	1919	6	13	晩	根津青山・青山邸	東常縁筆	あしびきの	夏	
	大正	8	1919	11	12	不明	戸田露朝・光悦寺本阿弥庵	西行筆	つきかげの	秋	
	大正	8	1919	11	21	晩	益田多喜子・築地明石町	小堀遠州筆木下長嘯子宛消息	まつのはに	秋	
	大正	9	1920	2	29	夜	高橋義雄・一木庵	三十六歌仙切	いづくとも		
	大正	9	1920	3	24	午後五時	益田鈍翁・品川御殿山碧雲台	佐竹本三十六歌仙切	ことのねに	雑	
	大正	9	1920	4	18	午後十時～	益田紅艶・御殿山碧雲台太郎庵広間	信実三十六歌仙切	みよしのの	冬	
	大正	9	1920	4	18	午後十時～	伊丹信太郎・碧雲台為楽庵	二条為家筆	ゆふされば	冬	
	大正	9	1920	4	18	午後十時～	野崎幻庵・碧雲台幽月亭	信実三十六歌仙切	いまこむと	恋	◎
	大正	9	1920	5	30	正午	福井菊三郎・青山南町親庵	伝公任大色紙	いにしへに	賀	
	大正	9	1920	6	4	正午	益田鈍翁・品川御殿山幽月亭	遠州筆扇面脇に	おそろしや	狂歌	
	大正	9	1920	6	5	正午	梅沢安蔵(鶴叟)・大森新席	俊頼筆拾遺集賀部	よろづよの	賀	
	大正	9	1920	11	10	正午	林新助・京都林邸	烏丸光広	あをぐなり	神祇	
	大正	9	1920	11	11	不明	藤田伝三郎・光悦寺騎牛庵	俊頼筆色紙	いまこむと	恋	◎
	大正	9	1920	11	11	不明	林新助・光悦寺本阿弥庵	小野道風筆本阿弥切	なつなれば	恋	◎
	大正	10	1921	1	12	正午	野崎幻庵・空心庵	鈍翁自詠歌	不明		
	大正	10	1921	2	28	不明	野崎幻庵・自怡荘空心庵	松花堂僧正遍昭画賛	すゑのつゆ	哀傷	
	大正	10	1921	4	2	晩	高橋義雄・一木庵	定家筆小倉色紙	たかさごの	春	
	大正	10	1921	4	3	午前十時～	加藤正義・品川御殿山幽月庵	一休筆道歌一首	にしへゆく		
	大正	10	1921	11	11	正午	梅沢鶴叟・大森	沢庵から烏丸光弘宛の紅葉消息	あさごとの	秋	
	大正	10	1921	11	20~22	不明	野村得庵・南禅寺下河原別荘	信実筆三十六歌仙切	ゆふされば	冬	
	大正	10	1921	11	20~22	不明	名古屋六友会・高台寺上西氏別荘	熊野懐紙	ながむれば	秋	
	大正	10	1921	11	20~22	不明	根津青山・清水寺華中庵	西行筆落葉切本願寺伝来	せきでらや	秋	
	大正	10	1921	11	20~22	不明	久原房之助・祇園袋町新門前別荘	貫之筆寸松庵色紙	みちしらば	秋	
	大正	10	1921	11	21	正午	藤田平太郎(江雪)・網島邸	利休から北民部への消息	すべらぎの	秋	
	大正	10	1921	11	23	不明	平瀬露秀(一方庵)・光悦寺大虚庵	西行御裳濯川初度詠草俊成加點	ほととぎす		
	大正	10	1921	11	23	不明	関戸松下軒・光悦寺騎牛庵	熊野懐紙	うすくこく	秋	
	大正	10	1921	11	23	不明	梅沢ら三名・光悦寺本阿弥庵	藤原範宗二首懐紙	くさまくら	秋	
大正	10	1921	11	24	午前十時	住友春翠男・京都鹿ヶ谷別荘漱芳庵	中興名物定家二首懐紙	こぬいとを	秋		
大正	11	1922	4	16	不明	戸田露朝・碧雲台幽月亭	藤原師賢短冊	むべしこそ			
大正	11	1922	4	16	不明	土橋無声・碧雲台為楽庵	忠家卿柏木切	はるはなを	春		
大正	11	1922	4	16	不明	伊丹楊山・碧雲台無為庵	弘法大師修行の二条為親賛	ほっしょうの			

	大正	11	1922	4	21	正午	原三溪・横浜本牧三の谷三溪園	烏丸光広筆	かげふかき	賀	
	大正	11	1922	5	8	正午	高橋義雄・赤坂一木庵	大倉色紙・宗祇筆	あまびとの	春	
	大正	11	1922	6	1	正午	益田鈍翁・掃雲台閑雲亭	西行筆詠草	さみだれも		
	大正	11	1922	6	6	不明	益田多喜子	伝後水尾亭筆	まつかぜの	夏	
	大正	11	1922	9	1	不明	益田鈍翁・掃雲台・初入	行成筆色紙	なみだがは	恋	◎
	大正	11	1922	9	1	不明	益田鈍翁・掃雲台・後入	含雪公遊覧の即興	くるたびに		
	大正	11	1922	10	30	正午	根津青山・青山邸	木下長嘯子筆	さびしさを	雑	
	大正	11	1922	11	11	不明	村山玄庵・光悦寺大虚庵	寂念小色紙	もろともに	秋	
	大正	11	1922	11	11	不明	土橋無声・光悦寺騎牛庵	歌聖人丸像光悦賛	たつたがは	秋	
	大正	11	1922	11	11	不明	土橋無声・玄塚村山荘	行成筆継色紙	しらつゆも	秋	
	大正	11	1922	12	27	夜	根津青山・青山邸	沢庵消息	きぎはみな	冬	
淡々齋茶会記	大正	14	1925	8	4	不明	神谷保朗・大徳寺・正受院	円能齋筆・短冊	わかれても		
	大正	14	1925	10	29	不明	淡々齋・大覚寺寢殿内茶室	後水尾天皇宸翰・寺宝	ゆきゆきて	旅	
	大正	15	1926	4	4	不明	淡々齋・今日庵・寒雲席	松永貞徳	きみがよは	賀	
	大正	15	1926	4	18	不明	淡々齋・豊公廟・拝服席	黒田清綱筆・千利休	このめなる		
	大正	15	1926	12	14	不明	藤原銀次郎・伊豆熱海藤原家別邸	佐竹家旧蔵・三十六歌仙山辺赤人図	わかのうらに	雑	
	昭和	3	1928	4	2~8	不明	三井守之助・点前淡々齋・鹿ヶ谷住友別邸	藤原公任・賀の歌・中色紙	つるかめの	賀	
	昭和	3	1928	6	2	不明	仙叟遺跡隆茗会・金沢月心寺・太田邸	慶雲・短冊	なつくさに	夏	
	昭和	3	1928	10	18	不明	谷川茂庵・谷川茂庵洛北大原別邸	羽柴秀吉筆・色紙	やまのやま	賀	
	昭和	5	1930	11	29	正午	山中松治郎・東山栗田山中邸	後醍醐天皇宸翰・歌仙切画賛	みわのやま	恋	◎
	昭和	5	1930	12	1	不明	淡々齋・今日庵・又庵	後陽成天皇宸翰	わがかどに	賀	
	昭和	6	1931	4	13	正午	八木宗石・香里八木宗石邸	深草元政詠草	てらふりぬ	春	
	昭和	6	1931	11	19	不明	湯浅指心庵・京都湯浅邸・代点淡々齋	小野道風筆継色紙	かみがきの	大歌所	
	昭和	7	1932	5	23	不明	松尾翠庵・桐蔭荘	石山切・貫之集の内	いままでに	雑	
	昭和	7	1932	11	5	午後二時	淡々齋・霊鷲山荘并井東庵邸	信実筆・三十六人歌仙中壬生忠見	やかずとも	春	
	昭和	7	1932	11	12	不明	八木宗石・対豊庵	寂蓮・右衛門切	もみぢばの	秋	
	昭和	7	1932	11	25	不明	馬場玲蔵・又来庵	忠熙卿・松の懐紙	しきしまの	賀	
	昭和	8	1933	4	29	不明	西村宗清・齋藤宗栄・仙台宮古楼	吉村公懐紙	としごとの	賀	
	昭和	8	1933	6	12	正午	堀越宗円・鎌倉松林荘内八角庵・四畳半	俊頼・古今集切	不明		
	昭和	8	1933	9	13	不明	辻石齋・金沢宝門寺・万有庵・二畳台目	前田利嚮卿・富士山・短冊	うらおもて		
	昭和	9	1934	5	5	正午	畠山一清・東京畠山邸	寸松庵色紙	ほととぎす	夏	
	昭和	9	1934	5	17	不明	松尾喜七・松尾邸	肖柏筆・藤田家伝来	ほのかなる	(恋)	◎
	昭和	9	1934	12	3	不明	荒川宗英・嵯峨荒川益次郎別邸	家隆筆・中院切	不明		
	昭和	10	1935	10	20	不明	淡々齋奉仕・大覚寺御影堂	後龜山天皇宸翰・寺宝	わすれむと		
	昭和	11	1936	10	10	不明	淡々齋奉仕・北野神社・拝服席・明月舎	聚楽懐紙・木下長嘯子	よろづよの	賀	

茶会記	元号	年	西曆	月	日	刻限	主催者(場所)	掛物	初句	部立	恋歌	
淡々斎茶会記	昭和	11	1936	11	19	不明	淡々斎・松和軒	近衛忠熙筆懐紙	不明	秋		
	昭和	13	1938	6	23	不明	藤原銀次郎・白金今里畠山邸	宗尊親王・如意宝珠切	不明	賀		
	昭和	15	1940	4	22~24	不明	淡々斎・大徳寺山内・本席	定家卿小倉色紙・集合十種所載	わすれじの	恋	◎	
	昭和	15	1940	5	3	不明	幽静会・淡々斎奉仕・阿弥陀堂	光広卿懐紙	いづくより	夏		
	昭和	18	1943	11	19	不明	淡々斎・今日庵・寒雲亭	元伯筆・笠人物自画賛	うへみれば	狂歌		
	昭和	20	1945	11	11	午前十時	淡々斎・多曾雅礼会主催・知恩院・四畳半	石山切・貫之集の内	いままでに			
	昭和	20	1945	11	28	不明	淡々斎・今日庵・又庵	元伯宗旦筆	おくのやま			
	昭和	22	1947	4	18	不明	淡々斎・豊国廟桐蔭席	藤原基俊筆・山名切	不明			
	昭和	26	1951	4	18	不明	淡々斎・豊国廟	後柏原院二首詠草・春月懐紙	かすみても	春		
	昭和	26	1951	11	14	正午	淡々斎・今日庵・又隠	一休筆・前田家伝来	ましてしばし			
	昭和	29	1954	1	8~10	午前十時	淡々斎・今日庵	近衛家熙卿・懐紙	あらたまの	春		
	昭和	30	1955	1	7~10	不明	咄々斎・今日庵	近衛家熙公・朗詠巻物切	あらたまの	春		
	昭和	30	1955	9	28	不明	淡々斎・東横百貨店内茶室・閑静庵・三畳	後柏原天皇御宸翰・秋日詠三首	不明	秋		
	昭和	30	1955	11	11	午後六時	淡々斎・今日庵・又隠	淨弁筆・和漢朗詠	かみなづき	冬		
	昭和	31	1956	10	24・25	不明	淡々斎・名古屋城・又隠写席	後鳥羽院・熊野懐紙	不明			
	昭和	31	1956	11	17・18	不明	淡々斎・太閤坦・桐蔭席・猿面席	後柏原天皇宸翰・重要美術品	かげよわき	秋		
	昭和	33	1958	1	7	不明	咄々斎・今日庵・式場	靈元天皇宸筆・大横物	きみがよは	賀		
	昭和	33	1958	1	20	不明	淡々斎・今日庵・心花亭	靈元天皇宸筆・大横物	きみがよは	賀		
	昭和	34	1959	1	7~10	不明	咄々斎・今日庵	靈元天皇宸筆・大横物	きみがよは	賀		
	昭和	35	1960	1	7~10	前9~後4時	淡々斎・今日庵	靈元天皇宸筆・大横物	きみがよは	賀		
	昭和	35	1960	1	16~19	不明	淡々斎・東京道場	靈元天皇宸筆・大横物	きみがよは	賀		
	昭和	36	1961	1	16~19	不明	淡々斎・東京道場	靈元天皇宸筆・大横物	あらたまの	春		
	昭和	37	1962	1	16~19	不明	淡々斎・東京道場	靈元天皇宸筆・大横物	あらたまの	春		
	昭和	37	1962	2	8	午前九時	咄々斎・今日庵	俊成卿筆和漢朗詠切	不明	春		
	昭和	38	1963	1	7~11	午前十時	咄々斎・今日庵	正親町天皇宸翰・懐紙	ふたばより	賀		
	小林逸翁茶会記	昭和	17	1942	11	10	午後一時	鴻池家瓦屋町別邸	西行法師落葉切	こけふかき		
		昭和	18	1942	1	7	午後一時	太田秀葉・大阪美術会館	後西院御宸翰	まもるてふ	賀	
		昭和	18	1942	4	25	正午	大河内子爵・谷中清水清美庵	頼政切三首	わたのはら	雑	
		昭和	18	1942	5	16	不明	故大沢徳太郎夫人・河原町大沢邸無名庵	定家卿詩歌小色紙	はるあきの		
		昭和	18	1943	8	28	午後二時	塩原翁・木賀山荘	杉木普齋十牛の自画賛	のもやまも		
昭和		18	1943	10	3	不明	牛尾眺美・聚景閣	石山切色替色紙	はるあきに	雑・秋		
昭和		18	1943	10	10	不明	伊藤竹之助・伊藤邸四畳半	後花園院小色紙	こぬあきの	秋		
昭和		18	1943	10	28	午後四時	畠山即翁・芝白金猿町亀岡山般若苑	行成古今集切	なにめでて	秋		
昭和		18	1943	12	7	正午	丹羽昇・夙川翠竹庵六畳	後西院懐紙	このゆふべ	秋		

昭和	19	1944	10	21	不明	恩賜京都博物館陽明文庫付属茶席	後鳥羽院宸翰熊野懷紙	うばたまの	秋・冬	
昭和	21	1946	11	13	不明	鷹峰光悦寺・大虚庵	後京極良経歌切	をぐらやま	秋	
昭和	22	1947	1	17	不明	可転庵	藍紙万葉切・第十八卷	ますらをの	賀	
昭和	22	1947	5	2	十二時	柴山(春日大社宮司)・春日大社神饌所	伏見院広沢切	かすがやま	神祇・雑	
昭和	22	1947	5	18	朝	山中春篁堂三代目・山中春篁堂八畳	信尹公懷紙・夏日同詠松千年契	不明	夏・賀	
昭和	22	1947	8	15	午前八時	湯木貞一・芦屋本宅	定家卿色紙	なつかあきか	夏	
昭和	22	1947	10	24	正午	藪内・藪内大阪本陣常庵	剣仲宛利休歌入文	あるひとの		
昭和	22	1947	11	7	不明	住吉山乾山荘不鬼庵	石山切伊勢集	つゆかかる	秋	
昭和	23	1946	3	18	不明	坂田翁・新伊丹好日庵・二畳中板流し	利休狂歌入文・伊勢屋宗滴宛	きよきよと	狂歌	
昭和	23	1946	10	5	不明	大小庵	光悦和歌巻物切	不明		
昭和	23	1946	10	25	昼	不明	升色紙	はなすすき	秋	
昭和	23	1946	11	6	午前十一時半	村岡・花屋敷村岡邸	細川幽斎詠竹・横幅	おとおもふ	秋	
昭和	23	1946	11	19	不明	不鬼庵主人・不鬼庵	家光公筆嘯鳥	よのひとの		
昭和	25	1950	2	5	不明	小林一三・雅俗山荘費陰	光悦歌切	不明	春	
昭和	25	1950	3	25	不明	小林一三・雅俗山荘大小庵	歌仙切貫之	不明		
昭和	25	1950	4	14	正午	米島君居・米島宅四畳半	伝西行筆歌切	あまつかぜ	雑・春	
昭和	25	1950	5	11	正午	五島慶太・玉川五島邸	太田切	不明		
昭和	25	1950	8	29	不明	小林一三・雅俗山荘大小庵	実朝中院切	不明		
昭和	25	1950	11	23	不明	五島慶太・五島春山居	升色紙豎幅	むばたまの	秋	
昭和	25	1950	12	3	不明	松岡魁庵・本山村新茶席二畳台目	藤田家伝来寸松庵色紙	ちはやぶる	秋	
昭和	25	1950	12	7	不明	藤木正庵・藤木邸	為家卿歌切	やまざとは	冬	
昭和	26	1951	2	1	不明	小林一三・雅俗山荘大小庵	義政梅薫風和歌短冊	不明	春	
昭和	27	1952	4	24	不明	畠山一清・畠山邸名月軒	公任大色紙	よろづよの	賀	
昭和	28	1953	1	3	不明	小林一三・雅俗山荘費隠	遠州歌入文・一月三日付	不明	春	
昭和	28	1953	2	13	不明	小林一三・雅俗山荘費隠	藍紙万葉切・梅の和歌	不明	春	
昭和	28	1953	3	2	不明	小林一三・雅俗山荘費隠	藍紙万葉切・伝公任筆	不明		
昭和	28	1953	4	4	不明	藤木正庵・曾根星岡茶寮反古庵	兼好三首詠草	さくはなの	春・恋	◎
昭和	28	1953	7	不明	不明	湯木貞一・祇園中村楼	道風継色紙・雁半伝来	かみがぎの	神遊	
昭和	28	1953	11	不明	不明	嘉納治兵衛・白鶴荘	宗祇法師大蔵色紙	たつたやま	秋	
昭和	28	1953	12	6	不明	榎泉亭	西行落葉切	不明		
昭和	29	1954	2	6	不明	小林一三・雅俗山荘費隠	後西院春日野小色紙	不明		
昭和	29	1954	4	20	不明	松江市長・福寿荘	不昧公筆笠人物画賛	うへみれば		
昭和	29	1954	5	6	正午	平山泥庵・京都麩屋町三条上平山邸	伊予切松の一節	われみても		
昭和	29	1954	11	11	不明	小林一三・雅俗山荘大小庵	大雅堂虫音和歌懷紙	不明		
昭和	30	1955	7	28	午前五時	湯木貞一・高麗橋吉兆本店	松花堂朝顔絵賛・遠州和歌	不明		

茶会記	元号	年	西暦	月	日	刻限	主催者(場所)	掛物	初句	部立	恋歌
小林逸翁茶会記	昭和	30	1955	9	27	不明	小林一三・雅谷山莊大小庵	春日襖紙・秋三題	不明	秋	
	昭和	30	1955	10	9	正午	小河愛媛居翁・住吉山手愛媛居	寂蓮法師色紙	まつひとに	秋	
	昭和	30	1955	10	27	午前十一時	栗山善四郎・山王境内八百善	緑色紙	としへぬる		
	昭和	30	1955	11	12~13	不明	関戸・京都鷹峰光悦寺騎牛庵	後鳥羽院襖紙	としへぬる		
	昭和	30	1955	11	14	不明	丹羽翠竹庵・丹羽邸	緑色紙・住友家伝来	ふゆごもり	冬	
	昭和	30	1955	11	18	不明	小林一三・雅谷山莊	定家歌草・うづ山の歌	不明		
	昭和	30	1955	11	25	午前十一時	村山龍平・御影住吉村山邸女庵	緑色紙・伊達家伝来	あづきゆみ	雑	
	昭和	30	1955	12	8	不明	小林一三・雅谷山莊費隠	俊忠歌合切・雨後寒草	不明	冬	
	昭和	31	1956	3	21	正午	高梨紫塵庵・北鎌倉尚美庵	佐理卿綾地切三首	うごきなぎ	賀	
	昭和	31	1956	4	5	正午	齋田好日庵・好日庵	石山切・貫之集買歌	ずみのえの	賀	

彼等に何らかの規則性を見出すことは現在のところ不可能と言わざるを得ない。

ところで、千家流茶道で恋歌忌避の条項が成立した理由には、次の二つの可能性が考えられる。一つは、技術面での戒めである。というのも、恋歌というものは上手に使用しないと、下品になったり、客に不快感を与えたりしかねない。つまり上級者にだけ許される「技」なのである。季節の歌や墨蹟などは普段の茶会にはよいが、追悼など深い悲しみを表したく時には、恋歌が有効なのである。それは、恋歌が原則的に、人を恋い願う気持ちの表白であるから、に他ならない。「生半可な茶人は使わないほうがよい、いや使いこなせない。それならいっそ、教則として全面的に禁止したほうが無難である」、そういった考えもあったのではないだろうか。

もう一つ考えられることは、茶会への女性参加である。掛物の意味を解し始めた寛永期周辺の茶会記には、表6に示したように『小堀遠州茶会記』、『江岑宗左茶会記』、『藤村庸軒茶会記』などがあるが、これらの茶会記には女性であると明言できる人物は見当たらない。だが先学に女性の茶会参加に関する言及がいくつか見られる。谷端昭夫氏は『近世茶道史』の中で、後水尾天皇の第十五皇女である品宮常子内親王(一六四二〜一七〇二)の日記、『无上法院殿御日記』に内親王が茶会に出席した記録を見出している。寛文六年(一六六六)十一月に禁裏で行なわれた口切茶会、延宝九年(一六八二)七月三日に行なわれた後西院(二六三七〜一六八五)主催の茶会などに、内親王が参加していたことが確認できる。内親王は茶会に伴するだけでなく、茶会を催す力もあったようである。貞享二年(一六八五)四月に行なった茶会では、掛物以下諸道具は全部内親王が用

意したものであるという。このことから少なくとも公家社会においては、遅くとも寛文文間に女性が茶会に出席することがあり、後には茶会を催すまでに実力をつけていたことが確認できる。では武家や町人階級ではどうであろう。また、村井康彦氏は杉木普斎（一六二八～一七〇六）の「得失庵壁書」という文書中に「一、談はすきわざをいふとも、女性を連れ来るべからず」という一条があることを指摘し、これは「女性がそうした場（茶会―筆者注）に出席する機会がふえて来た事情を反映するもの」で、「じじつ茶湯の世界に女性が登場しはじめたのは、まさにこの時期―十七世紀末、元禄時代前後からであった」としている。^⑧この他に早いところでは、寛永二年（一六二五）の跋を持ち、慶安二年（一六四九）に刊行された烏丸光広（一五七九～一六三八）の作とされる仮名草子『めざまし草』にある好色な「すき男」が遊女をひそかに数奇屋の中に呼び入れたが、それがばれてしまって、その事を聞きつけた「あるじの女」が怒り狂って暴れだすという話が出てくる。^⑨これは正確に言えば茶会への女性参加とは関係ないが、茶室が密会の場となっている点で留意しておくべき記事であると思われる。また、井原西鶴（一六四二～一六九三）の所謂「好色物」とよばれる作品に登場する遊女が、往々にして茶を立てたり、茶会を催したりしていることから、少なくとも元禄以前の遊女（特に太夫）に茶道の心得があったことがわかる。具体例を示すと、天和二年（一六八二）刊の『好色一代

男』に出てくる吉野太夫は、世之介の親族の前で茶を立て、それをふるまっているし（巻五）、高橋太夫は世之介を正客とした口切茶会を催している（巻七）。遊女の教養の一つに茶があったことは有名であるが、島原遊郭の沿革を考証した寛政十三年（一八〇一）刊の『一目千軒』という書物には「都て遊女といふもの、今はいやしむといへども、むかしの遊女は、詩歌、管弦、連俳、茶、香、鞠、庖丁、碁、双六等万芸に達せしものにて」とあり、「むかしの遊女」の教養の高さを主張している。^⑩遊女以外では、元禄六年（一六九三）一月に出版された西鶴作『浮世栄花一代男』巻四「月影移す龍宮の相焼」には亭主に代わって点前をする女性が登場する。西鶴はそれを「扱も美人かな美人かな伝へ聞し利休の息女とも是程はあらじ」と表現している。^⑪時代は少し下るが、松代柳枝（生没年未詳）作、享保元年（一七一六）刊『庭訓染匂車』には、男女が狭い茶室で身が触れ合ううちに女房が密通してしまう話がある。^⑫この話は、原田伴彦氏（一九一七～一九八三）によって紹介されており、「女性が茶会に加わりはじめたことと、それとともに茶会が猥雑化する傾向などのあった風潮を示すものであろう」という解説がなされている。^⑬原田氏はさらに、享保二年（一七一七）初演、近松門左衛門（二六五三～一七二四）作の浄瑠璃『鐘の権三重帷子』にも、松江藩の小姓笹野権三が藩の茶道役浅香市之進の妻に茶を習っているうちに、不義の疑いを掛けられるという場面があることを指摘している。^⑭

同じ享保年間に成立したと思われる茶書に、『刀自袂』というものがある。これは大口樵翁（一六八九〜一七六四）という石州流の茶人が女性向けに書いた茶書である。この本には恋歌に関する記述はないが、女性が茶を飲んだ後に男性へ渡す場合には手渡しせず、床に置いて渡す事、女性が男性一人を招く、あるいは反対に男性が婦人一人を招く事を禁ずる事などが書かれている。こういった小説や、女性向けの茶書が生れるということは、その背景に、当然女性の茶会参加があったと考えられる。勿論その数は多くはなかったと思われるが、元禄以前にも茶会に女性が参加することがあったと考えられる。具体的な数字を挙げておこう。藪内流の門人録を調べた西山松之助氏によれば、享和元年（一八〇一）から明治十二年（一八七九）までの間で門人録に記された総人数一五七八人であるが、その内女性は僅か二十八人だけにすぎず、しかも慶応以前の江戸時代だけにしてみると、入門者総数一三八四人中女性は僅か十五人だけで、一%そこそこにしかならない。江戸時代初期の茶会に女性が参加していたかどうかを、西山氏の資料から推測することは不可能である。女性の入門者が少なかつたのもまた事実である。だからといって、女性が茶会に参加していなかつたとは断定できない。いや、むしろ少なかつたからこそ、恋歌が問題になり、また様々な文芸にも描かれたのではなからうか。

今仮に、茶会への女性参加という現象が、江戸時代初期から起こ

つていたとすると、拙稿「恋歌の消滅―『百人一首』の近代的特徴について」で見た、明治時代の歌留多会と同じ構造がここにも生まれていたことになる。明治時代の歌留多会では、恋歌の多い『百人一首』という男女の恋情を表現した「素材」があり、そこに男女が集う「場」が成立していた。これと同じ事が江戸時代初期の茶会でも起こった。寛永期頃から掛物の歌の意味を解するようになったことで、男女の恋情を表現した恋歌という「素材」が供給され、茶会という男女が同席する「場」が成立した。これは、明治時代『百人一首』で起こった「歌留多会現象」が、江戸時代には茶会で起こっていたということの意味する（『百人一首』の場合も歌留多会が北村透谷や尾崎紅葉の小説に描かれていた）。それ故、千家流茶道では茶会を淫猥なものにしないために恋歌を禁止せざるを得なかつたのかもしれない。逆に言えば、ある意味で禁欲的ともいえる千家流の茶会と対照的な茶会を催した益田英作（紅艶）は、女性を招いて、しかも恋歌を掛けていた。このことから、女性と恋歌忌避の間には大きな関係があると考えられる。

だが、ここで次のような新たな疑問も湧いてくる。それは、もし仮に、女性の茶会進出が恋歌忌避の考えを生んだとすると、なぜ千家流茶道にだけ、恋歌忌避の条項が定められ、大名系茶道にはそれが見られないのか、といった疑問である。恐らく武家でも大名の子女などが参加する場合が当然あったと考えられる。その結果、恋歌

に関する何らかの注意がなされていても何ら不思議ではない。それなのに、今日に至るまでついに大名系茶道では恋歌を禁止する条項は生まれなかった。この事実をどのように説明すればよいのだろうか。大名系茶道と千家流茶道の確立に大きな影響を及ぼした小堀遠州と千宗旦の茶道に対する考え方の違いという点で説明できるのか、あるいは家元制度などの継承形態に関する相違で説明できるのか、いずれにせよ、重要な問題を残していると言わざるを得ない。今後最も早急に解決すべき問題であると考ええる。ただし、一つだけ確実に言えることがある。それは、千家流の茶道に比べ、大名系茶道が歌道をより重視しているということである。千家流茶道では「茶禪一味」という言葉が示すように、その精神的、思想的支柱はあくまでも禪宗のみにあり、それはこの流派の茶書にも明確に表れている^(註)。一方、大名系茶道では、儒・仏・歌道の三教一致、あるいは仏・歌道の両道一致思想が茶道の根本理念である。例えば、熊倉功夫氏は、小堀遠州と前田光高(一六一五〜一六四五)の間に交わされた問答の中に遠州が儒・仏・歌道の三教一致観があることを指摘している^(註)。また、石州流の根本茶書である『石州流三百箇條』には、茶道が仏道・歌道を兼ねたものである旨の条文が明記されている。「茶の湯は仏法歌道を兼ねたるよし申伝え候」や「茶湯は仏道歌道をかねたるものなり」といった文言がそれにあたる^(註)。このようなことから、大名系茶道では歌道を、その精神的支柱の一つにしていた。つまり、

大名系茶道では、「仏道」(時に「儒道」も)と「歌道」が等価なのである。この際の「歌道」が、伝統的な和歌の世界、つまり江戸時代というと堂上和歌の世界を指すことは、言うまでもない。すなわち、大名系茶道が中心理念とした歌道は恋歌をも含む、いや恋歌こそ歌の根本であるとする歌道であったのである。このことが、千家流茶道には忌避された恋歌が、大名系茶道では排除されなかった原因ではないか、と現在のところ考えている。今後更なる調査を行ない、事の真相を明らかにしたいと考えている。

最後に、これまで(前論稿も含む)に明らかになったことに基づき、大名系茶道、千家流茶道、「近代教寄者」の茶道の性格をそれぞれ一言で表現しておきたいと思う。

大名系茶道においては、茶会は武士(建前として儒教的倫理観を持った者)から一人の人間へと解放される場であった。そしてそれは恋歌をも容認するものである。だから今仮に大名系茶道を「艶」の茶道と表現しておきたい。大名系茶道を「艶」の茶道としたのは、何も恋歌をとりこんでいるからだけではない。茶道具のバランス、色、配置など優美な感じを与えるのが、大名系茶道の特徴ではなからうか。遠州茶道宗家十三世家元である小堀宗実氏が、遠州流の茶を「艶」と表現しているのもそれを補強してくれるだろう^(註)。

千家流茶道が「わび」という概念を最重要視していることは周知

の通りであり、今更それに変る概念を提出できるとも思えない。ただし、本論稿でわかった事柄から、千家が標榜する「わび」という概念とは何かを考えなくてはならないだろう。本論稿で千家流茶道について、これまでにわかったことを、箇条書きで列記してみる。

① 掛物に恋歌を使用する事を原則的に禁止している。そのような言説が出てくるのは千宗旦の弟子の時代からである。

② 表千家では『百人一首』の中の藤原定家の歌「こぬ人をまつほの浦の夕なぎにやくや藻塩の身もこがれつつ」は恋歌ではあるが、例外として容認していた。

③ 千家流茶道では利休追善供養の際にのみ恋歌を使用していた。それらはいずれも利休ゆかりの品であった。

④ 千家が茶道具につける銘には、謡曲由来のものが多く、ここに千家流茶道の本質を解く鍵が隠されているのかもしれない。一つの仮説をここで示そう。謡曲の本質とは何か、ということから考えていこう。謡曲の本質を一言でいうと「亡魂の慰撫追善」である。では「亡魂」とは何か。利休の魂ではないか。千家流茶道は現在に至るまで一貫して「利休の亡魂慰撫追善」の茶を行なってきたのではないか。表千家が容認した歌の「こぬ人」とは利休であり、「身もこがれつつ」後人は利休の魂を「まつ」。追善供養で掛けられた恋歌で言えば、「こぬ人」、「思ひいで」る対象、そして「心かよは

ん」と願っている人物とはいずれも利休であり、「わすれじ」としている対象も利休その人なのである。「わび」という言葉は本来恋歌でよく使われる言葉である。すなわち「わび」という言葉は「恋」とは切り離せない言葉だった。この「恋」と「わび」の強い結合性は完全に潰えてしまったのであろうか。もし、幾許かでも「わび」という言葉が本来持っていた「恋」の要素が残存しているとすれば、その恋の対象が他ならぬ「利休」であったのではないだろうか。つまり、「わび茶」の根底には「利休亡魂」の思いが今でも息づいているのではないだろうか。確かに、「わび茶」というものが、通常理解されているように「不如意を樂しむ」とか「無一物」の茶といった要素を否定するつもりは毛頭ない。いやむしろ、そちらの方の意味合いが強いであろう。しかし、その根底には「わび」という言葉が本来持っていた「恋」の要素がまだ残っているのではないか。言葉や概念というものは、当然時代とともに変化するが、変化しながらも本来持っていた意味を全く失うということはないのではないか。「わび」という言葉、概念も当然その例に漏れないのではないだろうか。その証拠に、利休の追善茶会にのみ恋歌が使用されていたのではないか。この仮説については、従来の研究なども十分考慮に入れながら、より深く考察してみたいと考えている。^⑧

本論稿ではあくまで一つの仮説とし、提示するにとどめる。
ところで、千家流、大名系茶道などと区別して言う場合に、一つ

だけ留意しておかなければならないことがある。それは、大名系茶道と千家流茶道は決して対立するものではなく、両者が決して排他的ではないということである。かつて、谷川徹三(二八九五〜一九八九)は『茶の美学』において、茶道を構成している重要なファクターを、①社交的なもの、②修業的なもの、③芸術的なもの、④儀式的なもの、の四つであると規定した。これに従えば、千家流の茶道はより②が重要視されているし、また大名系茶道では、①および③あたりが重視されているように思える。両者の違いは、この四つのファクターで構成される三角錐のどこに位置付けられるかの違いにすぎないといえよう。それは「近代数寄者」の茶道も同じである。近代(明治以降とする)に入ると、数寄者と呼ばれる人々が出てくるが、これらの人々は茶会を楽しむの一つと考えている場合が多く、どちらかといえば大名茶の系列に属するものと考えられよう。それは種々の高価な道具を用いて茶会を行なったという点からしても、容易に理解できよう。しかし、恋歌に関する考え方については、千家流の考え方が入っている可能性もあるので、一概に大名系茶道に近いとも言えない。そこで、両者を兼ね備えた存在と見た方が適当であると思われる。それを一言で表現するなら「社交」の茶道と言えるのではないだろうか。「近代数寄者」を「社交」の茶としたのは、茶のサークルのような感じを受けるといったこともあるが、藤原銀次郎(暁雲：一八六九〜一九六〇)の次のような発言からも、そ

のような理解が、ある程度正しいことが確認できる。藤原は明治維新当時、政治家や実業家はみんなよく吉原で遊んだが、それが段々新橋や深川、柳橋の料理屋、待合にうつり、最後にはそれがお茶になったという。藤原は吉原の説明の中で「明治文化の花が咲き、政治も経済も、こゝからうごいたようなものである」といつているから、このような社交の場が段々茶会という形に変化して言ったとみてよいだろう。「近代数寄者」にとって茶会とは、ビジネスを円滑に動かすための「社交」の場であったのである。先程の谷川徹三が挙げた四つのファクターでいえば、当然①が最重要されているといえるだろう。それに加え、「近代数寄者」達は美術品のコレクターでもあり、これを披露する場として茶会が利用された面も少なからずあるので、③も重要なファクターであると考えられる。

もう一度総括しておく、恋歌の世界を内包しているのが大名系茶道、基本的に恋歌を禁止し、排除しているのが千家流茶道、そして両者が交じり合う要素を持つものの、どちらかと言えば大名系茶道に近い「近代数寄者」の茶道の三者があって、これまでの茶道史の主流をなしてきたといえる。つまり、茶道の世界は非常に多彩であり、決して正しい茶道のあり方などというものはない。この懐の深さと多様性があるために、茶道は今でも多くの人を魅了して止まないのである。

注

- (1) 「茶道と恋歌(二)―『恋歌ハいむべし?』『日本研究』第二十八集、国際日本文化研究センター、平成十六年一月
- (2) 原田伴彦『近代数寄者太平記』(原田伴彦著作集)第三卷、思文閣出版、昭和五十六年七月)所収
- (3) 熊倉功夫『近代茶道史の研究』、日本放送協会出版、昭和五十五年二月
- (4) 同『近代数寄者の茶の湯』、河原書店、平成九年二月
- (5) 同編『茶道聚錦』6(近代の茶の湯)、小学館、昭和六十三年三月
- (6) 鈴木皓詞『近代茶人たちの茶会』、淡交社、平成十二年三月
- (7) 前掲『茶道聚錦』、七四頁
- (8) 前掲『茶道聚錦』、八三頁
- (9) 本論稿において考察対象にした茶会記は以下の通りである。煩雑さをなくすために、一部改称を加えた。
 - ・古今茶湯集 : 山本寛他編『古今茶湯集』、慶文堂書店、大正六年九月。この茶会記集は日付順に配列されているが、本論稿では年代順に改めて用いた。また、明治以前の茶会記録は本論稿では割愛した。
 - ・平井家茶会記 : 大阪市史編纂所編『大阪市史史料』第四十八輯、大阪市史料調査会、平成九年二月
 - ・安田松翁茶会記 : 安田善次郎『松翁茶会記』、非売品、昭和二十九年九月

・野崎幻庵茶会記 : 野崎幻庵『茶会漫録』第一集〜第十二集、中外商業新報社

・野村得庵茶会記 : 野村美術館学芸部(翻刻)野村得庵茶会記(二)〜(五)『研究紀要』、野村文華財団、平成十一年〜十五年

・高橋箒庵茶会記 : 熊倉功夫・原田茂弘校注『東都茶会記』一〜五、淡交社、平成元年三月、同『大正茶道記』一〜三、淡交社、平成三年十月、熊倉功夫編『昭和茶道記』一〜二、淡交社、平成十四年三月

・淡々齋茶会記 : 千宗室『裏千家 淡々齋遺芳集』第二卷(自会記・他会記)、淡交新社、昭和四十一年十二月

・小林逸翁茶会記 : 小林一三『大乘茶道記』、浪速社、昭和五十一年三月

*尚、以後特に必要のない場合はすべて改称を用いる。

(10) 前掲『古今茶湯集』巻一、一八〇〜一八一頁。尚、『古今茶湯集』に関しては原田伴彦『風俗史・経済史から見た茶道の人脈』(原田伴彦論集)第五卷、思文閣出版、昭和六十一年五月、二三五〜二三七頁)に詳しい解説がある。

(11) 第五章で述べた『江岑夏書』の引用記事を指す。ここでは、「あまのはら……」、「やへむぐら……」、「こぬ人を……」の三首は特別扱いされていた。

(12) 高橋義雄著・林屋晴三監修『復刻 大正名器鑑』第五編(上)、アテネ書房、平成九年一月、八四頁

(13) 千宗左・千宗室・千宗守監修『利休大事典』、淡交社、平成元年十月、二六七頁。林屋辰三郎執筆担当

(14) 前掲『古今茶湯集』巻二、二六〇―二七頁

(15) その経緯については、関重広「渡辺清について」(藤根井和夫編『歴史への招待』①、日本放送出版協会、昭和五十四年十二月、一五六―一五七頁)に詳しい。その他管見では『史談速記録』第十八輯、第五十三輯、第五十八輯、第五十九輯、第六十八輯、第七十四輯、第九十六輯に彼自身が維新のことについて語った談話が残っている。

(16) 前掲『昭和茶道記』一、七一―七頁

(17) 渡辺と松浦が同族意識を持っていたことは明らかである。なぜなら明治二十七年九月から十月にかけて彼等は源融(河原左大臣)一千年忌を行なっている。その際、彼等一族の者が献詠を行なっており(一族末裔献詠、それが後に『千代の香』(明治二十八年九月)として菅沼量平によってまとめられている。ちなみに、兩人とも「河辺菊」「塩釜煙」という題詠を行なっていて、その歌は次のようなものである。

河辺菊

千世までもいや栄けり加茂川の岸の白菊ねはかれすして 正三

位松浦詮

塩釜煙

塩釜の煙の末そしのはるゝたゝて千とせの年はふれとも

河辺菊

志ら菊の匂ひなかるゝ河水を千とせの後にくむそ嬉しき 従三

位渡辺清

塩釜煙

遠方になひく塩屋のけふりさへ昔を志たふこゝちこそすれ

二つの題はそれぞれ『伊勢物語』と『古今和歌集』にある源融に関する記述から採用されたと思われる。まず「河原菊」は、『伊勢物語』第八十一段に基づくものであろう。この段では「賀茂河のほとりに、六条わたりに、家をおもしろく造りて住んでいた源融邸に「神無月のつごもりがた、菊の花うつろひざかりなるに、紅葉の千種に見ゆるおり、親王たちおはしまさせて」というあるように、親王らが菊を見に来た設定になっている。つまり、賀茂川の畔にあった彼のかつての邸宅の菊は親王が来られる位に美しかったことを物語っている。また、「塩釜煙」という題は『古今和歌集』巻十六にある紀貫之の歌「きみまさで煙たえにし塩釜のうらさびしくも見えわたるかな」からきている。この詞書は「河原左大臣の身まかりてのち、かの家にまかりてありけるに、塩釜と言ふ所の様を作れりけるを見て、よめる」というものである。

(18) 松浦伯爵家編集所編『松浦詮伯伝』二、非売品、昭和五年十二月、三四四頁

(19) 前掲『松浦詮伯伝』二、三四四頁

(20) 『読売新聞』明治二十六年十月二十六日の「雑報」に次のような記事が見える(朝刊第三面)。

●三荘一時に成る 京都ハ山水明媚の地、近來人の来り別荘を構へるもの少からず。現に、十月に入りて三荘一時に工事竣成し、又殆ど同時に三氏移住せり。其の位置と其の主人とを聞くに、其一ハ主馬頭藤波言忠子爵にして高野川の東田中村に洋風

を以て造立し、其二ハ貴族院議員男爵渡辺清氏にして西洞院榎木町上る西側に和風にて造立し、其三ハ貴族院議員松本鼎氏にして鴨川東竹屋町に和風を以て造立せり、と（適宜句読点を補った）。

また、本田精志『新撰 華族名鑑』（博文館、明治三十二年一月）や秀英舎編集所編『華族名鑑』（秀英舎、明治三十三年七月）には、東京の住所と京都の住所が併記されている。東京の住所は「東京市麻布区麻布霞町二番地」となっている。一方京都の住所は「京都市上京区西洞院通り下立売下ル東裏辻町六番戸寄留」となっている。

京都の住所は先に挙げた『読売新聞』の記事と同じ場所を示している。渡辺の唯一の孫にあたる関重広氏によると、この住所に移る前に既に烏丸通りに家を持っていた。そしてその家は、東裏辻町に移る際にキリスト教の聖公会に譲ったという（関重広「渡辺清とその家族の想い出」『大村史談』昭和五十五年三月、三一頁）。

(21) 藤村庸軒の自宅は西洞院下立売下にあった。『瓶史』昭和七年秋風号（去風洞、昭和七年十月）には大宇村舎主人の「町人階級の茶の湯の指導者としての藤村庸軒」と題する論説があるが、そこに次のような記述が見られる。

旧宅（庸軒の一筆者注）は今京都府庁のある、西洞院下立売に有つて、家の中に滋野井と云名水が有る。明治年間渡辺と云ふ老男爵（渡辺清のこと一筆者注）が住んで居たのを、大阪の実業家外山修造氏が買取つて、別荘にして居た。最近隣りの小学

校に併合されて今、其学校を滋野井小学校と称して居る。（三五頁）

ここには、かつて庸軒が建てた「反古庵」という名席があったという。

(22) 滋野井については辻田無茶士「名水の話」（『茶道全集』巻の十三、創元社、昭和十二年四月所収）に詳しい。

(23) 『読売新聞』明治二十八年十月十九日の「京都だより」には次のような記述が見える（朝刊、三面）。

● 献茶式 豫ねて報じたる如く、去る十五日午前九時より平安神宮に於て、第一回献茶式を執行したるが、献茶主は男爵渡辺清氏、宗匠ハ碌々斎宗旦氏（宗左の誤か一筆者注）にして、先づ祭主以下大極殿西の方に着場したる後、祓の儀あり。夫れより更に東の方に着場して神饌を伝供し、且つ献茶の式を了りたる上献香並に献茶の伝供あり。次に祭主祝詞を奏し、祭主、祭官、献茶主以下の拝礼あり。夫れより神饌、献香、献茶を徹して各自退散したる後、洋服を執行せしが、当日ハ紀念祭執行の初日なれば、之れが招請に應じて列席せし者夥しく、却々の盛式なりしと云ふ。（適宜句読点を補った）

この記事から献茶式が厳肅かつ盛大に行なわれたことが窺える。記事の中に見える紀念祭とは、この年に開催された平安遷都千百年紀念祭のことである。この時の紀念祭開催の経緯については、平安

神宮百年史編纂委員会編『平安神宮百年史』、平安神宮、平成九年三月に詳しい。

また、参考までに挙げておくと、この記事から二週間ほど前の十月六日の同紙朝刊第五面には、この献茶式の事についての予告記事が見られる。次のような記事である。

▲平安神宮秋茶式 豫て京都に於て茶人の聞ある人々、協同して平安神宮に於て秋茶式挙行の事を協賛会に申込ありしが、彌来る十五日午前九時秋茶式を執行するよしにて協賛会評議員、幹事、委員、及び市内の茶の宗匠にて無慮二百名を招待し、神苑茶寮に於て茶菓を饗するといふ。(適宜句読点を補った)

彼はこの他にも、明治三十一年四月十八日から二十日にかけて行なわれた豊公三百年祭では献茶ならびに大茶会を取り仕切る委員長となっていた(『風俗画報』第一六四号、東陽堂、明治三十一年五月)同三十五年四月に行なわれた菅原大神千年大祭では献茶委員長となっている(同第二五〇号、明治三十五年五月)。ただし、後者の献茶会には、彼の息子である環の忌中(同年三月二日没)であったため、渡辺は参会していない。

(24) 前掲『大正茶道記』一、四五二〜四五三頁。また、同じ茶会(日は異なるが)に出席した野崎広太(幻庵)も前掲『茶会漫録』第九集において「さても小倉の色紙を茶事に見るは、蓋しその昔関白豊臣秀次、二代將軍秀忠、三代將軍家光さては国主の大々名が催しに用ひし事、旧き会記に依て僅に伝ふる処、而も大正の今日親し

く之を床に掲げし茶事に臨む、畢竟世が世なればこそと、窃に其眼福を喜び、且つは深く之を楽み」と感想を述べている。これ程に茶人にとって「小倉色紙」は特別なものである。

(25) 前掲『松浦詮伯伝』二、四五五頁

(26) 高橋義雄『箒のあと』上、秋豊園、昭和八年七月、二六八頁。

『角川茶道大辞典』によると、「紅艶の号は芝公園に住んだのにちなむ」とある(二二六七頁、白崎秀雄執筆担当)。

(27) 前掲『箒のあと』上、二六九頁

(28) 野崎広太『茶会漫録』第五集、中外商業新報社、大正三年六月、二二〜二三頁

(29) 石川庄平『京橋繁昌記(一名京橋区沿革史)』、京橋協会、大正元年十一月、一一九頁。ここでは「待合及遊船宿」に「蜂龍」は分類されている。白柳秀湖によると、「三井の人達は、山口(待合の店名―筆者注)の外に木挽町の『蜂龍』にもよく出かけた」という(白柳秀湖『食慾と愛慾』、千倉書房、昭和六年一月、三四四頁)。

「待合」の性格については、井上章一『愛の空間』(角川選書、平成十一年八月)に詳しいが、井上氏によると当時の「待合」は単に性交が行なわれるだけの場所ではなく、飲み屋のような一面があったり、あるいはそこで落語が行なわれるといった演芸場のような機能などを併せ持つ、多目的に利用される空間であったことが明らかにされている。

(30) 高野正雄『喜劇の殿様―益田太郎冠者伝』、角川叢書、平成十四年六月、八二〜八三頁

(31) 前掲『京橋繁昌記』、一一六頁

(32) 菊池武徳『明治史の裏面 名士と名妓』(ダイヤモンド社、昭和十二年三月)は、彼女が明治四十一年有楽座の開場式を祝して行

なわれた新作長唄「賤の苧環」に、唄方の一人として出演した事

(七六頁)、又同四十四年春四月九日(吉原大火の日)和田豊治邸で

行なわれた海棠花見の園遊会において清元名取となった事(四頁)、

同年六月に行なわれた清元オペラ「結縁野辺の色草」に祇王役として

出演した事(一〇二頁)、などを伝える。彼女はその後引退して

「荻江すず」と名乗って声楽の師匠になった。以上のことから推し

て、彼女は美貌よりも歌に優れた芸者であったと思われる。

(33) 前掲『茶会漫録』第二集、明治四十五年六月、一一二〜一一六頁

(34) 勿論「継色紙」という名物を披露したかったという気持ちもあ

ったと思われるが、この表具を異常な早さで仕上げたのには、この

日の茶会に間に合わせるためであったに違いない。

(35) 前掲『茶会漫録』第二集、一一六頁

(36) 柴田佳作「鈍翁の家族と三兄弟 二」(『淡交』第五一九号、淡

交社、平成元年七月)には英作のお茶に関する次のような証言があ

る。ちなみに、この記事は鈴木皓詞氏が当時をよく知る道具商柴田

佳作氏にインタビューする形となっている。

柴田 益田英作・紅艶さんのことは色々なところで、面白可笑

しく書かれているんだが、紅艶さんには他の二人(孝と克徳―

筆者注)には無い、人間的な面白さがあったんだな。気楽でね。

それが端から見ると、駄の字が付く場合があるわけだ。

―遊びが過ぎるのですか。

柴田 同じジャレでも、駄ジャレと悪口を言われるほうに近い
ということ。

―紅艶さんはそれだけ、江戸の黄表紙や落語、芝居、端唄とい
ったものに精通していたということですね。

柴田 そういう事。(五六頁)

こういった証言から判断すると、この茶会は英作の面目が躍如し
ている茶会であり、これが英作流茶会の本質を示す一つの好例では
ないだろうか。

(37) 光芸出版編集部『骨董価値考』、光芸出版、昭和五十四年五月、
一〇〇頁

(38) 柴田佳作「近代の数寄者はなし」(『淡交』No. 五一三〜五二

五、平成七年一月〜十二月連載)は、鈴木皓詞氏を聞き手とした対

談集であるが、益田、馬越、朝吹、岩原などの道具収集とそれにま

つわる伊丹との関係などを知る上で非常に参考になる資料である。

(39) 前掲『茶会漫録』第三集、明治四十五年六月、七七〜八一頁

(40) 前掲『茶会漫録』第三集、八一頁

(41) 石田吉貞『藤原定家の研究』(文雅堂書店、昭和三十二年三月)

には、「未来記」「雨中吟」の二書は何れも詠むべからざる歌を示

した定家の作として、中世の歌字書である『清厳茶話』『ささめご

と』『未来記雨中吟抄』『老のすさみ』『かりのすさみ』等に見え、

『実隆公記』等によれば、『詠歌大概』『百人一首』等と共に、盛ん

に書写され、定家の著作中でも重要なものとして取扱はれてゐるの

である」と述べられている(四四一頁)。しかし『未来記』については、未だ定家の真作か否かの解決をみていないのが現状である。

(42) 前掲『茶会漫録』第四集、大正三年六月、八〇〜八三頁

(43) この懐紙は『思文閣墨蹟資料目録』第二三〇号(思文閣、平成三年八月、九八頁)にモノクロ写真で掲載されているものである。

(44) 藤木正一は藤木工務店の社長であり、大阪府豊中市新免に住んでいた茶人である。お茶は石州流。昭和二十三年に発足した「溪苔会」で小林一三らと共に会員となる。彼の事績については『藤木工務店七〇年史』(藤木工務店、平成四年三月)に詳しい。その他には、巴木千以『愛蔵弁あり』(浪速社、昭和四十年五月、二四〜三三頁)に骨董談が、そして『新修茶道全集』巻五には、彼に関する次のような記述がある。

溪苔会は美術商小澤溪苔堂に集まるお客様の会で、茶よりも観賞畑の人々だけに、鑑識ひろく、次の時代へのダークホースがひそんでゐる。逸翁曠庵のほか、

藤木正一、中原辯治、江口二郎、戸田大三、乾不鬼庵、

小澤溪苔

などの名を聞いてゐるが、どれもこれもが大物買ひで、茶が終つてから腕伏せの交換会をやるのも昭和茶会の一断層と眺められる。

溪苔会中の大物は、藤木正一と乾不鬼庵で、藤木は笹川コレクションを譲受けて、観賞から入つたにかゝらず、今では茶道美術にすばらしい眼筋のよさを發揮し、明時代の彩陶唐津の

名品所持者として知られる。茶は石州流本莊宗泉門下である。(四三二〜四三三頁)

この記述は昭和二十年代のもので、杓庵(高原慶三)によって書かれた「昭和茶道人国記」中にある。

(45) 前掲『茶会漫録』第十二集、昭和二年六月、二六〜三五頁。この茶会には藤原定家の詠草五首歌切がかげられたが、その中に「虫声増恋：忘れゆく宵の思ひをあらためてひとあさちふの松虫の声」という歌がある。しかし、これも恋の歌とはいながら秋の歌とも読めなくはない。他の四首が秋の歌であるだけに、この恋歌も当然秋の歌と感じられたにちがいない。

(46) 『安田松翁茶会記』には、歌の記載はないが「淨弁詠草三首和歌 初夏、五月雨、不逢恋」とあり、六月という季節も考慮に入ると夏の掛物と見做され使用されたのは間違いない。ちなみにこの日の客組は、松浦詮、三田葆光、小松浦、安田善次郎であった。

(47) 原田伴彦編『茶道人物辞典』、柏書房、昭和五十六年九月、一七六頁

(48) この茶会の模様を伝える『東都茶会記』中の記事には、「明治三十五年四月初旬」に亡くなったと記載されているが、これは明治三十六年の誤りである。大正八年四月六日に行なわれた非黙庵十七回忌追善茶会の記事には明治三十六年に死亡したと書かれてあり、こちらが正しい。

(49) 三日間にわたるこの茶会の客組が前掲『東都茶会記』二の注に記載されている(五八八頁)。それによると客組は次の通り。

十二月二十四日 益田孝、朝吹英二、益田英作、山澄力蔵、梅沢安蔵

十二月二十五日 加藤正義、岩原謙三、野崎広太、瓜生震

十二月二十六日 三井八郎次郎、団琢磨、早川千吉郎、池田成彬、伊丹元七

(50) 前掲『東都茶会記』二、五八二〜五八八頁

(51) 川村晃生・柏木由夫・工藤重矩校注『新日本古典文学大系』九、岩波書店、平成元年九月、一一八頁

(52) 前掲『東都茶会記』二、五八四頁

(53) 高橋義雄『萬象録』卷三(思文閣出版、昭和六十二年六月)大正四年十二月二十四日の条は、故益田克徳について様々な懐旧談がなされた事を伝える。中でも銘「不出来」という茶碗に対して次のような話がなされた事が記されている。

中にも今度使用したる克徳氏手造銘「不出来」の茶碗は、故柏木貨一郎氏が焼却し当時五十円にて克徳より譲受けたる者にして、彼の節儉家の柏木が大枚五十円奮発するは実に此茶碗の名誉と謂ふべく、克徳手造茶碗中最も有名翁さびに次ぎては此不出来が無類の傑作なるべしと云ふ。(四六七頁)

(54) 前掲『茶会漫録』第八集、大正十二年八月、一三三〜一三五頁

(55) 現在、国の重要文化財に指定されている。所蔵は財団法人大師会。文字は「施人慎勿念受施慎々内含光柔弱生之」。崔子玉座右銘断簡は、中国後漢時代の崔子玉が人生の戒めとした銘文を空海が草

書で書いたものである。

(56) 長井美『自叙益田孝翁伝』、昭和十四年六月所収「大師会」参照。

(57) 高嶋光雪・井上隆史『三十六歌仙絵巻の流転』、日経ビジネス人文庫、平成十三年六月

(58) 佐竹本三十六歌仙絵巻は上下二巻からなり、下巻の最初には住吉明神の歌と絵(松)がある。したがって歌仙切は三十六人の歌人と住吉明神を合わせた計三十七枚となる。この住吉明神は記念として元の持主であった山本唯三郎に寄贈された。

(59) この日の「大師会」では、「応挙館」に益田孝が斎宮女御を、同奥八畳の間には益田英作が坂上是則を、そして「為楽庵」には伊丹信太郎が紀友則の歌切を掛けている。

(60) 「光悦会」の発足とその後の活動については小田栄一他編『光悦会の歩み』(光悦会、昭和五十六年四月)に詳しい。

(61) 前掲『茶道人物辞典』、一六〇頁

(62) 前掲『茶会漫録』第八集、一八〇〜一八二頁、前掲『大正茶道記』一、二九三〜二九五頁

(63) 前掲『大正茶道記』一、二九四頁

(64) 藤田美術館編『藤田美術館名品図録』(日本経済新聞社、昭和四十七年三月)には「単色図版」としてこの色紙が掲載されている(図録No.102)が、そこには「重文 十五番歌合断簡(素性) 世尊寺伊房筆」とある。

(65) 前掲『大正茶道記』一、二九四頁

(66) 前掲『茶会漫録』第八集、一八二〜一八四頁、前掲『大正茶道

記」一、二九六〜二九七頁

(67) 田山信郎『蘭葉集』(便利堂、昭和十八年三月)には、この掛物のモノクロ写真が収められている(図録No.9)。田山による付録解説に、「京都 林新助氏蔵」とあるから少なくともこの時まで林が所有していたことが確認できる(四頁)。ちなみに第一首目、第五句は「したもへをせむ」が正しい。

(68) 前掲『茶会漫録』第八集、一八三頁

(69) 前掲『大正茶道記』一、二九六頁

(70) 津村正恭著・早川純三郎編『譚海』、国書刊行会、大正六年六月、三六三頁

(71) 藤岡幸二編『松風嘉定』、藤岡幸二、昭和五年一月。その他に管見では、前掲『大正茶道記』一、六二三頁の注や、高橋義雄『近世道具移動史』(慶文堂書店、昭和四年十二月、四三七〜四三八)に略伝が記されている。

(72) 内山豊男「聴松庵大人のおん事」(前掲『松風嘉定』第四編追懐、三二〜四二頁)

(73) 野村美術館学芸部「〈翻刻〉野村得庵茶会記(五)」『野村美術館紀要』第十二号、平成十五年三月、一〇三〜一〇四頁

(74) この掛物は世に「吉野切」といわれるものである。伊井春樹編『古筆切資料集成』巻四(思文閣出版、平成二年六月、一九〇頁)には、この色紙の歌が紹介されており、同時に「松風聴松庵氏遺愛品入札目録」(京都)昭和四年一月二十一日」という記述があり、確かに松風が所有していたものであることがわかる。伊井春樹「伝後醍醐天皇筆吉野切」(『語文』四十七号、大阪大学文学部国文学研

究室、昭和五十九年四月)によれば、他に「上京神田氏所蔵品入札目録」と「遠藤千胤遺稿集」にこの色紙の事が記載されているという。『上京神田氏所蔵品目録』は、大正六年十二月三日に京都美術倶楽部において行なわれた入札に関する目録である。札元は京都の骨董商林新助であった。時期的に見てこの時の入札で松風はこの色紙を手に入れたものと思われる。

(75) 村上順二編『野村得庵』本伝上・下・趣味篇、野村得庵翁伝記編纂会、昭和二十六年一月

(76) 前掲『野村得庵』趣味篇、三〜四頁

(77) 藪内紹智「野村得庵と藪内流へ」茶人集団『篠園会』「碧雲」創刊号、野村碧雲会、昭和六十年三月、六頁

(78) 前掲『野村得庵』趣味篇、四七五〜四七六頁

(79) 「吉野切」については、小松茂美『小松茂美著作集』第二十四巻(旺文社、平成十二年三月)所収「恋部集」(五五三〜五七四頁)に詳しい。

(80) 吉野はもとより、隅田川も岡山鳥の『江戸名所花暦』(文久十年(一八七〇)刊)に「墨田川は江戸第一の花の名所」とある通り桜の名所である。また、花筏は、筏に桜の花弁がかかり、水の上を流れていく紋様である。

(81) 松風邸は大正三年、建築家武田五一(一八七二〜一九三八)の設計による洋風建築である。東山区清水にあり、現在は「順正」という料亭になっている。京都のモダン建築の一つで現在の登録文化財となっている。

(82) 長谷川時雨著・杉本苑子編『近代美人伝』(上)、岩波文庫、平

成三年七月(第五刷)、二二頁

(83) 野崎広太『らくがき』、宝文社、昭和六年六月

(84) 山下亀三郎『沈みつ浮きつ』、四季社、昭和二十七年十二月、四八〜五二頁。山下は世間でも有名な別荘好きであったから山縣に紹介されたと思われる。

(85) 前掲『茶会漫録』第十集、大正十二年八月、三一〜三八頁

(86) この歌は『拾遺和歌集』では二句目が「おつる水上」となっているので、出典としては『拾遺抄』であると判断できる。

(87) 前掲『茶会漫録』第十集、三三頁

(88) 山縣の歌が趣味の域に留まらないことは、その伝記(徳富蘇峰『公爵山縣有朋伝』や坂本箕山『元帥公爵山縣有朋』等)などによって有名である。特に彼の歌が『現代短歌全集』に数ある歌人の中から選ばれ収載されていることは、彼の歌が高く評価されていた証左となろう(井上通泰『現代短歌全集』第二巻、改造社、昭和五年七月所収「山縣有朋集」)。

(89) この茶杓の銘「窓月」は歌銘であり、茶杓の筒に山縣が歌を書き付けている。歌は「浮雲のいつしか晴れてこの夕窓に入来る月の影かな」であり、これに対し野崎は「惟ふに是れ七年前の遺詠にして今や既にこの人亡し、寔に人の身は秋の月の波に宿れる影の如く、常住不変のものならず、その命は手にむすぶ水に宿れる月影の如く、有るか無きかの憐れ果敢果なき限なれや」という感想を洩らしている(前掲『茶会漫録』第十集、三八頁)。

(90) 『益田信世氏所藏品入札』、東京美術倶楽部、大正十三年十月

(91) 故団男爵伝記編纂委員会編『男爵団琢磨伝』下巻、非売品、昭

和十三年一月、三六八頁

(92) 前掲『大正茶道記』二、六五七〜六六二頁

(93) 前掲『大正茶道記』二、六五八頁。同様の記述が前掲『男爵団琢磨伝』下巻、三七八〜三八八頁にも見える。

(94) 前掲『大正茶道記』二、六五七〜六六二頁

(95) 前掲『大正茶道記』二、六五九頁

(96) 前掲『男爵団琢磨伝』下巻、三七五頁

(97) 初釜、名残の茶など時期が決まっている場合には、それにふさわしい季節の掛物が掛けられるケースが多い。

(98) この会は益田孝が関東大震災後、一時名古屋に移住したのがきっかけで生まれた会である。メンバーは一宮在刈安賀の森川勘一郎(如春)、中島郡祖父江町の山内茂樹(飽霜軒)、中区蛭子町岡谷清治郎、中区納屋町高松定一(即是)と粕谷の五名であった(前掲『大正茶道記』二、五一六頁)。

(99) 前掲『大正茶道記』三、三九四頁

(100) 前掲『茶会漫録』第十二集、一七〇頁

(101) 名古屋商工会議所編『名古屋商工会議所五十年史』、非売品、昭和十六年二月、付録「役員表」による。

(102) 大塚松蔭編『名古屋肥料雑穀問屋組合沿革史』前編、同組合事務所、昭和四年

(103) 前掲『大正茶道記』三、三九三〜三九七頁

(104) ただし、『古今和歌集』では一首目の歌と、その前の歌に左注がある。それによると、一首目は帝(天皇)が近江采女に与えた歌の返しであるという。

- (105) 前掲『昭和茶道記』一、平成十四年三月、一八四〜一九一頁
- (106) 桂本万葉集については、前掲『小松茂美著作集』第二十二巻(平成十年五月)第五章第一節「桂宮本万葉集について」(七五〜一二〇頁)に詳しい。
- (107) 前掲『昭和茶道記』一、一八六頁
- (108) 前掲『大正茶道記』一、六〇四〜六二四頁。他に論稿として矢ヶ崎善太郎「東山大茶会の会場となった建築・庭園の所在地と造営時期―東山大茶会に見る近代数寄空間の研究―」(『日本建築学会計画系論文集』第五一五号、日本建築学会、平成十一年一月)がある。
- (109) 村上文芽「茶に親しむ人々」二十一 今井八方氏「茶道月報」一九五号、茶道月報社、昭和二年三月、二二頁
- (110) 前掲『裏千家 淡々斎遺芳集』第二巻、九一〜九二頁
- (111) 二句目は「いかに待ちみん」の誤りであると思われる。
- (112) 森暢編『新修 日本絵巻物全集』第十九巻、角川書店、九九頁
- (113) 前掲『新修 日本絵巻物全集』、九二頁
- (114) 前掲『三十六歌仙絵巻の流転』、九三頁
- (115) 森暢「歌仙絵拾遺―慶運本と藤房本―」『古美術』七〇号、三彩社、昭和五十九年四月、八五頁
- (116) 森暢『歌合絵の研究 歌仙絵』、角川書店、昭和五十三年六月(再版)、三二頁
- (117) 茶入に如心斎箱書の朝鮮唐津を、茶碗には宗入作如心斎箱書の赤染を、そして茶杓には吸江斎作の茶杓を用いている。
- (118) 前掲『三十六歌仙絵巻の流転』、一〇七頁
- (119) 道具商は勿論の事、佐々木三味がいうように淡々斎も「根っか

らの道具好き」であったから淡々斎も売手候補の一人であったかもしれない(佐々木三味『茶の道五十年』、淡交社、昭和四十五年四月、二五一頁)

(120) 前掲『茶の道五十年』、四八頁

(121) 「長生会」は、毎月交代に当番となり席を設ける会であった。昭和二年当時の会員は野村徳七、大村彦太郎、平井仁兵衛、中沢利八、松尾喜七、塚本与三次、今井貞次郎、大木喜平次、初田甚吉、奥谷秋石、日比野芳太郎、宮本儀助、藤本久兵衛の諸子であり、客員として大谷尊由、梅上尊融、湯浅七左衛門がいたという。

「蜂庵会」は、太秦広隆寺に蜂庵の建設された大正十三年の秋に出来たもので大谷尊由、野村徳七、今井貞次郎、湯浅七左衛門、長瀬伝三郎、井上利助、山口源兵衛、松尾喜七、宮本儀助、中沢利八、平井仁兵衛、梅上尊融、大村彦太郎諸子が会員として名をつらね、顧問として敷内紹智がいた。春秋二回盆をかけて数寄者を招待したという(前掲『茶道月報』一九五号、三〇〜三二頁)。

その他、松尾喜七の名は、石田旭山編『京都名所案内図会』(明治二十年六月)「鹿子商之部」(三十九丁)に「五条柳馬場東入ル松尾喜七」とみえる他、高橋敬編『京阪十大名家名譽録』(明治二十七年四月)「鹿子商」(一三頁)に同様の記述を見出すことができる。松尾が京都を代表する鹿の子商の一人であったことは間違いない。

(122) 「全国多額納税者一覽」『講談倶楽部』第二十四巻第一号付録、大日本雄弁会講談社、昭和九年一月、九八頁。納税額は昭和八年十月現在のもので、東京尚文社の調査によるものである。

(123) 前掲『裏千家 淡々斎遺芳集』第二巻、一七三〜一七五頁

(124) 内藤堯宝・有尾佐治編纂『香雪齋藏品展観図録』、藤田男爵家什器係、昭和九年三月。解説には掛物の伝来などについての記載は一切なく、ただ訳文と肖柏の略伝が記されているのみである。

(125) 重餅形の伊賀を水指に、そして茶入には啐啄齋箱書の銘「宮柱」という黒の楽茶碗を用いている。いずれも新席を祝う気持ちを表現したものである。

(126) 淡交新社編集部編『無限の譜 淡々齋宗室宗匠追悼録』、淡交新社、昭和三十九年十一月、一三八頁

(127) 前掲『無限の譜 淡々齋宗室宗匠追悼録』

(128) 『比翼集 無限齋・清香院のふまれし道』、淡交社、平成九年十月

(129) 茶道資料館編『無限齋・清香院の遺芳』、今日庵、昭和六十一年九月

(130) 『裏千家 淡々齋遺芳集』第一巻（器物・茶室編）、昭和四十年十一月、同第二巻（自会記・他会記編）昭和四十一年十二月。いずれも淡交新社より発行。

(131) 前掲『裏千家 淡々齋遺芳集』第二巻、一三六〜二四〇頁

(132) 『和比』第四巻第六号、わび社、昭和十五年六月、三六頁

(133) 前掲『和比』、四二頁

(134) 前掲『茶の道五十年』、一六〇頁。『集古十種』は松平定信が編纂した名物集である。寛政十二年（二八〇〇）刊。ここではこの色紙の持主は中川家となっている。中川家は豊後国岡藩の大名家である。小松茂美によると、この色紙は『集古十種』の他、『江戸拾遺』という書物にも「平井家蔵」となっているという。またこの色紙は

大正六年九月十七日の本荘子爵家入札（於東京美術倶楽部）において一万三百円で落札されたという（前掲『小松茂美著作集』第二十四巻、六〇八〜六一二頁）。

(135) 『備前老人物語』には利休が「小倉色紙」の茶会に出席した時の様子が記されている。この時の色紙は「ほととぎすなきつるかたをながむれば……」であった。尚、『淡々齋茶会記』にはこの色紙が「利休居士から津田宗及に伝来」とあり、この「小倉色紙」が利休にまつわる由来をもつものであったことがわかる。ただしこの伝承の出典はわからない。

(136) 筆者は前論稿で利休二百五十回忌（4）に用いられた恋歌の掛物は、恋歌と意識しないで掛けられた旨のことを述べた。しかし、利休二百二十回忌（3）、三百五十回忌（20）の際には、恋歌ということを意識して故意に用いられたものと考えられる。それから推すと、利休の二百五十回忌も恋歌ということを知りながら用いた可能性の方が高いと思われる。したがって以後は、4の茶会も恋歌を追善の意味を表すために用いられた恋歌であったと判断し、論を進めることにする。

(137) 谷端昭夫『近世茶道史』（淡交社、昭和六十三年十二月）第二章第一節四「品宮常子内親王―女性と茶の湯（一）」。常子内親王とその日記『无上法院殿御日記』に関しては、瀬川淑子『皇女品宮の日常生活―『无上法院殿御日記』を読む』（岩波書店、平成十三年一月）に詳しい。この他当時、公家社会の女性たちが茶会に参加したり、あるいは催したりしたことが籠谷真知子『女性と茶の湯』（淡交社、昭和六十年一月）にも記されている（一一九〜一二三

- 頁)。
- (138) 村井康彦「利休七哲・宗旦四天王」、淡交社、昭和四十四年十一月、二二六頁
- (139) 『めざまし草』は、近世文学書誌研究会編『近世文学資料類従』仮名草子編(十一)(勉誠社、昭和四十八年七月)に影印版がある他、守随憲治編『近世国文学』第一輯(千歳書房)に活字翻刻されている。該当箇所は、前者では三二四頁に、後者では、二三頁にある。
- (140) 早川純三郎編『近世文芸叢書』第十、国書刊行会、明治四十四年九月、三九八頁。ここで言う「むかし」がいつ頃を指すかは定かではないが、恐らく漠然と元禄、あるいはそれ以前の遊女を指しているのではなからうか。
- (141) 頼原退蔵・輝峻康隆・野間光辰編『定本西鶴全集』第十四巻、中央公論社、昭和三十八年八月四版、三二〇頁
- (142) 早川純三郎編『徳川文芸類聚』第二、国書刊行会、大正三年六月、五四三〜五四六頁
- (143) 原田伴彦「町人茶会」林屋辰三郎・永島福太郎編『図説茶道大系』第三巻、角川書店、二五四頁。
- (144) 原田伴彦「風俗史・経済史から見た茶道の人脈」『原田伴彦論集』第五巻、思文閣出版、昭和六十一年五月、二三七頁。ここには、先に挙げた『庭訓染匂車』も「茶席が男女の恋愛の場として利用されていることが示され」た例としてとりあげられている(二三七頁)。
- (145) 『刀自袂』については、写本が東京国立博物館、静嘉堂文庫美

術館、京都大学、今日庵文庫(裏千家)に残されている他、彦根城博物館に井伊直弼書写本が残されている。内容等については、前掲『近世茶道史』第三章第一節四「大口派の展開―女性と茶の湯(二)」の他、谷端昭夫『刀自袂』にみる女性の茶の湯(淡交)第五十七巻第三号、平成十五年三月)に詳しい。今、後者の紹介記事に則して成立事情について述べておくと、著述のきっかけは享保六年(一七二一)頃越後の客人が樵翁を訪れ、女性用の茶書がないので家への土産としてそれを書いて欲しいと要請されたことによるという。

- (146) 彦根城博物館蔵『刀自袂』における該当部分の記述は、「第一婦人ノ男タル者ニ手渡スルコト有ヘカラス茶碗モ下ニ置テ渡スヘシ」、「婦人ヒトリハ呼ヘカラス 女郎花うしろめたくも見ゆる哉あれたる宿にひとり立れと」である。今後者についてのみ述べると、記述内容から明らかのように、彦根城博物館本では婦人を招くことについてのみの注意書きがなされている。ところが、京都大学蔵本の該当部分を見ると女性が亭主を務める場合、男性一人を招いてはいけないという内容の記述も見られる。つまり、男女が一对(一亭一客)の茶会を禁じているのである。彦根城博物館本は京都大学蔵本と同内容のものから、婦人に関する注意書きのみを抜粋したものである。本来は京都大学蔵本に記されている内容のものであったのは確かである。ちなみに、引用歌は『古今和歌集』巻第四(秋歌上)に収載されている兼覧王(生年未詳)九七七)の歌である。本来は秋の歌であるこの歌を、樵翁は女性が入ることで「嫌疑」がかかることを戒める歌として用いている。

(147) 女性と茶道の関係について述べたものに、前掲『女性と茶の湯』がある。この中で籠谷氏は、千利休の後妻宗恩が茶道に通じており、子の少庵に手解きをしたのではないかと推察しているが、その是非に就いては現在のところ証明できる史料が全くない状態である。女性の茶会参加は、当時は稀であったが、それがかえって恋歌忌避に繋がった可能性も考えられなくはない。なぜなら、茶会に参加する女性が少ないということは、女性が参会したとしても、男性数人（一人以上）の中に女性が一人だけという構成になる確率が多いからである。その場合、恋歌を掛けたとすると大口樵翁が恐れた「嫌疑」がかかり易いからである。こうした誤解を生まないために、恋歌を忌避するような条項が制定された可能性もあることを指摘しておく。

(148) 西山松之助『家元の研究』『西山松之助著作集』第一巻、吉川弘文館、平成二年八月第二刷、一二九～一三〇頁

(149) 拙稿「恋歌の消滅―『百人一首』の近代的特徴について」『日本研究』第二十七集、平成十五年三月

(150) 「茶禅一味」観の成立過程と成立要因については、林屋辰三郎他編『角川茶道大事典』（角川書店、平成二年五月）、あるいは井口海仙他監修『原色茶道大辞典』（淡交社、昭和五十年十月）に詳しい説明がある。

(151) 熊倉功夫「近世初頭における大名茶の性格―小堀遠州と加賀前田家」芳賀幸四郎先生古稀記念論文集編集委員会編『芳賀幸四郎先生古稀記念 日本文化研究』、笠間書院、昭和五十五年五月、一八九～一九〇頁

(152) 野村瑞典『定本 石州流』五、光村推古書院、昭和六十年八月、四五頁

(153) 小堀宗実『茶の湯の不思議』、生活人新書、平成十五年六月、二二二頁

(154) 熊倉功夫氏は『茶の湯の歴史―千利休まで』（朝日選書、平成二年六月）において、『百人一首』に使われた「わび」という言葉がいずれも恋歌に使用されていることを指摘した後、「どうやらわびという感覚はことに恋と深い縁があつて、恋が実らない淋しさ、無念さという気分がわびであつた」としている（一三一～一三二頁）。また、前掲『歌ことば歌枕大辞典』の「侘ぶ」の項には、その説明として「激しい恋の嘆きや苦悩の末に、気力が萎えて沈み込む状態を示すのが原義」とあり、また「用例の大半は恋歌である」といった記述が見られる（九八七頁、中村文氏執筆担当）。これらの事から「わび」という言葉が恋歌と非常に密接な関係にあることがわかるであろう。ただし、熊倉功夫氏によると「わび」が美意識に昇華したときに、恋という要素が落ちてしまったという。その時代は東山時代から天文年間（一五三二～一五五四）頃にかけてであるという（「わびとすき」西山松之助他編『歴史の視点』中巻、日本放送出版協会、昭和五十年三月、三一頁）。また、芳賀幸四郎氏が、文政十一年（一八二八）に刊行された茶書『禅茶録』（寂庵宗沢著）の「それわびとは、物みな蹉跎して不如意なるの意なり」という用例を引いて説明したように、一般に「わび茶」という場合の理解としては、「物質的には貧しく不如意であるが、精神的にはかえって豊かで如意自在な境涯であり、またそれに根ざした美のこ

と」とされている（『わび茶の研究』、淡交社、昭和五十三年二月、四九頁）。そしてこれに順ずるものが多い。だが、たとえそれが物質的な「不如意」を意味するとしても、千家流茶道が標榜してきた「わび茶」の本質とは、茶道具など表面的な物質の「不如意」ではなく（勿論視覚的にはそのように映るし、そのような意味も含有されているのであろうが）、利休という存在の「不如意」にあるのではなからうか。

（155） 谷川徹三『茶の美学』、淡交社、昭和五十五年十月再版

（156） 藤原銀次郎述・石山賢吉記『思い出の人々』、ダイヤモンド社、昭和二十五年四月、三〜六頁